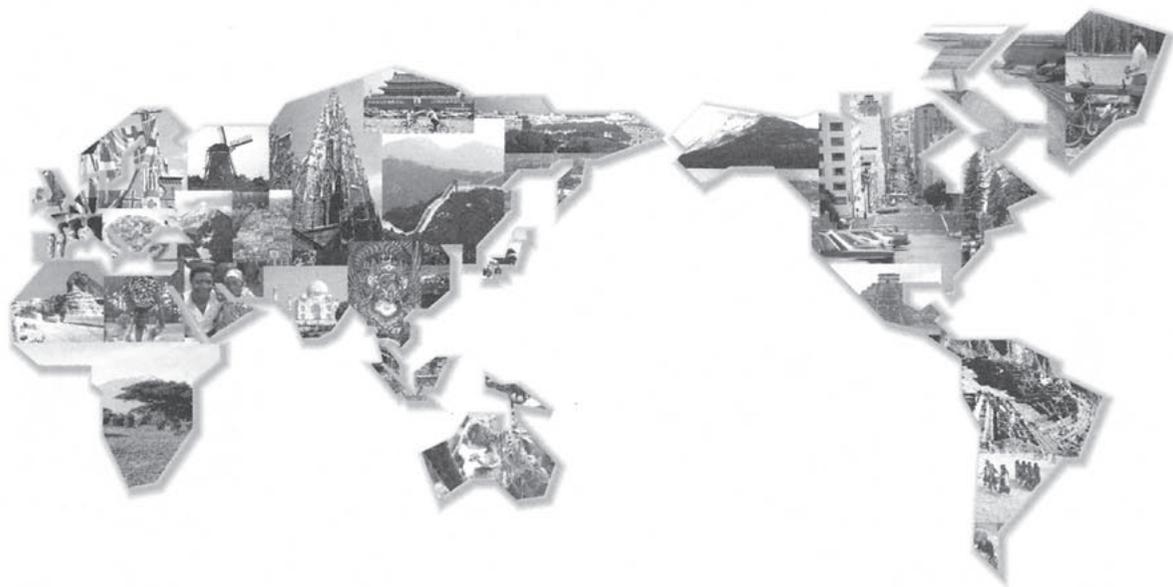


JICA横浜 海外移住資料館

# 研究紀要

1

平成14～16年度



---

発刊にあたって

研究紀要

研究紀要の創刊に寄せて Ⅰ. 特別講演 Ⅱ. 論文 Ⅲ. 研究ノート

---

---

# 『JICA横浜海外移住資料館研究紀要・館報』 の発刊にあたって

平成14年10月、横浜みなとみらい21地区に所在する独立行政法人国際協力機構横浜国際センター（JICA 横浜）内に併設された海外移住資料館が開館されました。

海外移住資料館では、「われら新世界に参加す」を基本テーマに、新天地で新たな文明の形成に参加・貢献した移住者・日系人の足跡を展示品や収集資料を通じて広く一般の方々に紹介しております。また、最近では、校外学習や修学旅行の機会に国際理解や多文化共生について考えていただく場として活用していただくように、教育プログラムの充実にも努めております。

こうしたなかにあって、海外移住資料館開館以来の調査・研究、資料収集、展示、教育普及といった私どもの活動成果と関係者の方々の研究成果を広く国内外にご紹介いたしたいと考え、「研究紀要・館報」を発刊することといたしました。

この「研究紀要・館報」は今後とも発行する予定ですが、日本国内及び海外にわたり関係者の皆様の海外移住に関する研究等のお役に立てることが出来れば幸いです。また、関係者の皆様からの寄稿を心からお待ちしております。

海外移住資料館におきましては引き続き諸活動の充実を図るとともに、関係する諸機関、諸資料館との連携の強化を推進いたしたいと考えております。関係者の皆様に今後ともご支援・ご協力・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2006年3月

独立行政法人国際協力機構  
横浜国際センター 海外移住資料館  
館長 沢 地 真

---

---

# 研究紀要

<目次>

『研究紀要の創刊に寄せて』

国立民族学博物館教授・海外移住資料館運営委員

中牧 弘允

## I. 特別講演

海外移住資料館 開館1周年記念特別講演会 …………… 1  
「日本人と新世界」

講演者

国立民族学博物館名誉教授・顧問、JICA横浜海外移住資料館特別監修者

梅棹 忠夫

## II. 論文

マルチメディア情報展示システムの構築…………… 17  
—国際協力機構海外移住資料館統合情報展示システムを例として—  
国立民族学博物館先端人類科学研究部助手、海外移住資料館運営委員 山本 匡  
徳島大学総合科学部助手、海外移住資料館元研究員 福田 直毅

海外移住資料館を活用した国際理解教育の授業づくり …… 35  
—教師研修を通してみた移民学習の可能性—  
中央大学教授 森茂 岳雄  
京都ノートルダム女子大学専任講師 中山 京子

## III. 研究ノート

北米タイコの新時代…………… 61  
—第二世代の登場と新しいコミュニティの広がり—  
JICA 横浜海外移住資料館研究員 小嶋 茂

海外移住資料館の写真…………… 67  
—「六世が誕生したハワイのビッグ・ファミリー」にみるマルチ・エスニック化する家族模様—  
大分県立芸術文化短期大学国際文化学科講師、海外移住資料館元研究員 城田 愛

---

## Preface to the Research Report

Hirochika NAKAMAKI, Steering Committee Member, Japanese Overseas Migration Museum; Professor, National Museum of Ethnology

### I. Special Lecture

Commemorating the First Anniversary of the Japanese Overseas Migration Museum

“Japanese and the New World”

Tadao UMESAO, Professor Emeritus, Special Advisor, National Museum of Ethnology; Special Advisor, Japanese Overseas Migration Museum

### II. Articles

Developing Multimedia Information Exhibition System: Focus on the Computer Integrated Information Exhibition System Implemented at the JOMM

Tadashi YAMAMOTO, National Museum of Ethnology

Naoki FUKUDA, The University of Tokushima

Development of Learning Programs and Materials for International Education in the Japanese Overseas Migration Museum: Using the Teacher Training Workshops for Migration Studies

Takeo MORIMO, Chuo University

Kyoko NAKAYAMA, Kyoto Notre Dame University

### III. Notes on Research

The New Era of North American *Taiko* : Arrival of the Second Generation and Spread of a New Community

Shigeru KOJIMA, Japanese Overseas Migration Museum

Hawaii's Sixth Generation of Japanese Migrants and Multi-Ethnic Family on the Photo at Japanese Overseas Migration Museum

Chika SHIROTA, Oita Prefectural College of Arts and Culture

---

---

## 研究紀要の創刊に寄せて

海外移住資料館が3年あまりの準備ののち2002年10月に開館し、そして『研究紀要・館報』の第1号が開館から3年をへてようやく発刊のはこびとなりました。展示のオープンとその後の活動にむけて投入された学術的エネルギーの一端がこうして文字情報として開示されることとなります。資料館の存在意義は研究の裏づけがあってこそ光輝をはなつものであり、研究紀要の意味もその点にかかっています。本号がそれにこたえるものであることを願ってやみません。

開館1周年の記念講演会は特別監修の国立民族学博物館顧問である梅棹忠夫先生をお招きしておこなわれ、その内容が巻頭を飾っています。それは「われら新世界に参加す」という展示の基本理念をあらためて確認するよい機会となりました。そればかりか「日本人、あるいは世界全体の財産として、とくに若い人に見ていただきたい」とのメッセージをいただきました。その意味で、本号所収の森茂岳雄先生と中山京子先生の報告は当資料館を活用した移民学習、ひいては国際理解教育の授業づくりに資するものであり、義務教育をはじめとする学校関係者に参考としていただければさいわいです。

また当資料館はマルチメディア情報展示システムの構築に際し、展示の情報検索のみならず、日本人移民にかかわる国内外の資料館や関連施設とのネットワークづくりを当初から念頭におきました。国立民族学博物館の山本匡先生を中心にこれまでも意欲的に取り組んできたつもりですが、所収の総括的レポートを機に、コンテンツのいっそうの充実をはかっていく所存です。

論文や研究ノートには常設展示や企画展示にかかわった研究員からの報告もふくまれています。小嶋茂研究員は現役ですが、常設展示の企画・実務を分担した福田直毅・城田愛の元研究員はいまは大学でその経験を生かしています。

初代学術委員長をつとめた阪田安雄先生は本務の大阪学院大学での職務に専念するようになりましたが、本資料館の創設とその後の展開における先生の学術的な貢献は、本号をふくめ、はかり知れません。

最後に、創刊号の刊行にかかわった関係者諸氏にお礼を申し述べるとともに、次号以降のさらなる発展を期したいとおもいます。今後とも関係各位のご支援のほどをよろしくお願い申し上げます。

国立民族学博物館教授・海外移住資料館運営委員

中 牧 弘 允

---

## 海外移住資料館 開館1周年記念特別講演会

### 「日本人と新世界」

講演者：梅棹忠夫（国立民族学博物館名誉教授・顧問、  
JICA横浜海外移住資料館特別監修者）

聞き手：中牧弘允（国立民族学博物館教授、海外移住資料館運営委員）

司会：小森毅（独立行政法人国際協力機構横浜国際センター所長）

挨拶：鈴木信毅（独立行政法人国際協力機構理事）

#### 開会の挨拶

小森 ただいまより「JICA横浜国際センター海外移住資料館開館1周年記念特別講演会」を始めさせていただきます。私は当横浜国際センター所長兼海外移住資料館館長で本日の司会を務めさせていただきます小森毅と申します。どうぞよろしくお願いたします。

それでは、まず主催者を代表いたしまして、独立行政法人国際協力機構理事の鈴木信毅より一言ごあいさつ申し上げます。

鈴木 皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました国際協力機構JICAの鈴木信毅と申します。主催者ということで、一言ごあいさつ申し上げたいと思います。この海外移住資料館は、2002年の10月4日、ちょうど1年前に業務を開始したわけですが、関係の皆様のご支援のもとに、本日をもって1周年ということになるわけですが。

本日の特別講演会を開催することができますのも、当資料館の特別監修者としてご協力いただきました国立民族学博物館顧問の梅棹忠夫先生をはじめ、開設準備に引き続きまして運営委員会を設けておりますが、そこでご指導いただいております大阪学院大学の阪田安雄先生、それから国立民族学博物館の中牧弘允先生、山本匡先生はじめ関係者の皆様のご尽力のたまものでもございまして、心より感謝申しあげる次第でございます。

ご案内のように、私ども国際協力機構は、その前身であります国際協力事業団ならびに海外移住事業団の時代を含めまして、戦後、中南米等へ移住された方々にさまざまな支援をおこなってまいりました。国際協力の中でも、特に私どもJICAが担当します「人と人を通じた協力」というのは、開発途上国の人々のより良い社会づくりに自ら参画して、共に学び共に汗をかくことで始まります。こういう観点からすれば、かつて日本からフロンティア・スピリットを持って海外へ移住し、異文化の中でその国の社会づくり、国づくりに参画された移住者の方々は、いわば「国際協力の先駆者」とも言えるのではないのでしょうか。

私どもの資料館は、こういう移住者の方々の貴重な足跡<sup>そくせき</sup>を後世に伝えたいということで、梅棹先生のご指導のもと、「われら新世界に参加す」を基本テーマとして昨年より開設、運営してまいりました。



た。当資料館は、国内で初めての海外移住に関する総合的な施設として、移住者や日系人の心のよりどころ、ならびに地球市民の学習の場として、新たな拠点としての役割を担っております。

これまで1年間で国の内外から1万7670人。1日平均60人ぐらいの入館者がございます。最近では小・中・高校生の来館も増えておりまして、私ども教育プログラムの開発、あるいは案内ボランティアの養成といったサービス機能の強化に努めているところでございます。

移住された方々が、その国でどのように活動され、また子孫に何を残そうとされたのか。その足跡の一部ではございますが、この横浜の資料館でたどることにより、多様化する国際社会の中で、われわれはいかに参画すべきなのかを考える機会を当資料館が提供し、日本社会の活性化への一助になるものと確信しております。

話は変わりますが、私どもJICAでございますが、既にご承知の方も多いかと思います。2003年10月1日をもちまして、従来の「国際協力事業団」から「独立行政法人国際協力機構」と名称を改めました。「ジャイカ」というカタカナ読みは変わりません。新しいロゴマークも新しい機構の発足と共に作られております。私どもは「より良い明日を世界の人々と」という合言葉で決意新たに業務に邁進いたしているところでございますので、これまでの国際協力事業団へのご支援に感謝申し上げますと共に、新しい国際協力機構へのご支援・ご指導をよろしくお願い申し上げます。

本日は「日本人と新世界」というテーマで梅棹先生にご講演をお願いしておりますが、この講演会を機会に海外移住への関心がより深まりますれば幸いに存じます。本日の講演は、私自身もたいへん楽しみにしております。梅棹先生、どうぞよろしく願いいたしたいと思っております。

以上をもちまして、開会のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました（拍手）。

## 後援者および聞き手の紹介

**小森** ここで、ご講演の先生方を簡単にご紹介させていただきます。本講演会の講師をお務めいただきます国立民族学博物館顧問の梅棹忠夫先生をご紹介します。先生は戦前に内蒙古の調査に従事され、1950年代半ばから70年代にわたりアフガニスタン、パキスタン、インド、東南アジア、アフリカ、ヨーロッパなどを調査され、1957年には「文明の生態史観」を世に発表されました。この梅棹史観とも言うべき「文明の生態史観」は、学界はもとより多方面に大きな知的衝撃を与えると共に、当時の若者に探検心と世界雄飛の念を起こさせ一世を風靡いたしました。かく申す私もその影響を受けまして、1年間世界放浪をやったものでございます。

その後、京都大学人文科学研究所教授を経て、1974年から約20年にわたり国立民族学博物館の初代館長をお務めになり、その後、顧問となられました。また1978年には、日本人のブラジル移住70周年を記念して現地で開催されたシンポジウムで、海外移住を「新世界の文明形成への参加」と唱え、日系移住者はもちろんのこと、われわれ援助関係者にも自信と誇りを与えてくださいました。

この先駆的な理念は、当資料館の基本テーマとして息づいておりますし、たいへんに素晴らしい資料館を持たせていただきましたのは、梅棹先生のおかげと申しても過言ではありません。先生は1988年に朝日賞をご受賞、1991年に文化功労者となられ、1994年に文化勲章、1999年に勲一等瑞宝章を受章しておられます。

また、聞き手をお引き受けいただきました国立民族学博物館教授の中牧弘允先生でございますが、1995年に国立民族学博物館教授になられ、その後、同博物館先端民族学研究部長を歴任、現在は民族文化研究部で後輩の指導に当たられる一方、ブラジルの宗教に関する地域研究や企業内のさまざまな儀礼・行事を文化としてとらえた人類学的研究など、広範囲な分野において精力的に探求され、著書も数多く出版しておられます。

当資料館の開設準備に際しましては、実行委員の一人として館の実際の設計に携わっていただきました。現在は運営委員の一人として、日ごろ資料館の運営に関しご指導をいただいております。それでは両先生、よろしく願い申しあげます。

**中牧** ただいまから梅棹先生の講演に入りたいと思いますけれども、私は「聞き手」とさせていただきたいと思います。まず最初に、梅棹先生のほうから皮切りのごあいさつをいただければと思います。よろしく願いいたします。

**梅棹** 梅棹でございます。実は、こういう機会には私は昔から完全原稿を用意してくる習慣になっております。ところが、もう20年近くなりますが、私は失明いたしまして現在盲人でございます。原稿を書くどころか、メモを書いたり読んだりすることもできない状態でございます。ですから、今回は中牧教授の「誘導尋問」にお答えするというかたちでお話を進めたいと思います。中牧さん、どうぞよろしく願いします。

**中牧** 「誘導尋問」ということですが、私は大学で文化人類学を最初に学んだ時に、先生から人類学のフィールドワークでは誘導尋問をしてはいけないと言われてまして（笑）、ずっとそれを守ってまいりました。きょうは、しかし、その禁を破って、「誘導尋問」をさせていただきたいと思いません。

これも私が人類学で学んだことで、インタビュアーというのは、インフォーマントが自然にどんどん話をしてくれる、それが一番いいのだと言われておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは最初の尋問から始めます（笑）。まず、梅棹先生にこの海外移住資料館の印象をおうかがいしたいのですが、梅棹先生は半年余り前でございましたでしょうか、ことし（2003年）の2月の末にここの展示をご覧になりました。その時の印象を少しお話いただければと思います。

**梅棹** 私は二十数年前から博物館の仕事をやっておりまして、いちおう博物館の構造や機能を承知しているつもりでございます。ここのようなものができることはだいぶ前から聞いておりました。たいへん結構なことだと思っておりました。しかし、果たしてどういうものができるか、少しはらはらしていたのです。ことしの2月に「一度見に来てくれ」というお誘いを受けまして、まいりまして、拝見いたしまして、非常に安心したと申しますか、心強く思った次第でございます。これはいいものができた、立派なものができたとよろこんでおります。

ぜひとも、できるだけたくさんの人たち、日本人とは限りません、世界各国の人たちに見ていただいて、海外移住の意味をあらためて考えていただくきっかけになればよいと思っております。しかし、よくこれだけのものをお集めになりました。これはけっして横浜のものではないです。全日本のもの、あるいは、日本を超えて世界じゅうのもの、財産になります。ますますこういうものが拡大し、大きな機能を発揮していかれることを希望しております。

## 魂を感じたテーマ「われら新世界に参加す」とその展示

**中牧** 梅棹先生はこの資料館をたいへん詳しくご覧になりました。入口の所からシンボル展示の山車を経て歴史展示、そして「新世界に参加す」。またコンピューターを使った情報展示。その時にスタッフの方が写真を撮られたのですが、梅棹先生の表情がものすごく豊かだったので、私たちはたいへん印象深く思っております。

そのあと、梅棹先生に講評をいただきましたが、これは皆さんのお手元にご覧いただけますレジユメをご覧いただければと思います。JICAの横浜センターが発行しております『JICA ロード・よこはま』の第2号に梅棹先生が資料館をご覧いただいているその写真と共に、コメントが載っております。

梅棹先生の記憶を呼び覚ますために読ませていただきます。「資料館は、下手をするとモノだけ並べてそれで終わりということになりかねない。しかし、この資料館の展示には魂を感じ、とても感動しました。『われら新世界に参加す』というテーマのもとに展示されたこの資料館を訪れた人々は、日本移住者の歴史を知ることにより日本人を見直し、自信を持つことができるのではないかと思います」とあります。梅棹先生のほうから「魂を感じ」と言われて、私ども関係者は本当にうれしかったのです。

**梅棹** 私は海外でも博物館を手がけたことがございます。一番力を入れましたのがブラジルのサンパウロにあるブラジル日本文化協会のブラジル日本移民資料館です。最初はサンパウロ大学教授の齊藤広志さんから相談を受けまして、構想、そのほかやり方について、ブラジルではだれも博物館をやったことがないので指導してくれと言われました。サンパウロに2度行きましたが、行くとかかなり長く滞在しまして、博物館づくりのお手伝いをしたのです。その結果、非常にいいものができました。

次々とこういうものを日系の移住者の集団がおられる所でつくっていただきたい。それに対応して、日本国内でも当然センターが必要だと思っておりましたら、ここに立派なものができまして、たいへんよかったですと思っております。

**中牧** その時に、私どもはありがたいお言葉をいただいたと同時に、もう一つ頭の痛い課題を突き付けられました。それは「新世界に参加す」というコーナーがあるのですけれども、梅棹先生から、「主語がない」と言われました。「だれが新世界に参加したのか」と言われました。これは、もともと梅棹先生がサンパウロに呼ばれて、各地をお回りになって、そしてつぶさに移民社会、移住者の集団と接した時の感想といいますか、そこから導き出されたテーゼだと思うのです。そのあたりの経緯を少しお話しただければと思います。

**梅棹** 私はペルー、ブラジル、パラグアイなどをかなり歩いているのですけれども、移住者の皆さんは、意外なことですが、自分たちはいったい何であったのかというはっきりした自覚をおもっていない。いろいろのいきさつがあったと思うのです。日本人の海外移住が始まってからほとんど100年になりますけれども、その間、自分たちはいったい何であったのか、いろいろな見方があるようです。

日本国内でもいろいろあります。海外移民の人たちを日本人はどう考えて送り出してきたのか。一つのひどい見方があります。それは「日本が人口過剰で困っている。だから余剰の人口を海外に捨てに行くのだ」という、いわば「棄民」です。「ブラジル移民」ではなく「ブラジル棄民」だということです。

そういう意識があって、石川達三という人が『蒼氓』という小説を発表したのです。これにはブラジル移民の悲惨な状況が書かれております。これでいっぺんに日本国内で評判を落とした。評判と申しますか、一種の「棄民」という考えが広がってしまった。

ところが、むこうに行ってみますと、とんでもない。棄民どころか堂々たるものです。たいへんよく現地に根づいて繁栄しておられる。向こうの現地の人たちもおっしゃっておりました。「いっぺん、あの小説家に来てもらって、現在の状況をよく見てほしい。そうすれば書かれたものとまったくちがったように書き直さなくてはならないだろう」ということです。実際そうだと思うのです。大成功なのです。

#### 日本の海外移住の明暗——満蒙開拓と南米日系社会

**梅棹** 率直に言いまして、日本の海外移住の歴史の中で非常に暗いものがあります。一番惨憺たる失敗は、満州・蒙古、満蒙の開拓移民です。それを除いて、そのほかの、ハワイ、ブラジル、パラグア

イ、ペルーというような所は大成功であったと思っております。よく現地に定着して、繁栄をしている。

最近、日本でももてはやされている文明論の一つにサミュエル・ハンチントンというアメリカの人が書いたものがあります。「日本文明というものは親類がない文明、孤立した文明」ということを『文明の衝突』という本の中で書いている。

ところが、私が行ってみると、これは親類ではないか。たとえば、サンパウロの日系社会を「コロナ」といいます。日系コロナ社会、このようなものは完全に日本の親類です。いわば、日本のある村の中で、子供の時に自分のおじさんが海外へ行ってしまった。どうしているかと訪ねていってみますと、実際おじさんは大成功で隆々と栄えている。それを見てびっくりしたというような感じをもったのです。

実際、おじさんという親戚が海外で見事にやっている。彼はいわゆる日本人ではないです。もちろん、現地に入ってしまったってブラジル人です。そうなんですけども、きちんとそこで日本文明に非常によく似た新しい文明を展開して、成功しているということだと私は見ているのです。

**中牧** その時のテーゼといいますか、日本移民の基本理念「われら新世界に参加す」が、サンパウロにありますブラジル日本移民史料館には掲げてあります。しかし、このテーゼがもっとも有名になったのは、ブラジル移住の70周年記念の講演に梅棹先生が招かれて行かれた時だと思います。おそらく、この会場にもその講演を実際に聞いた方は何人もいらっしゃるのではないかと思います。

**梅棹** あの時に行ってみたら、現地におられる日系人の皆さんが、意外に自分たちの位置というか文明的な意味というものをわかっておられないのではないかと思います。まるで極東から押し掛けていった人たちが、招かれざる客というかたちで割り込んできたという見方、ひょっとしたら、ヨーロッパから来た人たちはそういう考えを持っていたかもしれない。日本人がそう思っている。それはたいへん困るのではないか。

## 新世界の新文明

**梅棹** そこはまさに新しい社会、新世界です。新世界に新しい移住者が入ってきて、新しい文明をつくった。スペイン、ポルトガル、イギリス、フランス、ドイツなどが新世界に乗り込んでいった。そこで新しい文明をつくった。日本も全くおなじことをやったわけです。ドイツ系、イギリス系というような人たちと同等の立場で日系人は新文明の形成に参加したのです。

「そう思ったらどうですか」ということを私が提唱したのです。その考えは現地の日系人の人たちに非常に歓迎されました。それまでそういう考えがなかったのが不思議なのです。何となく肩身の狭いといいますか、おどおどとした態度が見えたのです。それで、「何をおっしゃるのだ、あなた方はまさに新文明をつくった人たちではないか」という一種のアジテーションをやってきたわけです。これはまさにたいへん喜ばれました。

そのほかにもどんどん日本人の海外移住が始まって進んできました。みんなそこで新しい文明に参加しているのです。日本から棄てられたものでもないし、現地に割り込んだものでもない。新世界は人類全体の宝物です。けっして最初の移民、ポルトガル人やスペイン人のものではない。アングロ・アメリカといいますか、イギリス人のものでもない。人類全体のものなのです。そこへいくつかの民族集団が入って行って、新しい文明をつくった。それだから新世界なのです。

新世界でそういう新文明をつくった。日系人もドイツ人やフランス人、イギリス人、ポルトガル人、スペイン人などと肩をならべて共同して、新しい文明をつくることに参加したのだ。この意識でいいと思うのです。さいわいこの考えはたいへんすんなりと受け入れられまして、ここ横浜の移住資料館

もまさにそういう理念で貫かれているように思います。

移民の人たちを何と呼ぶか。ふつう「日系人」と呼んでおります。日系人でいいと思うのです。日本人ではないです。できたものは日本文明のコピーではないです。しかし、非常によく似た親戚筋のものができております。特に、一番印象が強いのはサンパウロの場合ですけれども、サンパウロを中心とする地域には、本当に日本の親類文明があるのです。

もう一つ、日本は今から100年ほど前に、国を開いて新しい文明を日本国内でつくってきたわけです。20世紀最大の文明史家といわれているイギリス人のアーノルド・トインビーが、日本文明についておもしろい論評、解釈を書いているのです。

彼は1956年でしたか、日本に来て2カ月ほど旅行して、その時に北海道に行っているのです。北海道に行って、特にヨーロッパ型の酪農を見て非常に感銘を受けたらしい。そして、日本文明の本質および行方について、「日本文明は転向者である。日本古来の日本文明からヨーロッパ文明へ転向したのだ。その一つの象徴的な例を北海道の酪農の人たちにおいて見た」というのです。「日本は転向者である」というのが、トインビーの日本文明の見方なのです。

それは少しちがうのではないかと私は思っております。たしかに、日本は19世紀から急速にヨーロッパのものを取り込んで発展いたしました。しかし、けっして日本はヨーロッパ文明に転向したのではないです。日本は日本の独自のものをちゃんともっております。そして、北海道は見事にそれなりに日本文明のプリンシプルにしたがって開拓され、新しい文明のタイプをつくったものです。ブラジル、北米もそうですけれども、日本人が集団で定着してやったものは本当に新しい文明です。それは日本文明に根を下ろしながら、しかも非常に新しい親類文明をつくっていった。私は日本の海外移住はほぼ成功したと見ております。特にハワイ、ブラジル、ペルーなどはたいへんうまくいっていると思います。

### 国内の新世界——北海道独立論

**中牧** ただいま北海道の例を出して南米などと比較されたわけですけれども、実は国内に新世界がある、北海道はまさに日本における新世界であるという立場から、ご存知の方も多いと思いますが、梅棹先生は「北海道独立論」という論文をかかつて『中央公論』（1960年5月号）に発表されました。これは『日本探検』と言う本の一つの章になって、もちろん「梅棹忠夫著作集」の第7巻『日本研究』にも収められております。

その中で、「北海道はなぜ独立できないのか」という問題意識にたち、「北海道は日本人にとっては新世界だった」という論を展開して、トインビーに対する一種のレスポンス、あるいは反論を展開しています。そこで米づくりに固執した日本人についての記述があるのですが、印象深く思ったのは、北海道にアジアで初めての共和国ができたという、榎本武揚が樹立した共和国です。ああいうものがパラレルな現象として新世界には見られるのだという指摘もたいへん刺激的でした。

**梅棹** 函館で榎本武揚以下旧幕臣の人たちが、江戸を追われてあそこに立てこもった。それで独立した。独立宣言をしております。そして実際、独立の祝砲・大砲をぶっ放して各国の領事館、大使館の人たちも全部事実上の独立国として承認しているのです。函館の在日外国人たちがそういう祝福を捧げてくれたという事実があります。

ちょうどアメリカ大陸、イギリス、フランスがそうですが、早くから開拓して新しい新世界をつくった。日本もよく似ている。時代が少し下がりますけれども、やはり未開の土地に入っていった新しい文明をつくった。

ついでに申しますと、アメリカ大陸はイギリス人が入っていった時に、原住民がいたのです。アメ

リカン・インディアンと呼ばれる人です。日本人が北海道に入っていった時にも、ちゃんとそこに先住民がいたのです。いわゆるアイヌの人たちです。アイヌの人たちとアメリカン・インディアンとは、文明史上、位置が同じなのです。そこへ日本人が入っていった。それが18世紀ぐらいから始まって19世紀に進行したわけですが、日本は同じことをもういっぺん、今度は南米でやったのです。

そういうことを見たら、一連の動きが非常によくわかる。日本の歴史の一つの解釈です。そこで、日系人がたくさんブラジル、アルゼンチン、ペルーというところに繰り出して、そこに新しい文明をつくったということだと私は考えております。

**中村** その点で、榎本式揚の試みというのは、短期間についたわけですが、徳川幕府の幕臣を率いて徳川家の子孫を大統領に据えようというような試みは、実はブラジルでも似たようなことがあったという梅棹先生の指摘があるのですけれども、ナポレオンに追われたポルトガルの皇太子が逃げてきて、そこで政権を樹立するのと非常によく似た点があるのです。

そういうパラレルな関係というのを文明史的な観点から指摘するというのが、梅棹文明学の醍醐味と言えると思います。「文明の生態史観」という論文が与えた影響というのは非常に大きかったですけれども、そういう文明史的な観点から移住の意義を考える、あるいは新世界の意味をそこから抽出するという、これが一つ梅棹先生の学問の特質としておもしろいと私どもは思っているのです。

**梅棹** 皆さんは非常に表面的な事実にとらわれて、全体を流れている歴史的な意味がもう一つわかっておられないことがしばしばあります。もう少し表面的なことにとらわれずに見てみますと、だいたいいろいろなことがわかってきます。今の例もそうですが、私はたくさんの日本人の方がブラジルなどに移民しておられて、どうしてそういうことに気が付かれなかったのか不思議だと思っているのです。今、だいたいその見方が浸透してきたでしょう。よかったと思っております。

## 梅棹文明学の影響

**中牧** この資料館にも移住者の方のインタビューの証言映像があるのですが、そのうちの一つに、ブラジルのベレンに在住の方ですが、これはまさに梅棹文明学ではないかと思うようなものがあるのです。梅棹先生にも聞いていただきましたが、その方が言うには「ベレンから離れたらね、もう、森の山小屋の中でハンモックに寝てね、で、狩りをしながら生活している人間がいっぱい居ったですよ。それがまたまたたく間にね、要するに農業文明に入ってきたわけですよ、それからまたたく間にね、工業文明が訪れてきたんですよ。グローバル化でね、ベレンも情報文明だとか何とか言ってますけど、僕はここへ来たお陰で、人類の歴史のね、一千年位にわたるね、あと一体験をしちゃったんですよ。」という説明をされる方がおられまして、梅棹先生のサンパウロでの講演もその方は聞かれておられましたけれども、これはまさに梅棹文明学だと思いました。そういう影響力を、文明論的な視点というのはもっていると思います。

**梅棹** ありがたいことだと思います。現地の日系人の皆さんも安心されたといいますか、自信をおもちになったのではないかと思います。自分たちの世界史の意味がはっきり表現されたということで、自信を持ってこられたのではないかと。私のようなことをやっております人間の役割はそういうことでしょう。まさにアジテーターです。けしかけて回っているわけです（笑）。

**中牧** けしかける先は、移住者に語りかけているようで実は日本のほうを向いて、日本の外務省とかそういう所にも梅棹先生はアジテーションをされておられるのではないかと思います。

**梅棹** おっしゃる通りです。意識的に私も外交問題懇談会など政府の外交関係の会議と関係をもっておりましたし、それから国際交流基金とも関係をもっております。私の役割はそういうことです。まさに、未来の日本の世界史的役割に対するアジテーションをやっている。また、これからますますやっ

ていくつもりです（笑）（拍手）。元気を出しなさい。自信をもってやってください。

私はもう歳を取りまして盲人ですから何もできませんけれども、たくさんの優秀な人たちがおられるのですから、おおいに頑張って、世界に対する貢献をどういう具合にやっていくかということ、これは若い人たちにもますます考えていただきたい。それも昔からの日本の国威発揚などと全然ちがうのです。日本がまさに新文明に参加している。南米だけではありません。世界じゅうの新しい文明にこれからわれわれは参加していくのだ。そのときのやり方、心構えあるいは方法というようなことを考えていこうということです。

**中牧** ブラジルに先生は2度行かれましたけれども、同時にペルーやパラグアイとかにもそのあとまわっておられます。その時の思い出といますか印象といますか、特に博物館づくりという意味においては、ペルーでは「天野博物館」という、これも世界に誇る博物館だと思いますが、そういう所と連携する道筋を梅棹先生はつくられたと思いますけれども。

**梅棹** 天野芳太郎さんがまだご健在で、天野博物館、ムセオアマノの内部を自分で案内して説明してくださいました。日本人がつくった海外における博物館としては、非常にユニークで立派なものです。私どもの民族学博物館で、特別展示館開館第1回の特別展として、天野博物館を誘致してやっていただいたことがあります。それとサンパウロの日系の博物館ですが、これを私が多少お世話をいたしましてできたわけです。

新しい日系博物館がロサンゼルスにできたということですが、私は残念ながらまだそこへ行っておりませんので、どういうものができたかと言えませんけれども、次々そういうものができていくのはたいへん結構なことだと思います。私はハワイもよく知らないですが、バンクーバーでいくらかお手伝いをしたこともあります。

**中牧** 各地にそういう博物館施設ができ、またそこでさまざまな研究がなされ、そういうものをつなぐ役割というようなものを……。

**梅棹** それはここですよ。

**中牧** ここがやらなければならない。

**梅棹** ここがその結節点としての役割を果たしていただきたい。

**中牧** そういう意味でも、ここの研究をさらに充実させていくと同時に、ネットワークづくりにも尽力をしていかなければならないと私どもも思っております。

## 日本文明の行方

**中牧** 少し話題を変えますけれども、実は梅棹先生は『行為と妄想』という本を出版されております。日本経済新聞の最終面に「私の履歴書」というのがありますがそれをまとめたものです。そこでさまざまな妄想について語られているのですけれども、そこに書かれていない妄想について少しおうかがい致します。

ひところ、民族学博物館を退官された時期に、どこかの雑誌の企画だったかと思いますが、梅棹先生はローマ字を普及するために自分はブラジルに移住したいという妄想を述べておられます。これは行為にまだ移しておりませんが、ブラジル、新世界というときに、長年の夢であったローマ字の普及ということとつなげていった、その妄想について少しお話いただければと思います。

**梅棹** そんなこと申し上げてよろしいのですか。私は、日本文明の行方といますか、今後どういふふうに進んでいくかと非常に心配しているのです。このままではどうも21世紀の中ごろまでで弱ってしまう。日本文明は内部に非常に厄介なものがかかえている。

何が厄介かと申しますと、このままでいけば世界の情報化についていけなくなりますよということ

です。情報化というのは言語と文字の問題です。今のようないわゆる漢字・かなまじりという、実に奇怪なる表記法を使っている言語はどうしてもできません。日本には相当いろいろな文明の蓄積があります。この蓄積を必要に応じて、たちどころに取り出すことができない。検索ができないのです。それは今の漢字が災いしている。漢字を使っている限りこのままです。将来どうにもならない大きな隘路がたくさん出てきます。

私の個人的な体験になります。私は先程申しましたように盲人でございます。盲人ですと、自分で本を読めない、新聞も読めない、情報源はラジオだけなのです。ところがラジオで聞いておきますと、しばしばわからない言葉が出てきます。というのは、みんなが漢字で考えているのです。漢字は盲人には本当にむごいものです。盲人は点字を読んでいられるのですが、私は後発的な盲人ですから、点字は読めないのです。そうすると声だけしかできない。声で聞いていますと、日本語は本当にわかりません。それで私は、これはローマ字を思いきって採用するしかないのだという結論で、いま努力しております。現在、私は日本ローマ字会の会長をやらされております。

日本語ローマ字表記でやっていったほうが良いという考えは、実は幕末からあるのです。そして、今から100年以上前に、既に日本ローマ字会というのが結成されて、全国的な運動が起こっております。漢字は自分たちの文字だと皆さんお考えでしょう。漢字は漢の字です。シナの字です。私は、日本の現在の文字組織は「シナかぶれ」だということです。

このようなものでどうしますか。じつは、私より先に、「漢字はやめなければいけない」ということを強く提唱した中国人がいるのです。それは毛沢東です。本当におもしろいことですが、毛沢東は私と同じように考えて、漢字という奇怪な文字体系を使っていたら、世界の情報化に完全に乗り遅れるということを考えて、漢字廃止を非常に強くやったのです。人に会うたびに彼が漢字廃止論をぶつものだから、みんな往生し果てて、「毛沢東さん、革命が成功するまでその議論をやめてくれ」と抑え込んだ。

毛沢東はそれで文字論を言わなくなったのですが、革命が1949年に成功して、しばらくすると、さっそくに毛沢東はそれをやり出したのです。そして、中国語のローマ字化というものを強力に推進した。1957年にはもう素案ができております。それはピンインというものです。要するに、中国語を漢字の代わりに全部ローマ字で書くという方策で、非常によくできております。それ以後、必ずしも中国でローマ字化は成功しなかったけれども、とにかくそういうものが出現して非常に普及した。私は、そういう例を考えましても、日本語の革命を今後やらなければならないと考えました。

## ローマ字書き日本語のすすめ

**梅棹** そのために、一つの実際的・具体的な方法を考えました。日本国内は保守的だから駄目だ。思い切って外へ出て、日系の移民集団コロニアに本拠を構える。その人たちは漢字に汚染されていないから、いくらでも新しいシステムを受け入れることができるのではないか。私は、ひとつ本拠をブラジルに移そうか。サンパウロに居を構えて、そこでローマ字書きの日本語をどんどんやり出したらどうなるか。その結果を日本に逆輸出するというふう考えたのです。

私は盲人になってしまいましたので、それは実行できておりませんが、いまだにそれは一つのやり方であろうと考えております。海外における日系人の拠点を利用して、日本国内に逆にはたらきかけるというやり方です。これはほかのことでもいろいろあると思うのです。日本国内は本当に保守的で、今の内閣は改革ということをおっしゃるけれども、本当に改革になりますかどうか、いろいろなことで新しいことをやらなければならないと思うのです。いかがでしょうか、新文明が旧文明の日本を変えていくという方策があるのではないかと。

**中牧** 国際交流基金等を中心に日本語の普及ということを熱心にやるようになりました。これは梅棹先生などの知恵もはたらいているのではないかと思いますけれども、日本語の普及ということの中に、ローマ字をもう一つカードとして入れてみるという提案も可能かと思うのですけれども、いかがでしょうか。

**梅棹** これは相当反対論があります。それはわかるのですけれども、海外の日系人の移住者集団というものの、旧文明としての日本に対するリアクション、はたらきかけという役割がある。これは非常に大胆で危ない考え方かもしれませんが、私はその方向をいろいろ伸ばしていくことを考えてよいのではないかと考えております。

### 旧世界には手を出すな

**中牧** 「新世界から逆に輸出して打って出る」という話ですが、もう一つその逆でして、梅棹先生は『文明の生態史観』では主に「旧世界」のことを扱っておられ、「旧世界にはあまり手を出すな」とも指摘しています。さきほど満蒙開拓移民の話が少し出てまいりましたが、旧世界に手を出すとろくなことがないという主張も一方ではあるかと思うのですけれども。

**梅棹** その通りで、やはり鎖国を解いて以来、日本の海外との交渉は方向が西に向いていたのです。大陸へ向いていた。それは無理ないです。というのは、19世紀までの文明の基礎は農業でしょう。農業というものは同緯度で同じタイプでやれるのです。日本も西を向いて同緯度をたどっていけば、米作農業でかなりやれるのです。乾燥地帯にぶつかるまでは、日本から言えば韓国、中国大陸は同じ手でやれる。それは同緯度だからです。同緯度をずっとたどっていく。

実はヨーロッパの連中はそれをやったのです。ヨーロッパから同緯度をたどってアメリカ大陸に来て、アメリカのニューヨークあたりから上陸して、ずっと同緯度の線を延ばしてきて、ついに太平洋岸まで達した。ところがどうもこれは具合が悪い。

というのは、一つは日本が同緯度で行きますと、中国大陸といったら人間の悪の巣みたいな所ですから（笑）。人間のありとあらゆる悪いことやら、「腐敗」と言うちょっとニュアンスが違うのですが、成熟のどん詰まりみたいな所です。ここは人間がいろんなことをやってきて、いろんなものがたまっておりまして、くさったにおいがするようない文明の地域です。

われわれとしても、うっかり手を着いたらひどいことになる。中国もそうです。それからインドもそうです。イスラームもそうです。ロシアもそうです。大きく分けて私は四つの文明圏、あるいは旧アジア大陸による四つの文明圏と考えているのですが、それに巻き込まれてしまったら本当に将来はない。

日本と西ヨーロッパとは、私は同じタイプの文明だと思います。ヨーロッパと日本とは非常によく似ております。「人間の熟し過ぎた世界の中にはあまり入っていかないほうがよい」。そうすると、どこでどっち向いて行くかということです。私は、「同緯度をやめて同経度で考えてみようではないか」と。ということは、日本から西へ進むのではなくて、南北へ進んで、南のほうでひとつ運命を開拓してみたらどうかということを考えています。

### 日本ABC国家連合

**梅棹** 21世紀の日本の行くべき方向として、そしてJICAのことと関係してくるのですが、また移民の話になりますが、今後一番手を握っていかないといけないのはオーストラリアです。オーストラリアへ出ていったらどうか。オーストラリアは受け入れます。どんどん移住民を送り出せばいいのです。向こうは受け入れます。

しかし、必ずしも農業移民ではない。農業移民を別に掲げる必要はない。工業移民でいいのです。技術者が個々に行くのではなくて、私はむしろ会社ごと行ったらいい、工場ごと行ったらいいと思っています。事実それに近いかたちのものが既に一部始まっております。私は結構なことだと思うのです。オーストラリア、ニュージーランドそれからインドネシアの一部、そういった所、西太平洋です。そういう地域の連合体をつくっていく。「西太平洋同経度連合」というのを考えたらどうか。

これからオーストラリアと日本の関係というのが本当に大事なことになってくる。これは新しい移民の問題です。今まで移民はブラジルが中心でしたけれど、これからどうもオーストラリアが第1になるのではないのでしょうか。

日本が21世紀以後に緊密な提携をやっていく新文明がどこにあるか。一つはオーストラリアです。頭文字を取って「A」と呼びます。その次に新文明の可能性があるのはブラジル。これは「B」です。もう一つ、やはり可能性があるのはカナダです。これは「C」です。日本と「ABC」、これらはみんな中級国家です。超大国とはちがいます。中級国家ですが、これらは全部未来型の国ですから、日本と手を結べば未来がひらけてくるのではないかと。私は「日本ABC国家連合」ということを考えています。

中で一つ異論が出てくるのです。それはブラジルは大西洋国家ではないかということです。私はブラジルの顔を太平洋へ向かせる手があると見ているのです。簡単なことですが、アンデスに穴を開けたらいいのです(笑)。アンデスに穴を開けてペルーのどこかに港をつくれればいい。そこと日本との間にどんどん船を走らせればそれでいいのです。これはしかし世界各国が非常に反対するでしょう。特にアメリカは多分それに反対すると思います。しかし、私はそれがやれたらいい手だと思っているのですが、いかがでしょうか(笑)。

**中牧** たいへん妄想に近い話が出てまいりましたけれども(笑)、実はブラジル政府も「ブラジル・ペルー道路建設計画」というのを、これは梅棹先生の発想とどっちが先かあとかわかりませんが、実際にそういう計画を立てて、当てにしていたのはやはり日本の資金援助だったのです。

**梅棹** そうです。

**中牧** そして、ブラジルからは木材とか牛肉とか大豆とか、そういった産品をアンデスに穴を開けて、積み出し港から日本に輸出するというのを計画しております。私はブラジルとペルーやボリビアの国境地帯の調査をずっとやっておりましたので多少知っているのですが、やはり現地のブラジルの方々はトンネルをつくりたかったのです。364号線という国道が走っておりまして、舗装道路が1985年には完成して、さらに西へと向かって、そこに経済発展を求めるといふ現地の声は非常に強かった。

実際に国道沿いは大規模な環境破壊がすすみ国際的な世論のバッシングを受けておりまして、ブラジルもなかなか二の足を踏んでいたという状況がありました。けれども、アメリカは、環境保護ということでその計画にもものすごく反対しておりましたけれども、ブラジルのほうは、ブラジルがトンネルを掘ったらアメリカにとって大変な脅威、経済的な打撃を与えますので、そのためにアメリカは反対しているのだという議論が起こってました。ですから梅棹先生の話は必ずしも妄想ではない。現実性を帯びた議論です。

**梅棹** 私はブラジルを太平洋国家にするというのは非常にいいと思います。日本の海外移住の方向がだいぶ変わってくる。

**中牧** オーストラリア、ブラジル、カナダ、太平洋諸国家、先程は「同経度で国家連合をつくら」という話ですけども、梅棹先生の文明史観の中で「日本はアジアではない」とおっしゃってました。これも大変なことです……。

**梅棹** そうですよ。皆さん、なぜ日本はアジアですか。そんなことだれが決めたのですか(笑)。そんなもの全くわれわれはかかわり知らないことです。だれかヨーロッパの西のほうで、ヨーロッパの人が東のほうを向いて、「ここから東は全部アジアだ」と言ったにすぎない。われわれは、「あなたはアジアに入りますか」と相談を受けたことはいっぺんもないのです(笑)。ヨーロッパの人が勝手にそんなことを言っているだけであって、日本は「私はアジアです」と、アジアに義理立てをする必要はなにもないです。

福沢諭吉の「脱亜入欧論」というのが明治の初めに出ております。「脱亜」、アジアから脱出して「入欧」、ヨーロッパの仲間入りをするという。これはそれに近い考え方です。脱亜する前に、だいたい日本はアジアになった覚えがない。そんなもの勝手にだれかが言っただけであって、私は初めから「日本はアジアではなかったのだ」と言っている。

実際にアジア大陸というのは文明史的な構造を見ますと、日本とは全然違うのです。日本は、巨大な中国文明のみ込まれたことはいっぺんもないです。初めから全然別の構造を取っている。文化的には隣ですからいろいろ影響を受けています。しかし、中華思想に裏付けられた中国の文明に巻き込まれたことはいっぺんもないです。

**中牧** ですから大陸の国家群と連帯するよりは、むしろ島嶼部といいますか……。

**梅棹** そうです。

**中牧** 「島国の海洋国家よ、連帯せよ」と、「ヤポネシアよ、頑張れ」というメッセージ。

**梅棹** そうですね。

**中牧** その場合に、特にオーストラリアとかニュージーランドは、梅棹先生の訪問の時の体験を踏まえても緊密な連携が既に存在している。それをもっと発展させるべきだというようなお考えをうかがったこともあります。

**梅棹** オーストラリアのことを皆さんご存じない。どんな国か。私はオーストラリアを2度ぐるっとまわっているのです。中心部も知っております。オーストラリアは広大な大陸ですから、その中に秘められた資源というものがどんなものか。実際これが現代の日本を支えているのです。

西のほうにそういう鉄鋼地帯があります。西の内陸部です。そこに行きますと、見渡す限り地面が鉄鋼です。鉄なのです。そこで鉄鋼の野天掘りをやっている。巨大なトラックがどんどん掘った土、実は鉾石を積み込んで、そしてポートヘッドランドという港までもっていくのです。港には日本の船が待っています。それが2、3日に1隻ずつぐらい日本に向けてずっとならんでいる。シーレーンが走っている。それが日本の今日の金属社会の資源を支えているのです。

オーストラリアの鉄鋼の安定供給というものがなければ、日本はたちまち、1日でおしまいになります。逆に、日本という安定消費の市場がなければ、とてもオーストラリアは立っていきません。緊密な共同体が既にできているのです。私は「オーストラリアとの連携がますます重要になるのだから、しっかり手を結んでやろう」ということを前から言っていたのです。それがどうも聞こえたらしい。日本駐在のオーストラリア大使が私を訪ねてきて、「やろう」と言うわけです(笑)。そういうこともありました。どういうことをやれるかわかりませんが、日豪同盟というので、こんなのは今までの発想と全然ちがいます。

こういう言葉は良くないのですが、あえてはっきり言います。「シナかぶれ」はやめましょう。「シナかぶれ」でろくなことはない(笑)。皆さん、中国あるいはシナのことは実にお好きですね。中国の歴史のことを実に詳しく知っておられる。

ついでに自慢話めいたことを申し上げますと、私は中国のことをよく知っております。実は戦争中に2年間、向こうで生活しているのです。戦後も度々20遍ぐらい行っています。現在の中国の省単位

の行政区画は全部自分で歩いているのです。だから中国のことはある程度わかっているつもりですが、中国はたいへん厄介な国です。それと心中することはないです（笑）。われわれは「独自の道を歩きましょう」ということです。一つの象徴的な表れが漢字の廃止です。

**中牧** そして「オーストラリアには企業移住を」ということですね。工場ごとに移住せよということですね。

**梅棹** 少し乱暴な、いささか革命的な話をしました（笑）。もちろん異論もたくさんあると思います。

**中牧** オーストラリアとかアメリカ、ブラジルもそうですが、旧大陸とちがった民族構成があるだろうと思うのです。旧大陸ですと民族ごとに棲み分けが行き届いていますけれども、新大陸はみんなのものという考え方で民族が混住している。そういう意味でも似たベースというのがあるのではないかと思います。

### 民族の時代の終焉

**梅棹** 新大陸には多文化主義が成立しているのです。私は、はっきり言いまして民族の時代は20世紀で終わったと思っている。民族が固まって民族の利益のために動くような時代は終わった。これから民族を超えた人類の共存、「共存・共栄」というと言い古された言葉になってしまいますけれども、民族を超えたもの、あるいは世界、人類の立場で考えていかなければならない。さっきのABC論や日本の行くべき道は、日本民族のためではない。これをやることによって、世界に対してわれわれが何を貢献できるかということだと思っているのです。

**中牧** ローマ字も採用するし、ある意味では先生はエスペラント語も少したしなまれるというか、ずっと使っておられるわけですが、そういうのもやはり民族を超えるというところにつながっていくのでしょうか。

**梅棹** エスペラント語で人間のことを「ホモ」と言うのです。ホモサピエンスの「ホモ」です。ラテン語から来ているのです。エスペラントは文法的に後ろに語尾を次々くっつけて言葉をつくっていくのです。「アーロ」という語尾を付けてホマーロというと人類全体のことです。個別的には一つ一つの単位になる言葉、さらに「アーノ」を付けて「ホマラーノ」というと人類人、人類の一員としての人間という言葉になるのです。

それにさらに「イスマ」という語尾を付けますと「主義」になる。「ホマラニスモ」という言葉があります。それは人類人主義のことです。民族を超えた人類人主義というのはエスペラントの根本精神です。根本精神はそういう超民族主義、民族を超えて全人類の立場に立って考えたのが「ホマラニスモ」です。私は、今後やはりそうなるだろうと思います。そういうものが実現してきたら、そのための共通の言語としてエスペラントが機能するであろう。これはエスペラントの中から出てきた、やはり非常にラジカルな思想です。

ザメンホフというポーランド人がこのエスペラント語をつくったのですが、それは根本的にそういう精神のうえに立っているのです。民族の話ではないのだということです。

**中牧** 「新世界に参加す」というのも、いろんな民族が集まって、民族を超えてある意味では連帯せよと。それに日本人も「参加せよ」という趣旨だったと思いますが。

**梅棹** その通りです。

**中牧** その場合、日本人の持っている資質といますか、特質といますか、貢献できる要素といますか、そういうものはどういうふうにお考えでしょうか。

**梅棹** 日本人、日本文化の非常に大きな特質の一つはプラクティカリズムです。実際論的なことです。それでいて、ちゃんと理論を考えている。それに対して空理空論の好きな民族があります。そこでは

膨大な空理空論の世界が展開している。どこそこという実名を挙げるとちょっと具合が悪いですから言いませんけれども、あるのです。

日本はどっちもあるのです。ちゃんと理論性もあるし実際性もある。それから、日本人のもうひとつの大きな特色は、ここの展示の中にも出てくると思いますけれども、実務、組織運営は相当うまいです。新世界でもその点で日本人は大きく成功しているのです。

それと新世界の場合もそうですが、日本の場合、教育が非常に普及しているのです。これが全部プラスにはたらいております。教育が普及しておりますから字が読める。字が読めるということは、本が読めるということです。本を自分の体験として活用できる。ブラジルにおける日本の農業がなぜあんな見事な成功をしたかという、日本の農民は全部本が読める。ヨーロッパの農民はしばしば字が読めません。

ブラジルで土民のことをカボクロといいます。私もブラジルで何人か会いましたけれど、見たところ金髪のまさにヨーロッパ人です。そうでありながらカボクロというのがいます。全然字は読めなくて何にも分からない。そういう土民化したヨーロッパ人がいます。

日本人はそういうのは1人もいません。日本の移民がブラジルで成功した大きな理由は教育です。本が読めるということです。それと組織運営が非常にうまい。たとえば、またブラジルの例ですけど、農業が全部組織化されて農業組合がものすごく発達している。これで大成功した。そういう組織運営能力が今後、世界に対して非常に大きい貢献ができるのではないのでしょうか。オーストラリアに行っても、それでいけると思うのです。

**中牧** 家庭の経営についても、やはり日本人の特質があるのではないですか。

**梅棹** これも意外に知られていないのですが、日本の女性は、全部計算ができます。これは世界に全然ないことです(笑)。女性が計算できる。ヨーロッパの人はほとんど駄目です。日本人はどんな奥さんでも家計のことはちゃんと計算ができます。日々収支決算をやって、うまく運営していくことができます。これはそういう女性の能力も含めて日本人の組織的な能力というか、大いにこれからのものをいってくるのではないかと見ております。

**中牧** ここの展示でも日系人団体のコーナーがあるのですけれども、一つ「婦人会」というコーナーがありまして、ブラジルのトメアスの婦人会で使われていたお盆に赤文字で「婦人会」とあります。梅棹先生もトメアスにも行かれたことがあって…。

**梅棹** はい、行きました。

**中牧** 婦人会の力が強いのだということで驚いておられたので、それを私も何とか展示したいなと思いまして収集した経緯がございます。また、教育の面ではいろんな分野に、特にプロフェッショナルという分野で日系人は活躍していると思います。

**梅棹** それは面白いですね。ブラジルに例を取って言えば、初期の日本人の移住者はみんな農民です。初めは農業労働者として契約して行くのです。農業労働に従事する。そのうち日本人は現地の事情を見て、「労働力を売るよりも買ったほうが得だ」ということに気付いて、そしてみんな農業企業家になる。農業労働者から農業企業家に変身したのです。これが一つ大きな日本人の成功の例だと思います。それであちこちで農業組合を発展させてどんどん展開していく。それが農民ですから、現地のさっき言ったカボクロ、現地農民の間に埋没するかと思うと全然そうではない。埋没しないのです。みんな企業家になって、日本人が全部インテリ化したのです。驚くべき話です。

今、ブラジル人口の日系人は1パーセントぐらいかと思いますが、サンパウロ大学の人口のうち10パーセントが日系人です。普通の平均の10倍インテリがいるということです。そして、農民である日系人の子弟を都会へ送り込んで、そこで教育を受けさせる。そういうことが起こっている。おそらく

世界じゅうどこへ行っても日本人はそうなると思います。

**中牧** そういう資質を生かして新世界に貢献すると同時に、さらに人類共通の目標に向かって、日本人の特徴をじゅうぶんに発揮して「参加せよ」とおっしゃる。これはおそらくJICAなどにも通じることだと思うのです。というのも、たまたま今日はJICAの広告ページというのが新聞にでかかど載っております、新理事長の緒方貞子さんが、やはり「参加」ということを非常に強調しておられました。

### 資料館の未来

**梅棹** これから日本人全部が新しい文明に参加するということだと私は思っております。日本国内においてもそういうことです。参加できる資質は日本人にじゅうぶんにあります。人類人の新文明に対して日本人は貢献できると私は考えております。

**中牧** 梅棹先生はそういうふうに参加をあおる、アジテートするわけですけども、もう一方で先生は自分は隠遁（いんとん）だと（笑）。どちらかといえば隠遁生活をしたいというような志向性も持っておられるのですが、それはどういうふうに関調和されるのでしょうか。

**梅棹** 調和できないですよ（笑）。それは私の非常に個人的な性向と申しますか、癖と思います。私は子供の時から人嫌いです。できるなら人と付き合いしないで、田舎に小さな僧院でも構えて、ひっそりと暮らしたいという願望があります。今でもあります。実際にそうできませんので、しょうがないからいろいろ世間に出てきます（笑）。

私が民族学博物館という、ある意味で巨大な装置をつくった。ここが自分の隠遁場所です。そんなことを言ったら一緒に働いた人は怒るかもしれませんが、私はこれで良かったと思います。

実業の世界に私はやはり向いていないと思っている。私よりも自分の生き方として向いていないと思っているのは政治です。政治世界は、私はこれは真っ平、逃げの一手です。これ以上言うとは差し障りがいっぱい出るので……（笑）。

**中牧** そういうことでそろそろ時間も迫ってまいりましたけれども、最後に、この横浜の国際センターにできました海外移住資料館につきまして、今後の希望と伺いますか、あるいは梅棹先生からのアジテーションでも結構ですけども、「こういうことをやりなさい」、あるいは「こういうことをしては駄目ですよ」ということを一言お願いできますでしょうか。今後の指針というような意味ですね。

**梅棹** さっからみんな言ってしまいました（笑）。繰り返す言うことになると思いますが、この施設は決してこの地域のものではありません。これは日本人の財産です。あるいは世界全体の財産です。人類の中の一つの集団がこういうことをやって世界の歴史に貢献した。まさに新世界に参加してきたのだ。その証が展示されていると思っているのです。日本じゅう、あるいは世界じゅうの人をここへ呼んでくるのは難しいですから、やはりこの種の施設が少なくとも日本のあっちこちにできてほしいです。

そしてたくさんの人、特に若い人にこれを見ていただきたい。そうするといろいろ刺激を受けると思うのです。「あ、こういう人間の生き方があるんだな」と。それでだいぶ変わるのではないですか。

**中牧** ありがとうございます。以上で私の「尋問」を終わりたいと思いますが、梅棹先生にはごく自然にお話をいただきましたので、「誘導尋問をするな」と言った私の指導教官にもこれでメンツが立つような気が致しております。梅棹先生、どうもありがとうございました。（拍手）

**梅棹** どうもありがとうございました（拍手）。すこし乱暴なことを言い過ぎました。

**小森** 梅棹先生そして中牧先生、壮大な梅棹文明学の粋をお聞かせいただきまして誠にありがとうございます

ございます。JICAにとりましても大変勇気と元気の出る本当に素晴らしい話でございました。

また、資料館につきましても、日本の宝、世界の宝として今後大きく育てていきたいと思っております。名残惜しいところではございますが、時間の都合もございますので、誠に恐縮でございます。ここで両先生にご退場いただきたいと思っております。ご来場の皆様方、いま一度大きな拍手をお願い致します（拍手）。

**梅棹** どうも中牧さん、ありがとうございました。

**小森** ご臨席の皆様方におかれましては、長時間にわたり本当にお付き合いいただきまして誠にありがとうございました。当センター2階にございます海外移住資料館にも、ぜひこの機会に再度お立ち寄りいただきますようお願い申し上げます。

以上をもちまして「海外移住資料館開館1周年記念特別講演会」を閉会とさせていただきます。本日は皆様、誠にありがとうございました（拍手）。

# マルチメディア情報展示システムの構築

－国際協力機構海外移住資料館統合情報展示システムを例として－

**山本 匡** 国立民族学博物館先端人類科学研究部助手、海外移住資料館運営委員  
**福田直毅** 徳島大学総合科学部助手、海外移住資料館元研究員

## 〈目 次〉

### はじめに

1. 資料展示の目的と公共情報システム構成
2. 統合情報展示システムの全体配置
3. マルチメディア情報展示サブシステム群の概念設計
4. 統合情報展示システムの技術構成とネットワーク設計
5. 具体的な情報展示計画と実施結果
6. 実装した統合情報表現システム等の技術的な特徴について
7. デジタル情報展示の実施プロセスと組織
8. 情報展示システムおよびネットワーク・デジタル・ミュージアムの運営と組織構成

### おわりに

キーワード：情報展示システム、ネットワーク・データベース、バーチャル・ミュージアム、移住、オーラル・ヒストリー

## Developing Multimedia Information Exhibition System: Focus on the Computer Integrated Information Exhibition System Implemented at the JOMM

Tadashi YAMAMOTO, National Museum of Ethnology  
Naoki FUKUDA, The University of Tokushima

Abstract : This multi-purposes article shows theory and practice of developing process of multimedia information exhibition system, while describing implementation process of the computer integrated information exhibition system at JOMM as the most advanced case of computer supported exhibition equipments. We developed the open network data base system and many sub-information exhibition systems on the integrated platform of business type UNIX computer system, such as Geometric Information Exhibition System for the World Migration Map, Multi-media Data Base System for Oral History, Computer Supported Environmental Information Equipments, and Multi-vision Simulation System for Future Image. In particular, this integrated system realized the non-plunder museum by international open network museum cooperation,

generated hyper-compound information based on academic data, and provides the newer methodology of museum exhibition and research. Also, we verified the structural relation and dynamic process among organization, information, and information system through the management process of virtual museum.

Key Words : Virtual Museum, Open Network Data Base, Multimedia Information System, Organization, Oral History.

## はじめに

多様なソースからの歴史・地理・社会データ等のデジタル化、コンピュータ処理が可能となったことから、政治学や経済学のみならず歴史学、地理学あるいは文化人類学といった分野でも大きな方法的転換点を迎えてつある。その変化の底流として、歴史データや地理データのデータベース化が世界各地の大学や国立機関、NPOなどの民間団体によって進められていることが挙げられる<sup>1)</sup>。これらのデータベースは分散する歴史・地理・社会などのデータベースを国境を越えてネットワーク上で統合することで、各々の地域のデータを世界共有データとして利用できるようにするものである。特に、画像技術やユニコードなどの多言語化技術の進歩により、言語の壁を越えた国際分散ネットワークが運用可能になったことが大きく寄与している。さらに、地理情報システム (GIS) の普及により地理データを元に各種のデータの重ね合わせが可能となり、動的な統合地理データが可視化されたことが挙げられる。例えば、歴史的変化や統計データを地理情報と重ね合わせるなどの技法である。GISの導入は、人工衛星を用いたGPS (Global Positioning System) の利用による歴史遺跡の発掘や位置関係の調査、リアルタイムでの位置情報の追跡など方法論の変化とあいまって、研究表現手法の動的な情報化を促進した。

そこで、画像や音声、情報データ、文書資料などの異なるソースのデータを情報処理し、統合情報として生成して展示表現するシステムの開発が求められる。このデータの統合性とそこから生まれる創造性を評価することが新しい学術性の基準となる。統合情報システムの依拠するデータベース・ネットワークは、国際的なオープン・ネットワーク・データベースの結節点として機能するものでなければならない。それは「取奪しない博物館」の基礎ともなる。出力系としてのデジタル展示表現は、従来のビデオテープレコーダ<sup>2)</sup>などのデータを固定的に蓄積するオンデマンド型の映像展示とは異なり、データの蓄積、情報処理、コンテンツ処理、コンテンツ・コントロールから情報展示表現に至るまで全てがコンピュータ化され、動的な統合情報として生成される点に特徴がある。

このようなデジタル情報表現を考える上で、IT化固有の問題も生じている。例えば、ネットワーク・データベース構築では、データの蓄積されている先行データベースが優位であり、遅れたデータベース開発途上地域 (ネットワーク) は先進地域 (ネットワーク) になかなか追いつくことができない。またネットワークへの貢献のない個別データベースはネットワーク全体の中での位置付けが低く、場合によってはネットワークに参加できない。さらにデータの質が明確に問われる。ただ大量のデータを入力すれば良いというものではない。このようにして強いデータベースの貢献度競争により形成され

たネットワークの力によって、対抗ネットワークを圧倒することになる。それはデータ空間でのグローバル化であり、コンピュータ・システムとしては言語的な多様性を確保しても、実際のネットワーク・フローでは単一言語による強大なシェアが発生し、文化的な分散性の壁が破壊される可能性がある。

本論では、多様な社会情報データとその処理、可視化について、移住研究資料の処理とその情報表現を例として、具体的な情報システム構築過程と問題点について考察する。移住研究資料の特徴は、それらが世界の各地に散開し、多国籍・多言語記述であり、さらに、図書類、アーカイブス類、写真、映像等が混在する多様な資料素材を呈することにある。また、資料価値としても、政治学的記録資料や社会学的量的資料から民族学的な質的資料や個人・家族記録まで多岐に渡り、そこには高い公共性と秘匿されるべき個人情報とが混在する。例えば、紙媒体の資料でも移民に関する条約や政府間覚書、移民法関連法規、国際規約等からパスポートや移民に関する契約書、手紙、戸籍、さらには教科書や新聞など幅広い。これらの受け入れ国側に残る資料を奪うことなく保存・分析し、公開することも重要な課題である。

また、移住はすぐれて現代的な問題でもある。移住・移民そのものが人間の世界史的な行為として相対的に記録されるべきであり、単なる歴史記述に留まらず、移住者の現在や移住の未来とともに語られるべきであると考えられる。そうであるならば、日々更新されるリアルタイム・データベース資料に加えて、現在の移住情報や未来の移住のイメージなど、モデルとシミュレーションを用いたコンピュータ計算による情報生成も有効である。移住資料に関する統合情報システムでは、コンピュータとネットワークの技術の総合的な実現が求められる。そこで国際協力機構海外移住資料館<sup>3)</sup>（以下、適宜、資料館と称する。より一般的な資料館・博物館と読み替えてもよい）に構築した情報展示システムを例として、情報展示システム構築の各段階について考察する。

情報展示システム構築の各段階とは、(1) 情報展示システムの目的の整理、(2) 全体の展示構成の中での情報展示システムに位置づけ、(3) 個々の情報展示（サブ）システム群の概念設計、(4) 統合情報展示システムの技術構成とネットワーク設計、(5) 個々の情報展示（サブ）システム群の実施設計とコンテンツ作成、(6) 情報展示システムおよびネットワークの実装、(7) 情報展示システムおよびネットワークの運用と組織、(8) 統合情報展示システムの運用評価と課題抽出とする。

## 1. 資料展示の目的と公共情報システム構成

政府情報資料センター、国立博物館、自治体文化情報センター、NPOおよび各種公共施設などを想定する展示型の社会情報表現の設計にあたって、その目的を整理し、目的に即した公共情報システム構成を考える必要がある。そこで移民・移住資料の社会情報表現に関して以下の目的を設定する。ここでの目的には規範的な性質が含まれ、情報システムの概要を決定する。

### 〈移住資料展示の目的〉

移住関連資料の保存・収集を行ない、高度に学術的な見地からこれを整理し移住関連研究及び国際関係・地域研究等の研究に供する。同時に移住関連資料を広く一般に展示・公開することで、移住事業及び移住者への理解と共感を広めると同時に、未来に向けて移住関連諸外国との相互友好関係の増進

を企図する。すなわち、移住関連の諸事象に関して、過去・現在・未来の各々に世界的な見地から情報の整理と保存、提供を試み、高い公共性を実現することを目的とする。

#### 〈情報展示および情報展示システムの目的〉

情報展示システムは、収集した多様な資料等に基づき、学術的な見地から整理された移住に関する情報をデジタル情報展示として示すことで、移住事業及び移住者への理解と共感を深めることを目的とする。特に、世界の日系移住者、移住関係者の「心のふるさと」となる情報拠点を構成する。また、世界の各地に散開する移住関連資料のデジタル記録にあたり、「収奪しないデジタル資料館」を目指す。

この複数の目的に対して資料に支えられた表現を実現することが求められる。そのためには、まず基本システム設計として、移住関連資料を中心とした過去のデータのデジタル化とデータベース化によるデジタル・アーカイブの構築とネットワークを通じた公開が世界標準で準備される必要がある。「日系移民」に焦点を当てるならば、全米日系人博物館等の海外の資料館・博物館・図書館等とのネットワークを用いた交流を想定して、ネットワーク・データベースへの貢献と検索システム等の標準化が望ましい。移住に関する基礎的な理解と歴史的展開について、膨大な資料から学術的に選択されデジタル化された写真・映像コンテンツ等を用いて適切な開設と展示を行なう。このときデジタル展示は、実資料に対して主に環境展示、補助展示となる。

移住情報の総合的な展示と移住の本質的な理解の促進を敷衍するならば、世界の移住全体を表現するマルチメディア地理情報システムが移住への理解を深め、移住資料に基づくデジタル・コンテンツを用いたバーチャル体験が移住事業及び移住者への理解と共感を可能とする。これらは大型の実体験型の表現装置を必要とする。未来の移住情報について、モデルとシュミレーションにより計算された未来像を与える情報表現システムを構築することが考えられる。更に現在の情報に関してホームページによる情報発信や各関連サイトとのリンク、現地情報のリアルタイム受信などインターネット技術を用いたマルチメディア情報システムを導入することを検討する。また、バリアフリースペースの構築を重要な設計概念とし、情報展示においても、例えば小形携帯電子案内システムの導入や手話機能の付加など様々な障害者への配慮を検討の対象とする。

以上の目的とシステム構成に対して、ギガビット水準の館内LANを整備し、UNIXベースの基本館内情報システムを構築し、その上でデジタル・アーカイブ、マルチメディア情報表現・情報展示システム、マルチメディア情報検索システム、展示案内情報システム・バリアフリー支援情報システム等を構築する構成を考える。これらの個別情報システム群は一つのプラットフォーム上に統合されて一元的に管理されることで、データの書き換えや追加、セキュリティ等に関する管理が容易となる。この統合情報システムとその出力系としての表現装置の具体的な展開は、資料館の全体の配置や観客動線と調整の上で決定されることになる。

## 2. 統合情報展示システムの全体配置

資料館全体の中での統合情報展示システムの位置づけを考えよう。資料館の目的・機能において、統合情報展示システムは後述の移住情報検索システムとあわせて、資料館における主要な地位を占める。なぜならば、統合情報表現システムは「収奪しない博物館（資料館）」の中核をなし、かつ資料の収

集・保存・解析・生成・表現のプロセスをネットワーク上で動的に構成することで、それ自体がアクティブ・データベース・バーチャル・ミュージアムとなるからである。この意味では、「観覧者からは見えない」情報システムが資料館機能の多くの部分を担っており、情報システムそれ自体の展示や資料館評価における情報システムの稼働実績の評価方法の構築が求められる。

他方で、資料館の現実構造においては展示構成を中心とした観客動線等の設計に従い、情報展示との接合が求められる。海外移住資料館の設計においては、図1で示すようにフロアスペースを導入展示（ローズパレード動画像及び山車）および総合情報展示（世界移住マップ）、歴史展示（海外移住の歴史）、生活展示（「われら新世界に参加す」、ニッケイ・ライフ・ヒストリー）、情報展示（デジタル移住スペース）および企画展示ホールに分けた。この中に統合情報表現システムの各端末が分散することで全体としての情報展示を作ると同時に、そのコアとして情報展示スペースの設計を行った。

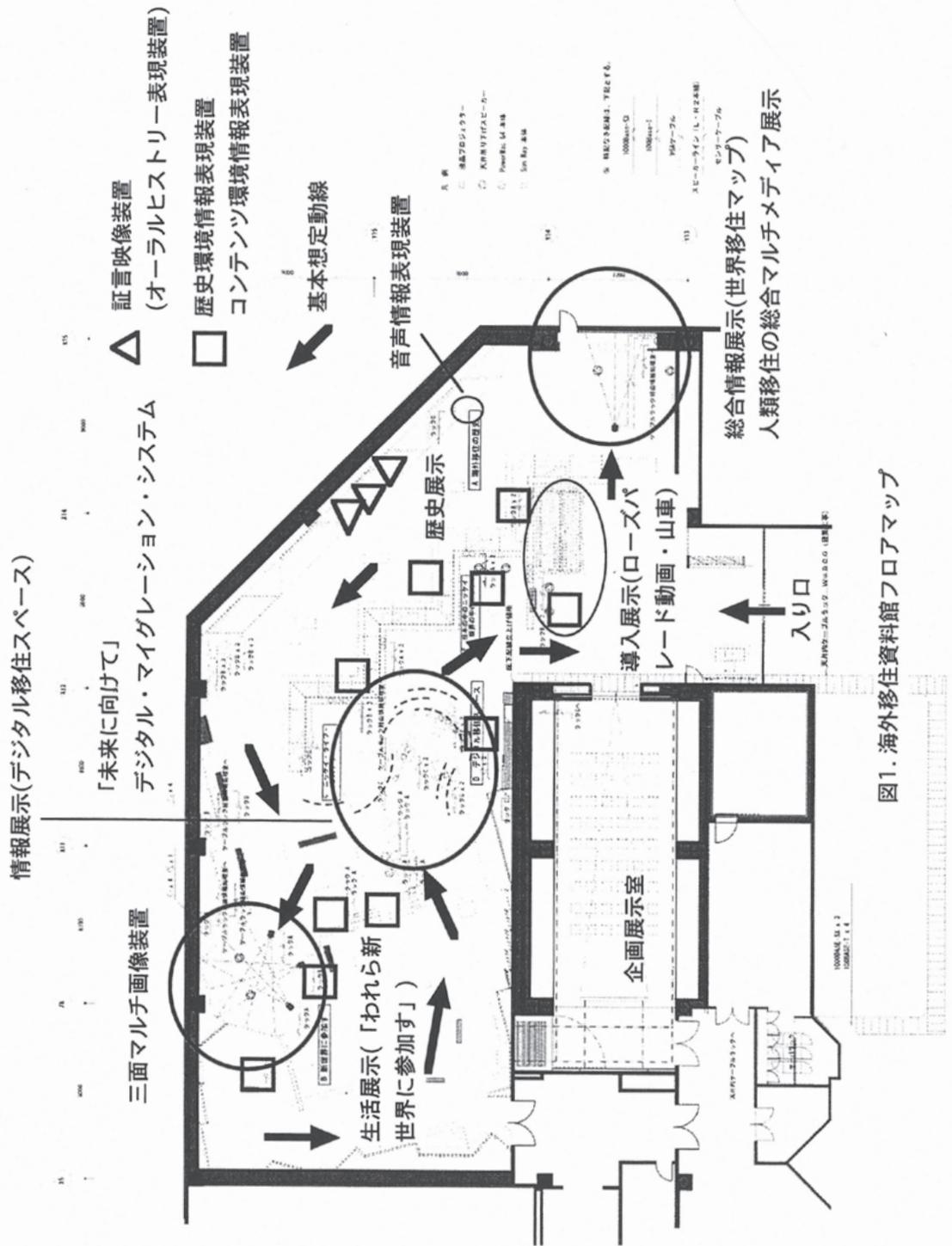


図1. 海外移住資料館フロアマップ

すなわち、移住情報展示システムから見ると、サーバから展示フロアの各表現装置に一元的な情報管理とデータ供給を行う一方で、展示場内のデジタル移住スペースからアクセス可能なデータベースを提供する。さらに、ホームページからアクセス可能なバーチャル・ミュージアムを切り分けて提供する。これとは別立てのサーバに移住情報検索システムを構築する。

整理すると、以下のようになる。

- (Ⅰ) 移住情報展示システム
  - (Ⅰ-a) 各フロアのコンピュータ情報表現装置群、「世界移住マップ」や証言映像装置、「未来に向けて」など。
  - (Ⅰ-b) 展示場内の情報アクセスシステム、「デジタル移住スペース」において。
  - (Ⅰ-c) 一般に公開された展示情報、ネットワーク上のホームページ。
- (Ⅱ) 移住情報検索システム（仮称）

ここで、(Ⅱ)の移住情報検索システム（仮称）は、移住情報展示システムとは別個に構築されるデータベースシステムである。これは高度に学術的な観点から、移民学、世界史学、政治学、政策科学、国際関係論、民族学、外交史等に関連する学術的研究資料の保存と公開を目的とする。情報展示システムの公共性に比較して、より範囲の狭い公開対象を想定し、高度に学術的な要求水準を満足する情報システムと考えられる。すなわち世界の移民研究に寄与するべくシステム構築及びデータベース設計を行ない、そのシステム運用を提供することを考える。そこでは基本的人権の保護等に十分な配慮をしつつ、移住関連学術研究資料の公開を推進する。図書資料室に端末を置く。

研究用移住資料のデジタル保存、検索及びネットワーク検索システムの構築は展示情報システムとは別途行ない、移住資料の整理および研究成果を展示および情報展示システムに提供する。ここでは国際協力機構の保有する図書類、テキスト資料、画像資料、映像資料の中から適宜学術的価値の高いものを選択し、順次デジタル化を行ない、データベース構築を行なう。すなわち、デジタル化したテキスト資料、画像資料、映像資料を扱うマルチメディア・データベース型のデジタル・アーカイブを想定する。本システムの構築においては、シソーラスの作成や検索方法等に注意をはらい、十分な学識のある移住研究者の協力によることが不可欠である。また検索資料の情報公開度の決定などシステム、コンテンツの両面から十分な対策を講じる必要がある。

### 3. マルチメディア情報展示サブシステム群の概念設計

具体的なマルチメディア展示をどのように設計するかは、大きく設計者の考え方に依存する。そこに最適な解答はない。また、仮に同じような設計仕様書を作成したとしても、それが同じ展示表現をもたらすものでもない。多くの場合、仕様書等の文書では表現し切れない部分で情報表現の品質が決まる。ここでは、日本から主に北米及び中南米への移住の歴史と移住者の生活・社会等をいかに表現するのかという試みとそのプロセスについて考察する。以下はその最初の概念設計であり、必ずしもすべてが実現したものではなく、これ以外で実現した情報展示および実物展示もある。それぞれの表現装置の実現した位置は図1「海外移住資料館フロアマップ」で示す。

#### 1) 総合情報展示

展示場導入部分は観覧者を展示に引き込む非常に重要なスタートポイントである。展示場入り口と

は、エントランス後の実際の展示の入り口を指すものとする。大型の施設だとここで複数のルートの選択が可能となる場合があるが、ストーリー展開を重要視する場合は一意的に導入が決まることが望ましい。動物園のような複数ルート型展示施設の場合はその総合案内が必要である。展示場導入部分では総合案内をかねるシンボル展示が展開される。

海外移住資料館では、正面入り口にローズパレードの山車の実物大模型をおき、実物展示によるシンボル展示とした。この補助的な説明を行う情報装置としてプラズマディスプレイにローズパレードの画像を流す。これに続いて、導入部分での総合的な移住情報表現として、「ジオグラフィック・マイグレーション・システム（GMS）」と称する総合情報展示システムの構築を試みる。

「ジオグラフィック・マイグレーション・システム」では、展示場導入部分での総合案内、日本の移民（移住）事業の基礎的な概要、世界の移民の歴史、人類の拡散、現在の移民の展開、日本と移民等についての紹介等を行なう。システムとしては、データ・サーバとネットワーク（SAN）を想定し、高速グラフィック・サーバ、投影装置、操作系装置、音響装置等からなる大型展示を考える。ただし、スクリーンではなく、壁面に直接複数台のプロジェクタでシミュレーション映像を投影する方法を検討する。コンテンツは後述の「世界移住マップ」を想定する。CGとデジタル処理画像（地球画像・世界地図・アメリカ全図・移民船映像等）を組み合わせた画像をある程度インタラクティブに操作・供給する。そのための非接触3D操作系などの魅力的な入力機器を検討する。インタラクティブ性を高めるため観客の操作による画面、デフォルト画面、ボランティアを含むガイドによる操作画面の三つの操作ケースを想定する。非接触3D操作系では、地球形映像とシンボルとしてのモルフォ蝶の映像による操作システムを開発する。

## 2) 歴史資料情報展示と歴史環境情報表現装置

デジタル画像・写真資料を用いて歴史展示および実物展示の補完を行なう。実物資料に対して、その歴史的あるいは地理的な環境情報を付加することで、より正確な理解を促進する支援システムを構成する。そのために移住環境の表現や実物の存在していた空間環境情報や歴史環境情報をデジタル映像資料や採録データに基づいて再現する。環境情報の精確さはデータ及び資料の質に依存するので、注意深いデータ採録が必要である。例えば初期移民の農耕道具の環境情報として周囲の農耕地の変化を採録する場合、歴史的なデータと完全に一致する場所等を選定し、現在の植生と当時の植生の変化等にも慎重に配慮する。採録データそのものが後世において学術資料となることに留意する。システムとしては、小型フラット・ディスプレイ、画像用コンピュータ、ビデオ装置、音響装置等が予定される。コンテンツとしては、CGとデジタル処理画像（移民関係写真資料・移民船映像等）を想定する。特に写真資料については、学術性に併せて訴求力のあるものを選択する。

## 3) オーラル・ヒストリーのマルチメディア表現装置

歴史資料展示の一つとして、オーラル・ヒストリーの情報展示表現について検討する。オーラル・ヒストリーは、文書等の媒体資料ではなく口承伝承等を採録し、それに基づき歴史学的な考察を行うものである。従って、デジタル録音・録画によって口承を記録し、そのデータベース化をはかることが第一の作業となる。つまり、音声を含むマルチメディア・データベースに基づき「歴史の語り部」を表現することは、コンピュータ技術によって支援された新しい歴史学の展開と考えられる。オーラル・ヒストリーのマルチメディア展示には、口承や証言が必ずしも「真実」でなく、証言者によって

内容が異なること、プライバシーに触れる内容が多いこと、一次資料を展示する形式となり学術的加工が困難であること、証言者画像の展示それ自体に承諾が必要であること、など慎重を期すべき問題点も多い。また技術的にも、多言語対応や証言内容の文字化など解決すべき点は多い。しかし、これらの諸点を考慮するならば、オーラル・ヒストリーのマルチメディア展示作業それ自体が、歴史証言の整理と研究に直結する。さらに、実際の移住者による「証言」映像は強いインパクトをもって観覧者に迫るだろう。それだけに証言者および証言内容に関する学術的な取材と提供するコンテンツの展示妥当性からの選択は慎重を要する。データベース化し複数閲覧可能としても学術性の保証や展示の妥当性は資料館側がおうべきであるからである。

#### 4) コンテンツ環境情報表現

3D表現、高精細画像等も用いたストーリー展示、テーマ展示を目指す。動画とインタラクティブ性がここでの特徴となる。特定の移住地域やテーマを取り上げ、仮説の表現や学説の展示も含めて柔軟に入れ代わる展示表現を行なう。ここでも環境情報の精確さはデータ及び資料の精確さに依存する。このような展示で重要なことは、新規採録データは他のテーマ展示等に流用しない。また、既に採録済みの映像をデジタル化する場合は、知的財産権等の処理以前の問題として、映像内容の正確さや採録日時の整合性に注意する。古い海外採録映像では、学術的価値に疑問のある編集等が加えられている可能性があるからである。システムとしては高精細スクリーン装置一式、グラフィック・サーバ、ビデオ装置、音響装置がネットワーク上に設置される。高精細の航空・宇宙用モニタなどの利用は必要に応じて検討される。具体的なコンテンツは移住地での祭りの参加など5分程度のストーリーのあるCGとデジタル処理画像（3Dテーマ別映像）を想定する。

#### 5) マルチメディア情報検索システム

個別の端末で展示資料の検索及びテーマ別マルチメディア展示の個別アクセス、北米・中南米各地のホームページアクセス、情報発信等を行なう。個人が操作性を保持しつつ自由に移住関連情報を入力可能であることを目的とする。すなわち、博物館デジタル社会情報装置群のなかで、ここは個人アクセス型のデジタル社会情報装置を提供する。システムとしてはネットワーク上のワークステーション端末複数台、ネットワーク検索システム、ネットワーク・サーバ等を一組とする。個人用の場合、想定観客層にもよるが、タッチパネルよりはキーボード形式が検索に自由度もあり利用率も高いと推定される。コンテンツでは移民関係展示用資料、画像資料、映像資料、ネットワーク情報を想定する。特に、全移住先国データや実物展示で展示できなかったテーマや地域等に関する詳細なデータを格納しアクセス可能とすることが求められる。「ルーツを探る」等の個人史探究ソフトウェアを用意することも検討したが、諸外国と日本の個人情報保護概念の差異に鑑み断念した。このマルチメディア情報検索システムを、展示フロアでは、デジタル移住スペースに装置した端末からアクセス可能とする。

#### 6) 渡航・留学等情報支援システム

現在の移住情報や海外渡航情報、特定国の最新移住情報、留学情報、海外渡航情報、海外事情の検索学習を行なうことを検討する。また、海外からの日本への留学や労働、移住に関する情報も検索可能とする。システムとして、ワークステーション端末複数台、音響装置、ネットワーク検索システム、各関係団体とのリンクなどが必要である。基本的にHTML形式でWeb上において情報の提供を行なう。コンテンツとしては、最新移住情報、留学情報、海外渡航情報、海外事情データ、ネットワーク情報、等の情報につき関係各省庁、各国大使館、文化交流部等とのリンクを通じて情報提供可能とす

る。本項目については、セキュリティ上の問題から実現していない。

#### 7) 展示案内情報システム・バリアフリー支援情報システム

デジタル情報展示の利点として、障害者支援に用いることができることが指摘される。小形携帯端末による展示ガイドシステム、その車椅子への装着、視覚障害者への音声サービス、聴覚障害者への画像サービス等を提供することを検討する。システムとして、社会情報提供型の小形携帯端末による展示ガイドシステムなどが検討される。コンテンツとしては、展示ガイド・エージェントなどの支援型エージェントの作成が望まれる。本項目については、なるべく図やシンボルを用いた説明などをのぞいて、実現していない。今後の課題である。

### 4. 統合情報展示システムの技術構成とネットワーク設計

これらのシステム全体の統合環境について解説する。この設計では、要求される「高度な学術性」を、学術データのデータベースへの蓄積とその展示表現への変換、各展示ワークステーションへの供給を一貫処理する情報システムから調達している。このような展示表現の全域に渡ってコンピュータ化する設計は開館当時は極めて稀であった。例えば、デジタル・コンテンツをCD-ROMやDVDで供給しても、システムの頑健性や安価なコストなど利点も多い。しかし、それはコンピュータ・システムではない。コンピュータ・システムを用いる最大の利点は、ネットワーク・データベースと結合した柔軟なコンテンツ変更の可能性やコンテンツおよびプログラムの変更の可能性であり、インタラクティブ性の確保である。

特に、社会情報表現は、多くの批判や社会状況の変化に耐えねばならず、常に高度な学術性と公共性を両立させる必要がある。しかし、一方で展示スペースは一定であり、学問的な水準もまた現在の水準の束縛から逃れることはできない。そこで、学術的に保証された事実を示すデータから学術的に意味のある情報処理システムを通じて社会情報表現がなされることが望ましいのである。

ここでは、データベース・サーバ、ウェブ・サーバを中心に、SAN (Storage Area Network) を組んでいる。動画を含む大容量のデータ転送が必要であること、冗長性等をシステム全体で考慮している。ネットワークセキュリティやJavaカードの利用等を考慮して、PCよりもワークステーションを用いて全体のOSをUNIXに統一している。

現実の情報資料センターの構築にあたっては、更に詳細なシステム設計が必要である。例えば、セキュリティとファイアウォール等の設計は個別のネットワーク状況に応じて決められる。一般的に問題となる点は、DMZの設定とWeb Serverの位置、ネットワークの容量の計算である。動画や大量の画像データの処理と伝送には実機での実験が必要である。入出力周りが遅いと大量の画像データの入力などに時間が取られる。既存の施設・ネットワークに情報センター（のネットワーク）を接続する場合、現実のトラフィックを測定しつつ、ネットワークトポロジーを変更可能にしておくことが望ましい。また、システムの評価基準の設定と評価の数値化が自動化されることも重要である。社会的なシステムの評価については客観的な外部評価が想定されるところではあるが、評価資料作成のためにコンピュータによる評価数値の作成が必要である。例えば、Webサイトへのアクセス数や検索利用頻度と検索深度を加味した頻度などが考えられる。

また、ここでは資料のデジタル展示と周辺環境のデジタル展示を中心に学術資料展示の範囲をでないことをガイドラインとしている。一般的な歴史展示でも、例えば「踊り念仏」や「お国歌舞伎」に仮想参加体験するようなバーチャル表現を設計することも可能である。移住史で言えば、初期のブラジル移民（移住）地での祭りにバーチャル参加するといった企画も考えられる。

## 5. 具体的な情報展示計画と実施結果

ここでは具体的なコンテンツ作成について、大きな枠組みの中で設計する方法について具体例をあげながら説明する。まず、マルチメディア情報資料展示で表現されるコンテンツ作成に関する目的と原則について、第1章で述べた全体の目的に即して基本的枠組みを示す。

- (1) マルチメディア情報資料展示は、高度に学術的な観点から、移住の歴史、移住の実際、移住政策の計画と実施、移住の在り方、移住の世界的展開過程、グローバルゼーションと移住等の移住資料展示に必要不可欠な社会情報について、事実に基づく学術情報資料を用いて表現する。
- (2) マルチメディア情報資料展示は、その学術的な表現効果を保持するため、展示表現の一環として作成することを妨げないが、提供する学術資料はデータベースより直接供給することが望ましい。
- (3) 移民資料の公開に必要不可欠でありながら保持不可能な資料については可能な限りマルチメディア等の画像資料の製作によって対応する。
- (4) 上述のデータに基づき、情報の重ね合わせなどの処理により新たな発見や表現を得ることを試みる。特に、モデルとシュミレーションのように新しい学術的な情報処理過程の導入も推進する。

このようなアウトラインに沿って、各々のサブ情報システムのコンテンツとして以下を設計する。

### 1) 世界移住マップ（「ジオグラフィック・マイグレーション・システム」）

総合情報展示として「世界移住マップ」をコンピュータ・プログラムとして設計する。地理情報システム上に歴史的・地理的移住情報を重ね合わせ、画像上で検索可能とする。地球画像上に移住船の航路、世界各地の移住の軌跡と分布を表現する。日本とアメリカ大陸、ヨーロッパとアメリカ大陸、アフリカとアメリカ大陸、中国・朝鮮半島、アメリカ大陸、ヨーロッパ、太平洋地域、オーストラリア、中南米と北米などの移民の軌跡と分布が示される。歴史データとしては、狭義の移民・移住に限定せず、人類の移動についてダイナミックに表現する。

その目的は、移民・移住が人類普遍の行動であり、相対的な行為であることを表現するためである。そのため、人類アフリカ起源説から地球全体への人類の移動と拡散を「偉大なる旅程」として示す。その後、大航海時代後の新大陸への移動、アフリカからの奴隷貿易、奴隷貿易禁止後の移民の動向、アジア・太平洋地域への日本からの移民等を示す。その上で、地理情報システム上に日本から北米・中米・南米への移民航路、移民の分布を表現する。移住人口が地理情報システム上に示される。また、年代別の移住状況の変遷が動的に表現される。歴史区分を画面切り替えステージに対応して分けて、人類の移動に始まり、基本的に現在の技術移住に至るまでを地図上に写真・画像等を展開しつつ描く。情報表現装置系としては、プロジェクタ壁打ちの大型画像として、非接触型3D操作装置を実現した。

### 2) 歴史資料情報展示と歴史的近傍環境情報

分割画面式の多元情報ディスプレイを開発し、展示する資料（史料）に対応する時代の背景や環境

を示す映像・画像を送出するシステムを実装した。例えば当時のニュース映像をデジタル処理したものなどである。具体的な資料（史料）とあわせて複合的な効果が期待される。ここでは、画像の選択式は採用していないが、歴史情報の考え方によっては、歴史環境情報を取捨選択して興味を広げるデータベース装置として実装することも一案である。

### 3) 証言映像装置（オーラル・ヒストリーのマルチメディア表現装置）

証言者のデータベースを構築し、それに基づき証言者を選択することが可能な分割画面式の多元情報ディスプレイを開発した。証言者の動画像に対応して、日本語および英語（またはポルトガル語、スペイン語）でテロップと解説を表現することが可能である。操作系としては非接触型の装置を選択した。証言者のデータ数の増加を促進する必要がある。

### 4) 3面マルチ画像装置等およびコンテンツ環境情報展示装置

現在のブラジルなど現地を取材したデジタル画像を編集し、3面マルチ画像に表現する大型映像システムを実装した。ここでは画像と同時に音楽・音声も送出する。また、各展示ポイントで展示資料の理解の補助となる環境情報画像をディスプレイ上に送出する。

### 5) マルチメディア展示「未来に向けて」

マルチメディア展示「未来に向けて」は、マルチメディア展示の中で歴史展示、歴史生活展示、現在展示（移住地の現在の映像等）に対して未来への情報提供を目的とする。マルチメディア表現では、技術的には実在するコンテンツに束縛されないため、未来表現や未来への方向性を表現することが可能である。このとき、「高度な学術性」と「高い公共性」は、モデルの性質と社会的価値の表現によって支えられる。表現設計としては、大テーマである「マルチメディア展示「未来に向けて」」に対して、個別の中テーマを「交流と相互理解が開く移住の未来」、「グローバル化の中での移住」、「ITが生む移住未来」、「移住と未来社会の形成」、「都市と移住の未来」、「国際社会と移住」、「多元社会と移住」と仮に設定し、その表現形を考えることとする。そこで、多様な価値や多元性を表現する多形上に都市や社会を表す画像が生成されるシミュレーション画像や人間の顔写真が混ざりあう画像、さらに地球上の通信ネットワークのイメージ画像等から構成されるコンテンツ・プログラムを作成した。多元社会に関する演説画像や世界人権宣言や国連人権規約などの文言も採用している。

このようなシミュレーションによる合成コンテンツの生成は、異なる種類のしかし確定した情報の重ねあわせによる意味秩序形成を目指す「世界移住マップ」よりも、情報表現としてはもう一歩進んだ情報の意味創造に近い情報表現である。仮に前者が「秩序的な現実を表現する情報」(Dervin1999: 37-38)の複合系であるとするならば後者は「混沌とした事実と秩序を与える情報」なのだろう。しかし、前者の複合的な重ねあわせは単なる秩序化された事実以上の表現であり、従って、後者もまたより創造的な情報合成と理解されるべきである。この意味では、モデルとシミュレーションによる情報表現はしばしば「混沌からの秩序」を超えて、そのときどきの情報創造を発現する<sup>4)</sup>。

ここでは画像を特殊大型スクリーンに投影し、またオリジナルの3Dテーマ音楽も採用している。音楽の立体感もあわせて感じることができる。来館者の画像を取込み、スクリーン上に投影してバーチャル移住者とする装置も付設している。それにより、インタラクティブな展示を行い、移住に対する一体感を醸成することが目的である。

## 6) デジタル移住システム (DMS) (マルチメディア情報検索システム)

マルチメディア情報検索システムは、コンピュータ内部に作られたデジタル・ミュージアムであり、DMSフロア (デジタル移住スペース) から四台の端末を通じてアクセスできる。基本的なコンテンツ作成の指針は、「取奪しない資料館」であり、限界のある展示場スペースに入りきれない展示物、収蔵品に関する情報を提示することにある。これに加えて、各種の情報サービスが提供される。展示場案内としては展示場図の上に各種の移住資料に関する情報を表現する。世界の日系移住情報に関しては、移住渡航図のように世界地図をベースとして選択可能な項目から構成される。収蔵資料のみならず、学術論文、トピックス、統計資料など展示に馴染まない移住関連情報がコンピュータ上で提供される。

すなわち、(1) 展示関連移民資料の検索、(2) テーマ別マルチメディア展示の詳しい説明、(3) 移住先国の現在の状況に関する資料および画像、(4) 各地の日系人団体、日系人の作成した画像資料の公開、(5) 移住に関する論文等をコンテンツとする。

## 6. 実装した統合情報表現システム等の技術的な特徴について

国際協力機構海外移住資料館に実装した統合情報表現システムおよび情報検索システムについて、その技術的な特徴を簡潔に整理する。以下は、(福田2004) に従う。

### 1) すべての情報をデジタル化

資料館の情報展示では、VHSビデオテープのようなアナログ装置を用いず、すべての映像・画像・音声・文字情報をデジタル化している。これにより以下のようなメリットが生じる。

- (a) 展示表現するマルチメディア情報などの情報の品質の劣化が無い。
- (b) インターネットのWebページでの公開やDVDに複製して配布するなど、情報の再利用が容易に行える。ただし、これにはあらかじめ知的財産権等の処理が必要である。

### 2) 中央集中型コンピュータ・システム

館内に30台程度設置されている壁掛けディスプレイモニターや情報端末で表示される情報コンテンツは、すべて中央のサーバ・コンピュータから配信されている。このような構成をとることにより、システム全体の管理が容易となる。また、サーバの基本ソフト (OS) として安定性の高いUNIXを採用することにより、24時間365日の連続稼働を可能としている。24時間365日の連続稼働は、中南米地域からのアクセスを期待しているので不可欠な性質である。

### 3) 情報コンテンツをデータベース化

本システムではすべての映像・画像・音声・文字情報等の情報コンテンツをデータベースに格納し、随時それらの情報を取り出して表示する仕組みとなっている。これは、本システムが、情報コンテンツが常に追加・更新されることを前提として設計されたシステムであるためである。

### 4) 耐故障性・セキュリティに配慮

接触して操作するスイッチ・ボタン類は故障しやすいため、館内での操作装置として非接触センサを多用している。また、情報端末での意図的な破壊工作やハッキングを防止するため、キーボードを置かない、マウスの右クリックを無効にする等のきめ細かい対策を施している。公共情報システムの

端末としての困難な問題である。

#### 5) 多国語 (多言語) 同時対応

多国語 (日本語・英語・スペイン語・ポルトガル語) の同時表示を可能にするため、内部文字コードとしてUnicode (ユニコード) を用いている。

#### 6) データ保護

記憶媒体 (ハードディスク) を冗長構成することにより、ハードウェア障害が発生してもデータは消えない仕組みとしている。また、ソフトウェア障害や人的操作ミスによってデータが消滅しないように、テープ装置による自動バックアップが行われている。

これらの設計上の利点に加えて、実装された移住情報展示システムの基本システムの特徴として汎用のビジネス情報システムを採用したことが挙げられる。これは基本システムにおいては特別に開発した展示用情報システムを用いず、費用対効果を高めつつ、またメンテナンス費用の低廉化や容易性を企図したものである。特に、Javaカードを用いた端末システムを導入したので、画面の切り替えや対応モードの切り替えがカードを用いて現場で可能であり、UNIXであることをあわせて、セキュリティ面においても飛躍的な水準が確保できたと考える。

### 7. デジタル情報展示の実施プロセスと組織

おおよそのデジタル化計画の策定と実施の関係について簡単に説明する。情報資料のデジタル化及びソフトウェア作成等は、開館までの第一期と開館後の2年ないし3年間の第二期に分け、その後、中期計画を作成することが望ましい。第一期においては、全体情報システム及びネットワークの構築とデータベース設計、情報展示システム設計、基本ソフトウェア設計を初期特殊作業とする。各々2ヶ月程度必要であるので、まず概要設計を行ない、その後詳細設計へと移行し、4-6ヶ月後を目処に基礎システム設計を終了する。

実施プロセスにおいても質的コントロールにおいても、最も重要なことは資料の収集とそのデジタル化であり、この作業は情報システム構築と平行して、できればその以前から進める必要がある。つまりデータベースシステムができていなくとも収集資料のデータシートの記入だけは進めておく必要がある。特に、独自の資料収集を行う場合は、海外取材等においても、あらかじめ用意した資料収集シートに構造化した収集資料の属性および収集情報を直ちに記入する体制を整えておく。情報の記入は、資料収集者が責任を持って行い、安定した高品質の情報データを作る必要がある。収集資料の整理とその情報データにばらつきがあるとデータベースの信頼度に影響する。また民族学的な資料の場合、時間の経過に伴い記憶情報が脱落するので、収集日当日に記録を取っておく必要ことが望ましい。データベースの価値の測定では、この収集資料のデジタル化の量と質が一つの指標となる。図2において、標本類の調査・資料整理用のデータシートを示す。学術性のみならず個人情報保護に対応して、権利関係や展示の可否にも配慮している。

図 2

標本類登録力ード

海外移住資料館 2006.3.17

登録番号	<input type="text"/>	(仮)分類記号	<input type="text"/>	記入者名	<input type="text"/>	収集年月日	<input type="text"/>
資料名	<input type="text"/>		品名	<input type="text"/>	受入年月日	<input type="text"/>	<input type="text"/>
資料名ヨミ	<input type="text"/>		材質	<input type="text"/>	登録年月日	<input type="text"/>	<input type="text"/>
現地語名	<input type="text"/>		使用時期	<input type="text"/>			
数量	<input type="text"/>	状態	<input type="text"/>				
入手先国・地域	<input type="text"/>	国・地域コード	<input type="text"/>				
入手先団体・個人名	<input type="text"/>		使用者名ヨミ	<input type="text"/>			
入手先団体・個人名ヨミ	<input type="text"/>		使用目的・用途	<input type="text"/>			
連絡先住所	<input type="text"/>		寸法	<input type="text"/>			
住所ヨミ	<input type="text"/>		詳細寸法: 幅(直径) <input type="text"/> ×奥行 <input type="text"/> ×高さ <input type="text"/> [mm]	<input type="text"/>			
郵便番号	<input type="text"/>	収蔵場所	重量	<input type="text"/>	[g]	<input type="text"/>	
Tel	<input type="text"/>	Fax	<input type="text"/>				
	<input type="text"/>	E-mail	<input type="text"/>				
受入方法	<input type="text"/>	受入備考	<input type="text"/>				
本館出陳歴	<input type="text"/>	修理歴	<input type="text"/>				
館外貸出歴	<input type="text"/>	利用規制	<input type="text"/>				
キーワード	<input type="text"/>	利用規制備考	<input type="text"/>				
備考	<input type="text"/>	公開レベル: 全体	<input type="text"/>	個人情報	<input type="text"/>	撮影番号	<input type="text"/>
		作業管理メモ	<input type="text"/>				
		写真	<input type="text"/>				

ハードシステムの仕様書作成はシステム全体の基礎的設計のあと、概ね2ヶ月程度を目処とする。ソフトウェア及びコンテンツ作成仕様書では、ソフトウェアについてはデータベース構築及びコンテンツ作成を情報展示必要分を優先して行ない、情報展示ソフトウェア及びコンテンツ作成はこれと平行して行ない同様に6ヶ月程度を納入の目処とする。そのために、デジタル化資料の選択及び優先順位の第一期分作成を適宜終了する。第二期を開館後として、第二期計画概要を開館の6ヶ月前までに策定する。

情報システムの構築に伴い対応する組織の整備を平行して進める。情報管理組織は、資料館全体の運営委員会（仮称）の中に情報（小）委員会を設置し、情報システム管理、情報システム更新、デジタル化の促進、情報公開等の決定等をおこなうことが望ましい。情報システム運営及びデジタル・ミュージアム運営は従来の組織に比して、横断的かつ柔軟な対応が必要だからである。例えば、ホームページを用いたデジタル・ミュージアムの提供など、広報的な要素と博物館的な要素が混在する。このとき関係各部署の責任者から構成される委員会が求められる。また情報システム及び情報展示、情報資料管理を業務として経験のある人員を置くことが望ましい。

## 8. 情報展示システムおよびネットワーク・デジタル・ミュージアムの運営と組織構成

ネットワーク・データベースの構築には、コンピュータ・ネットワークだけでなく人的ネットワークが必要である。特に、国際協力機構海外移住資料館の例です、国際協力機構が海外移住の所轄組織であったことから、中南米を中心に各地に人的ネットワークを維持しており、現地事情に詳しい職員も多く在籍している。そのため、組織的な人的ネットワーク作りが可能であり、資料館のデータベース構築に向けて人的ネットワークを組み直し、情報のネットワークと一体化することができる。

情報管理組織と経営組織、および情報構造は同相構造であるとき、もっとも有効なネットワークングおよび情報収集が可能となる。また自然な情報組織過程では情報管理組織と経営組織、および情報構造は一致する（Yamamoto, Nakano, and Matsuda 1992: 211-214）。これは海外移住資料館の事例でも顕著に見て取れた。

人的ネットワークと組織的対応力を活用した具体的な活動例を挙げよう。資料館では開館当初からブラジル日本移民史料館との協力関係を結び、コンテンツの提供を受けている。また、在亜日系団体連合会（アルゼンチン）との協力によるデジタル博物館やレジストロ（ブラジル・サンパウロ）の町を再現するバーチャル・ミュージアムなどが第二期の中期計画の中で検討されている。それぞれ個々の関係者のF2F（フェース・トゥ・フェース）の努力によるものであり、これらの人的ネットワークは、デジタル化の協力ノードを形成するだけでなく、情報や資料の収集、組織化においても有効である。

ネットワーク・データベースの構築は海外のみならず日本国内の移住博物館等との連携を可能とする。特に、広島市の所有する膨大な移住関連資料について、2006年3月に広島市デジタル移民博物館を国際協力機構の事業の一環として立ち上げ、国際協力機構海外移住資料館のサーバから発信した。これは人的なネットワークの成果といってよい。すなわち、人的ネットワークを構成してコンピュータ・ネットワークを結合する組織が、ネットワーク・システムの構築過程と平行して必要である。

このとき、移住先国の日系人団体等との結合組織が求められ、相互に恵まれるスキーム（互恵的なスキーム）に誘導されることで、人的ネットワークと情報ネットワークと情報組織が一体化して、それぞれが同相的な構造をとるようになる。もし情報収集のネットワークと考えて、そのいくつかのノードを用意するとしたならば、それに対応する相手方（この場合は移住先国）の組織・団体あるいは個人を見いだすことが重要である。

これらの海外移住情報はまったく加工せずにそのまま持ち込んできていることに意味がある。移住先地域の視点で構成された資料がネットワークを通じて世界で共有される。他方で、海外移住資料館においては、これらの情報に対応する学術的な情報処理過程をどのように組み合わせるかが今後の課題となる。

また、「収奪なきバーチャル・コレクション」としてのデジタル表現を活かしたものに、将来的な展開として「世界各地の移民文化のコレクション」、「全世界に散らばる日系人美術・建築作品のコレクション」などが考えられる。さらに世界の移民関連博物館・研究センタにアクセスし、それぞれの展示内容を横断的に比較することも重要である。これらの実現にも人的ネットワークと組織化および情報システム構造の一致が必要であることはいうまでもない。

なおホームページアクセス数（www.jomm.jp）は、平成16年度が15244であるのに対して、平成17年度は、平成18年2月末現在で50248である。認知度の高まりやメディアの効果など分析が困難な点もあるが、ネットワーク・ミュージアム固有の急激なアクセスの拡大である可能性も否定できない。

## おわりに

多様な社会情報データを統合して表現する統合情報システムの構築は、きわめて創造的であり、各所に工学的な工夫と芸術的な感覚が求められる。さらに、ヒューマンインターフェースとして、人間工学的観点も必要であり、コンテンツの構成にはモデルとシミュレーションの技法を含めた最新の計算機科学と社会科学の融合が要求される。それらが情報ネットワークの上に実現することで、世界の各地のデータベースと可能となる。他方で、このような情報システムと情報は人間組織と同相構造を保つことではじめて有効に機能する。組織設計と情報システム設計の一体性は、統合情報表現システムにおいても要求される。有効な組織と一体化した情報システム運営を行った上で、デジタル・ミュージアムのバージョンアップには多大な労力が必要である。人工世界は全て設計され人工的に作られなければならないからである。国際協力機構海外移住資料館を海外移住の拠点情報センターとして世界各地の資料館・博物館等と協力しつつ「収奪しない博物館」としてのデジタル・ネットワーク・ミュージアムを構築すること自体が国際協力のプロセスでもある。

社会的な要求事項である聴覚障害者のための小形携帯電子案内システムや手話機能の付加などのバリアフリー装置の導入は本例の海外移住資料館では実現していない。またデジタル展示は画像が中心となりがちで視覚障害者には認識が困難となる傾向がある。それを補う方法として音声資料の収集と展示の拡大を進めることで、音の資料館としても立体的に聞き巡ることができるようになる。そのためにも音声資料の収集を行う必要がある。データベース・コンテンツは、ネットワーク・データベー

スの特徴として、今後も急激に拡大することが考えられるが、オリジナルに収集した資料のデジタル化と公開こそがデータベースの特徴となることはいうまでもない。それらに基づき多様な情報と組み合わせた高次情報が統合情報表現システムにおいて表現されることが期待される。

## 謝 辞

このような挑戦的な情報展示並びに展示情報システム開発は、国際協力機構はもとより、歴史展示を担当された阪田安雄大阪学院大学教授並びに主に「新世界に参加す」展示を担当された中牧弘允国立民族学博物館教授の学問領域を越えたご理解と御支援がなければ、到底実現し得なかった。ここに記して謝したい。海外日系人協会の職員各位及び海外移住資料館研究員各位のご貢献もまことに多とするものである。本システム開発および実装は、サン・マイクロシステムズ株式会社、株式会社日立製作所、株式会社AZM（アズム）の技術開発にかける情熱に負うものである。情報システム実装後も移住支援の経験と人的ネットワークを活用しネットワーク・データベースやバーチャル・ミュージアムの推進に絶大なご努力を頂いた国際協力機構の職員各位の御協力にも深く感謝したい。

(2006年3月)

## 註

- 1) ネットワーク・データベースの中でもっともオープンなものの一つはWikipedia。ただし、管理は比較的厳しいが学術データベースとしての信頼性や均質性には疑問が残る。他方で、法と判例のデータベースのような厳密に管理された高品質のデータベースは会員制となり課金される。ネットワーク・データベースの管理問題は本稿の域を越えるが、管理体制およびデータの質と開放性はトレード・オフの関係にある。
- 2) ビデオテークは1977年開館の国立民族学博物館に設置されたオンデマンド概念を機械的に実現した画像選択システム。
- 3) 国際協力機構海外移住資料館の開館の概略は、<http://www.jomm.jp>で確認できる。
- 4) 展示表現する情報の性質の違いは、表現装置のみならず全体のコンセプトの統一にも強く影響する。歴史情報は、文書等の第一次資料に基づく限定された解釈論理によって表現される。これに対して、文化人類学・民俗学に基づく情報は、聞き取り調査等のよりソフトなデータに基づき、聞き取り者の資質や経験に資料採取自体が影響される。さらに表現形の可能性はきわめて多岐にわたる。情報社会学やシミュレーション科学に基づく情報は、さらに概念的なモデルや論理に基づき、現実のデータからは距離を隔てることで新たな表現性を獲得している面もある。このような情報の質の違いについて、整理しておくことも、マルチメディア複合展示の構築には必須である。

## 引用文献

Dervin, Brenda

1999 “*Chaos, Order, and Sense-Making: A Proposed Theory for Information Design*”, Robert Jacobson ed. Information Design, MIT Press, Pp.37-39.

福田直毅

2004 「神奈川県博物館協会平成16年度第1回研修会資料（2004年4月22日）」。

YAMAMOTO, Tadashi, Bumpei NAKANO and Takehiko MATSUDA

1992 “System, Information and Self-dynamics”, International Conference on Economics / Management and Information Technology (CEMIT92/CECOIA3), Pp.211-214.

# 海外移住資料館を活用した国際理解教育の授業づくり

－教師研修を通してみた移民学習の可能性－

森茂岳雄 中央大学教授  
中山京子 京都ノートルダム女子大学専任講師

## 〈目次〉

1. 「移民の時代」と移民学習
2. グローバル時代における移民学習の意義
3. 学校教育における博物館活用と新しい学びの創造
4. 海外移住資料館を活用した国際理解教育の構想と学習プログラムの開発
5. 海外移住資料館における国際理解教育の教師研修ワークショップ
6. 教師研修ワークショップの成果
7. 結語

キーワード：グローバル教育と多文化教育のインターフェイス、博学連携、海外移住資料館、国際理解教育、移民学習、教師研修ワークショップ

## Development of Learning Programs and Materials for International Education in the Japanese Overseas Migration Museum: Using the Teacher Training Workshops for Migration Studies

Takeo MORIMO, Chuo University  
Kyoko NAKAYAMA, Kyoto Notre Dame University

Abstract : The purpose of this paper is to clarify the possibility of migration studies in schools and the significance of using museum in international education through the teacher training workshop in the Japanese Overseas Migration Museum.

Recently, the advance of globalization in the world has brought about a more multicultural society in a nation. It is very important to educate citizens with both global and multicultural citizenship in such a global age. The study of migration has the possibility of interfacing global education with multicultural education.

We developed teaching materials (e.g. “Kamishibai”, paper pictures and “Karuta”, cards), along with the curriculum and resources guide for the Japanese Overseas Migration Museum and we have held some teacher training workshops in this museum. We are confident of the possibility of migration studies and the significance of using the Museum in

international education through such experiences.

Key Words : Interface between Global Education and Multicultural Education, Cooperation between School and Museum, International Education, Japanese Overseas Migration Museum, Migration Studies, Teacher Training Workshop

## 1. 「移民の時代」と移民学習

### 1) グローバリゼーションと移民の時代

現代は「移民の時代」(Castles & Miller 1996) とも呼ばれる。国連人口部によれば、世界中で国境を越えて移動する人々は、2005年には1億9100万人に達し、地球上で自国以外に住んでいると推計される人口は世界の人口の30人に1人の割合になっている(国連人口基金 2006)。このようなグローバルな人の移動の増大は、必然的に一国内の多民族化・多文化化の進行を生み出している。グローバル化と多文化化が相互に連動して進行しているのが今日の社会変動の特色である。

この移民の加速化の動きは、近年日本においても顕著になってきている。法務省の発表によると、2005年末の我が国の外国人登録者数は約201万人で、はじめて200万人を突破し、総人口の1.57%に達している。特にここ数年は、世界中から平均して一年間に約6万人に近い人々が日本に移住し新たな生活を始めたことになる。また、ここ10数年間に、就労や勉学を目的に約30万人の日系人とその家族が来日している。

一方、逆の視点から見ると、日本もつい半世紀前までは移民の送り出し国であった。日本は開国早々の百数十年前、ハワイや北米に多くの移民を送った。その後も、中南米、東南アジア、中国大陸等へと多くの日本人が移民した。戦後も、農家の次男問題や自己の潜在能力を広く海外に求めた青年の移民が続き、そのような歴史的経験の中で、現在250万人以上の日系人が海外に生活している。(図1)

近代日本の黎明期に多くの日本人が海外に移民した事実、彼らとその子孫の歴史的経験や現状、現在日本にUターン移民してきている日系人の現状や問題を立場を変えて共感的に学ぶことは、グローバル化と多文化化が連動して進行するこれからの社会を生きる子どもたちにとって「共生」に向けての資質を養う上で意義があると考えられる。

### 2) 移民学習の先行研究

近年まで日本の学校教育において、海外に出ていった日系移民や、日本に移民してきた外国人の歴史的経験や生活の現状について、教科書をはじめ授業の中で取り上げられることはほとんどなかった。

図1 海外日系人数(海外日系人協会、1999年)



ようやくここ数年、社会科教科書においても日系移民に関して記述されるようになってきており、教師による日系移民を扱った個人的な実践報告もなされるようになってきている。国際理解教育の文脈の中で外国人労働者問題に関わって日系移民を扱った比較的早い時期の実践に藤原孝章の『外国人労働者問題をどう教えるかーグローバル時代の国際理解教育一』（明石書店、1994年）がある。近年の外国人労働者問題をテーマとしながら、「心情への共感」場面において「歴史的な事例に学ぶ」として「からゆきさん」や強制収容を中心とした「日系アメリカ人の体験」の学習を取り上げている。本実践は、生徒に現在の日本の多文化社会の進展と過去の日系人移民の体験を関連させて思考させようとしている点で示唆的である。

最近では、2003～2004年度に東京学芸大学の教育実践研究機構プロジェクトが「『グローバリゼーションと移民・移住』をテーマとした歴史・地理的分野の教材開発および教育実践」というプロジェクトを行なった。ここでは、教科書で「グローバリゼーション」「移民」がどの部分でどのように記述されているかの分析や授業実践を通してモデルとして移民学習の「授業書」が示された。その中には、平田博嗣実践「ブラジル移民の歴史」「ハワイ移民の歴史」（中2）、鈴木雄治実践「ヒトの移動-内なる国際化-」（中3）など日系移民に焦点化した単元も示され、それぞれの授業は今後の多文化共生社会を考える授業づくりに示唆を与えている。しかし、本研究においては、日本における移民学習の先行研究についてはまったく触れられておらず、先行研究と比較した本研究の特色や意義が明確ではない。また、テーマが「グローバリゼーションと移民・移住」とあるが、本報告書に収録された実践は必ずしもこの両者の関係を意識して構想されたものではなく、一貫した課題意識にも欠ける。近年、小学校社会科教科書に「移民」が取り上げられるようになってきているにもかかわらず、本報告書では、研究対象が「中学・高校」に限定されており、小学校の実践は含まれていない（椿編 2004）。この他、近年、日本の地域社会の多文化化との関連で移民を扱った中・高等学校での実践もいくつか報告されている。<sup>1)</sup>

現在、小学校において日系移民をあつかった授業実践は、「多文化共生」が学校や地域の課題となっている地域において「総合的な学習の時間」を活用して少しずつではあるが報告されるようになってきている。これらの多くは、日系外国人労働者が多く集住する地域の日常生活場面で起こっている問題を取りあげて問題解決を図ろうとする学習活動であり、地域に共生する日系外国人や学級に在籍する日系人の保護者から話を聞きながら、自分たちの行動をふりかえらせる試み<sup>2)</sup>もなされているが、日系移民の歴史的経験を理解し、移民を包括的に扱ったものではない。

そこで本稿では、独立行政法人国際協力機構（以下、JICAと略）横浜海外移住資料館（Japanese Overseas Migration Museum）において著者らが行ってきた移民をテーマにした国際理解教育の教師研修の活動を通して、「移民学習」の意義を検討するとともに、国際理解教育における博物館活用の意義と可能性を考察する。

## 2. グローバル時代における移民学習の意義

### 1) グローバル教育と多文化教育のインターフェイスとしての移民学習

今後、世界の移民人口はますます増加すると予想されている。このような地球的規模で相互依存を増しつつある21世紀の世界の中では、グローバルな価値の実現をめざして行動できる地球市民としての資質（Global Citizenship）の育成に加え、多文化社会の中で異なる文化を受容し、尊重し、共生に向けて行動できる市民としての資質（Multicultural Citizenship）の育成の両方が求められている。今日のグローバル時代における国際理解教育は、このグローバル教育と多文化教育を包括するものとし

て構想されなければならない。(森茂 2004) そのように考えると、「移民」についての学習は、人の国境を越えたグローバルな移動に伴う地球的な規模での相互依存関係と、一国内における多文化の共生をつなげて考えられるという意味で、またこれまで別々の文脈で論じられ、実践させてきたグローバル教育と多文化教育のインターフェイス<sup>3)</sup> を考えるキー・コンセプト<sup>4)</sup> であると考えられる。これが移民学習の第一の意義である。

## 2) 多文化社会における人権教育・市民教育としての移民学習

第二に、今日、グローバル化によって移民の流入が目立つ先進国の多くでは、異なる言語を話し、他の神を信じ、異なる文化に属する移民によって侵略を受けるのではないか、という不安が持たれるようになってきている。移民はその国の職を奪い、領土を占領し、福祉制度によりかかり、生活や環境を脅かし、国家組織さえも脅かしかねないとの不安は根強い(ウェイナー 1999:16)。このように「移民は国民国家においては他者である。国民国家が移民を他者化し、労働力としては受け入れられながらも人間としては排除するという図式は、国民国家であるかぎり変わりはない」(伊豫谷 2001:21)。このような指摘にあるように、移民は移住先において絶えず自由、平等、公正といった基本的人権の脅威にさらされてきた。その点についてサッセン(Saskia Sassen)は、象徴的に「経済のグローバリゼーションは、国民経済を脱国家化(デナショナルライズ)し、それとは対照的に、移民は、政治を再国家化(リナショナルライズ)する」(サッセン 1999:129)と述べている。すなわち、現在諸国家の間では、資本、情報、サービスの流れの国境管理を撤廃し、グローバル化を促進しようという合意ができつつある一方で、移民や難民の問題になると、多くの国民国家は自国の国境を管理する主権国家の権利を主張するのである。その意味で、移民をテーマに学習することは国民国家によって他者化された移民や難民の基本的人権の問題、基本的人権と国家主権との間の緊張関係や調整、多文化社会における人権や市民権のあり方といった民主主義の基本原則を学習する市民教育(Citizenship Education)格好の機会ともなりうる。<sup>5)</sup> これが移民学習の第二の意義である。

## 3) 国際理解教育における本質主義的文化認識批判としての移民学習

第三に、移民文化の特色は、「ディアスポラ性」と「ハイブリディティ(異種混淆性)」である。<sup>6)</sup> ディアスポラとは、本来旧約聖書にあるユダヤ人の「離散」を意味していたが、奴隷貿易や植民の結果として世界の至る所へ分散された人々の文化、さらに広い意味では移民や難民、出稼ぎ労働者などが国境を越えて移動するプロセスで生成された文化を指すようになった。ディアスポラという言葉には、またかつて自分が属していた文化や新しく属した文化とは違う新しい文化を創造、発展させていくという積極的な意味が含まれている。さらにディアスポラは、「一つの『文化』から追放され、『文化』の『あいだ』を移動しながら独自のネットワークをつくりあげてきたがゆえに、支配的な『文化』に対するクリエイティブな批判ともなりうる可能性をも持っている」(浜 2005:200)。ディアスポラ文化の特色は、複数の文化が混合して形成された、まさに「ハイブリディティ」であり、それは絶えず変動し、更新されていくものである。従来の国際理解教育(異文化理解教育)においては、ある国(地域、民族、人種)やその文化を「均質なもの」「非歴史的なもの」として実体化したり、本質化したりしてとらえることが多かった。今日の「移民の時代」といわれるディアスポラの世界状況の中で、「ハイブリディティ」という視点で文化をとらえることは、国民や民族、そしてその文化を固定的、本質的に捉えるような見方を批判的に見る上で重要な視点である。これが移民学習の第三の意義である。

### 3. 学校教育における博物館活用と新しい学びの創造

筆者らは、これまで以上のような移民学習の意義をふまえて、移民をテーマした博物館である海外移住資料館を活用した学習プログラムの開発やそれを用いた教師研修を行ってきた。そこで、次に学校教育における博物館・資料館の活用の意義について述べる。

2002年度からの新指導要領による「総合的学習の時間」と「完全学校週五日制」の開始の中、これまで学校に閉じこめられがちであった学びの場を「ひろげ」、「つなげ」ていくメディアとしての博物館の意義と可能性が認識され、現在学校と博物館の連携がさまざまな形で進められてきている（中山2004：26、森茂編2005）。

新設された「総合的学習の時間」においては、その実施に当たって配慮する事項の一つとして、「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること」（小・中・高等学校の学習指導要領（2003年一部改正）「総則」、以下下線引用者）が明記された。

特に、「総合的な学習の時間」においては、その学習課題の一つとして情報、環境、福祉・健康等と並んで「国際理解」があげられ、現在学校現場において様々な取り組みがなされてきている。

また教科においても、特に小・中学校の社会科において学習指導要領の中で博物館・資料館の活用が言及されている。すなわち小学校社会科においては、学習指導要領の「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い」の1（3）において、「博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行うようにすること」（下線部引用者）と述べられ、具体的には『小学校学習指導要領解説・社会編』の次の箇所において博物館・資料館の活用について言及された（表1）。

表1 小学校学習指導要領解説（社会編）にみる博物館の活用に関する記述

学 年	内 容（下線部引用者）
3・4年	(1)ア「主な公共施設などの場所と働き」の「取り上げる施設」の中に「美術館」があげられた。
	(5)「地域の人々の生活の移り変わりについての学習では、博物館や郷土資料館などを見学したり、古くからの道具などを観察、調査したりすることができる。」
	(5)ウ「例えば、博物館や郷土資料館などを訪ね、当日使われていた道具を調べたり、実際に触れたり使ったりしながら、先人の工夫や努力、当時の人々の生活の様子などを具体的に調べることができるようにすることが大切である。」
6 年	(5)「地域の博物館や郷土資料館を利用して文化遺産について学芸員の話を開いたり、さらに身近な地域に残る遺跡や文化財などを訪ねて調べたりすることは、歴史的事象を具体的に理解する上で有効な学習である。」
	(1)ク「学校図書館や公共図書館、博物館や郷土資料館などを活用したり、児童が自ら資料を活用したり、地域の高齢者に話を開いたりするなどの活動を取り入れ、……（後略）。」

表1で示したように、具体的に言及されているのは、特に3・4学年の地域学習と6年の歴史学習であるが、指導計画の作成においては各学年において全体として配慮されるものである。

また、中学校社会科においても、「内容の取扱い」の(1)オで「日本人の生活や生活に根ざした文化については、…（中略）…民俗学などの成果の活用や博物館、郷土資料館などの見学・調査を通じて、生活文化の展開を具体的に学ぶことができるようにすること。」と述べられ、(2)イでは内容の(1)イ（身近な地域の歴史を調べる活動）に関して、「…博物館、郷土資料館等の活用も考慮すること」

と述べられた。

このように、今日学校教育と博物館の連携が求められる中、学びの場としての、また学びのリソース・センターとしての博物館の役割は大きくなってきている。

教育メディアとしての博物館は単に学習の素材を提供するだけの場所ではない。博物館は子どもたちに学校とは異なる新しい学びの環境と方法を提供してくれる。これは博物館の役割についての近年の意識やその根底にある知識観の変化に関係している。すなわち、伝統的に博物館は人々を啓蒙するための普遍的なモデルや審美基準を提供する「神殿」とされ、そこにおいて展示は制度化された人間の知の体系として君臨してきた。しかし近年、博物館を意見対立、実験、討論、ワークショップ等の場とみなす「フォーラムとしての博物館」（吉田 1999：212-235）という考え方が出現してきている。そこにおいて知識は、主体と環境との関わりの中でリアルタイムに生成され、再構成されるもの、つまり「反表象主義」、「社会的構成主義」の知識観である（小笠原 2001）。

このようなフォーラムとしての博物館が提起する知識観、学習観は、学校における従来の知識教授といった伝統的な学習観を克服する新しい視点と方法を提供してくれる。

このような考え方をもとに海外移住資料館において学習材及び学習プログラムの開発を行なった。

#### 4. 海外移住資料館を活用した国際理解教育の構想と学習プログラムの開発

2002年10月、横浜のみなとみらい21新港地区にオープンした海外移住資料館は、日本の海外移住の歴史および移住者と日系人の現在の姿をテーマにした博物館である。展示では、JICAが、戦後、主に中南米への移住事業の一翼を担ったことから、中南米とそれに先行するハワイを含む北米を主な対象にしている。ここでは、日系移民に関する資料の収集、保存、展示、研究の他、設立趣旨にあるように「移住者たちの足跡や役割について多くの人々に伝え、理解を深めてもらいとくに若い世代の人々に地球市民として、一人ひとりが移住者からのメッセージを受け止めてもらいたいとの思いから」（下線引用者）（海外移住資料館編 2004：はじめに）、開館当初より教育活動にも積極的に取り組んできている。

同館の展示は、以下の五つのコーナーで構成されている。

- ①「**海外移住の歴史**」：日本の海外移住の歴史をⅠ期「海外渡航のはじまり」（1853-1884年）、Ⅱ期「海外出稼ぎのはじまり」（1885-1907年）、Ⅲ期「定住移民（移植民）のはじまり」（1908-1940年）、Ⅳ期「海外移住の中断」（1941-1945年）、Ⅴ期「戦後移住のはじまり」（1946-1999年）の5期に分け、年表、文献、写真、映像によって各時代の重要な出来事を示している。世界移住マップ、都道府県別移住者統計などで構成される。
- ②「**われら新世界に参加す**」<sup>7)</sup>：移住者たちは新世界に参加することを通して、その地での新しい文明の形成に重要な役割を果たしたことをテーマに展示。大型映像、模型、標本資料などから、「移住の背景—なぜ海外に行ったか」、「移住の道のり—どうやって行ったのか」、「移住先の風景—どんなところへ行ったのか」、「移住者のなりわい—どんな仕事についたのか」、「移住者の家庭—どんな暮らしをしたのか」、「移住者のきずな—どんなコミュニティをつくったのか」に分けて紹介している。
- ③「**ニッケイ・ライフ・ヒストリー**」：移住者の個人の生活史を「生まれる、育つ、成人として、老いる」の4段階に分けて、主に写真で構成。6世代が誕生したハワイのビッグファミリーなどの写真も展示されている。

- ④「日本の中のニッケイ世界の中のニッケイ」：日本から見た「日系人」と海外で「Nikkei」と呼ばれる人々には、しばしば大きな違いが見られる。本コーナーでは、日本と世界における日系の人々の独自の文化形成、文化活動を展示している。
- ⑤「デジタル移住スペース（情報展示解説）」：デジタル移住スペース「未来に向けて（新しい天空）」は、多元情報シミュレーションであり、移住の未来についての多元的なデータを合成し、コンピュータ・シミュレーションで表現している。現在の移住の世界的状況と近未来における移住の姿を多元的に提示することで、移住を自己の問題として認識することを促し、さらに世界公共性の一つとしての移住概念を紹介する情報装置である。一人ひとりの来館者が人類の移住の未来を自己の問題として体感すること目的としている。

展示室では、JICAのOBや来日している日系人研修生などがボランティアとして展示解説や来館者の質問、学習支援に対応している。このように移住資料館には、海外移住した人々の歴史的経験を学ぶ豊富な資料と空間があり、日系人の視点を通して海外移住についての理解を深めることができる。同時に、「日系人」の歴史や経験を学ぶことで、地域にくらす日系人へ目を向けることができ、また人の移動によってもたらされる衣、食、住、祭などに関する具体的な展示物から、文化接触と文化変容の過程を具体的に見ることができる。

本資料館は国際理解教育の学習の場として、また学習のリソース・センターとしてもさまざまな可能性をもっている。昨年（2005）度から使用されている小学校社会科教科書『新編新しい社会 6下』（東京書籍）では、国際理解に関する大単元「世界の中の日本」の中で、1頁を割り「海外移住資料館をたずねて」として、ブラジルに渡った日系移民について記述されている（資料1参照）。<sup>8)</sup>

しかし、開館して間もない同館は、学校教育関係者の中ではまだ知名度が低いこと、教師の移民についての理解が十分でないこと等から、周辺の学校において移住資料館を活用したり、移民を取りあげて授業を行なったりする機会はまだまだ多いとは言えない。たとえ、学校や学級に日系人児童生徒が在籍していても、彼らの学校生活や学習を支援することに追われて、彼らのルーツを学級で理解する場や機会を逸していることも多い。

2004年度の総来館者数19,086人中、一般来館で来た児童生徒は840人、団体で来た児童生徒は2,981人にのぼり、来館児童生徒数は全体の2割にあたる。来館児童生徒数が多いのは5月、6月、ついで9月、10月である。これは遠足や社会科見学などの学校行事の一環で訪れるためと推測できる。学校行事として教師が引率してくる以上、教師も移民についての理解を深め、国際理解教育の学習の場として、学習のリソース・センターとして効果的に同館を活用することが期待される。

そこで、同館では開館以来「学習プログラム」の開発にむけてさまざまな取り組みを行ってきた。筆者らは、同館の支援を得ながら、博物館や学校で活用できる学習材として移民に関する「紙芝居」<sup>9)</sup>、「移民カルタ」<sup>10)</sup>の作成や、主に学校教育を対象とした『学習活動の手引き』（海外移住資料館 2005）<sup>11)</sup>の開発、それを用いた教師の研修に携わってきた。特に学習活動を構想するにあたり、展示内容をふまえながら、グローバル教育と多文化教育のインターフェイスという視点から移住資料館を活用した国際理解教育を構想した（図2）。<sup>12)</sup>



## 5. 海外移住資料館における国際理解教育の教師研修ワークショップ

『学習活動の手引き』や「紙芝居」「移民カルタ」等の学習材の作成とともに、それらを活用した教師研修会を通して、国際理解教育における移民学習の意義や海外移住資料館の活用可能性について検討してきた。研修会において筆者らは、2.で述べた三つの視点から「移民」を教材としてとりあげ、講話、ワークショップを実施した。ここでは、2003年から4回にわたって行なってきた教員研修ワークショップの概要について紹介する。

### 1) 神奈川県国際交流協会主催フォーラム「これからの国際理解教育を提案する！」

2003年1月31日に神奈川県立地球市民かながわプラザにおいて、神奈川県国際交流協会主催によるフォーラム「これからの国際理解教育を提案する～グローバル教育と多文化教育をつなぐ～」が開催された。<sup>13)</sup> このフォーラムの第1部において、国際理解教育に関心をもつ教師を対象にしたワークショップ『「移民」をテーマにした実践の新しい試み—JICA横浜移住資料館を活用した取り組みに向けて—』を実施した。ワークショップの内容を以下に示す。

#### 1. 多文化教育とグローバル教育のインターフェイス

事例1：多文化マップづくり まちの中のワールドカルチャーを探せ！（東京／小学校4年生）

事例2：「移民」を教材に考える

#### 2. 博物館展示を活用することの意義 ・ JICA移住資料館の活用 ・ 移住資料館概要

#### 3. これからの学習プログラムづくり ・ 一般来館を対象として ・ 学校教育を対象として

#### 4. 日系移民の歴史的経験—ブラジルを中心に— ・ 外国人登録者数から ・ 小学校教科書記述

#### 5. 学習プランづくり—グローバル教育と多文化教育のインターフェイスを意識して—

・ かるたづくり ・ 紙芝居絵コンテ ・ 学習単元構想

#### 6. ストーリーラインをつくる 「ハレの日の食卓」を例に

#### 7. 作品の共有化

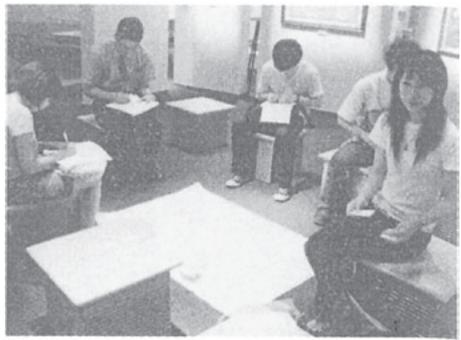
・ 地域に変える可能性 ・ インターフェイスをどのように意識して表現したか

この研修会においては、まず、フォーラムの全体テーマにかかわる「グローバル教育と多文化教育のインターフェイス」について「移民」をキーワードにして話し、海外移住資料館について紹介した。そして、海外移住資料館の活用を意識しながらの学習プログラムづくりを行なうワークショップでは、日本社会でディアスポラとして生きる日系ブラジル人をとりあげ、外国人登録者数などの統計や小学校社会科教科書事例を参考に、学習プランづくりや活動プランづくりを行なった。ワークショップではカルタづくりの参加者が多く、カルタの読み札の句が多数読まれた。

### 2) 東京学芸大学附属世田谷小中学校主催現職教員研修プログラム「博物館との連携を生かした国際理解教育—海外移住資料館を活用した事例研究を中心に—」

2004年7月31日に、東京学芸大学附属世田谷小中学校主催による現職教員研修プログラムの一つとして、「博物館との連携を生かした国際理解教育—海外移住資料館を活用した事例研究を中心に—」をテーマに、主に国際理解教育や社会科担当教師を対象にした研修会を開催した。午前には、全米日系人博物館巡回展示「弁当からミックスプレートへ」や海外移住資料館を活用した小中学校における「移民」に関する国際理解教育の実践事例紹介をした（資料2参照）。午後には、海外移住資料館小嶋

茂氏による資料館インドガイドツアーと、「移民」をテーマにした単元開発およびカルタ作りのワークショップを行なった。そこでは三つのねらい「(1)地域の多文化社会を構成する日系人の歴史的経験について学び、学級に在籍する日系人児童生徒の理解に役立てる。(2)小学校6年生、中学校社会科教科書にでてくる『移民』に関する学習支援および単元開発を行う。(3)『総合的な学習の時間』での取り組みや、社会科見学での訪問先として移住資料館活用の可能性を考える」を研修会参加者に示した。



### 3) JICA横浜国際センター主催「開発教育（国際理解教育）指導者セミナー 2004」

2005年3月5日に、神奈川県内の小中高等学校教師・教育機関在勤者を対象にしたJICA横浜国際センター主催の「開発教育（国際理解教育）指導者セミナー 2004」が2日間に渡って開催された。その中で講話「海外移住資料館を活用した学習プログラムの開発と国際理解教育」と同資料館ガイドツアー、ワークショップを実施した。

まず、講話の中で、「移民」をキーワードにしてグローバル教育と多文化教育のインターフェイスを考えることの意義や海外移住資料館活用の可能性について解説した。その後、移民をテーマにした四つの紙芝居「ブラジルのカリナ」「弁当からミックスプレートへ」「ハワイに渡った日系移民」「海を渡った日系移民」(当時いずれも試作品)を読むジグソー活動を行なった。続いて資料館研究員の小嶋茂氏による展示ガイドツアーおよび筆者による教材づくりの視点に立った展示ガイドツアー、製作活動「学習構想をたてる(カルタづくり、指導計画づくりなど)」、研修成果の共有活動を展開した。教材づくりの視点に立った展示ガイドツアーでは、展示場にある衣服や食、婚姻や家族にかかわるものから移民文化のハイブリディティについて考えることの可能性や、日系移民への偏見や第二次世界大戦中の日系人強制収容に関する展示から人権について考えることの可能性を示した。最後の研修成果共有の場面では、参加者から自分の学校で実践をすることを仮定したプランが多数しめされ、簡単な模擬授業も行われた。

### 4) JICA横浜国際センター主催教師研修セミナー「海外移住資料館を活用した授業づくり」

2005年8月25日に海外移住資料館において、小中高等学校教師・教育機関在勤者を対象にしたJICA横浜国際センター主催による研修会「海外移住資料館を活用した授業づくり—かるたと紙芝居を教材にして—」が開催された。この研修会のねらいは、完成した紙芝居4編とカルタを知ってもらうことと、その普及であった。

まず、上記3月の研修会と同様に、移住資料館見学の後、講話の中で、「移民」をキーワードにしてグローバル教育と多文化教育のインターフェイスを考えることの



意義や海外移住資料館活用の可能性について解説した。資料館広報担当の福山文子氏の呼びかけで、在校生の多くが外国籍、外国にルーツをもつ子どもを抱える横浜市立いちょう小学校の教師が多く参加していた。そこで、外国に渡って生活をし、また日系人労働者として戻ってきている「日系人」について学ぶことは、日本の多文化共生について考えることにつながることを強調した。講話の後には、紙

芝居やカルタの制作過程を説明し、実際に手に取って活動をしてもらった。参加者の中から、展示も教材として用意されたカルタや紙芝居の内容も小学生には難しいといった意見が出る一方で、「いろいろな国の人たちが日本で生活している現状を、日本人が昔外国で苦勞して生活していたことを知ることから、今いる外国人の人たちに優しくなれたり、理解しようとしたりできる」という意見が出された。

## 6. 教師研修ワークショップの成果

### 1) インターフェイスを意識した学習材の製作

第1回目と第2回目の研修会を通して、移住資料館という場についてのガイダンス、「グローバル教育と多文化教育のインターフェイス」という視点の提示、ワークショップでの具体的な活動手法の提供によって、参加者の中に「移民」をキーワードにして授業を考えることの主体的問題意識が形成された。その成果を『学習活動の手引き』や「移民カルタ」、紙芝居「海を渡った日系移民」「ブラジルのカリナ」の新作2編の内容に組込むことができた。具体的には、ワークショップ参加者から示された視点を反映させた学習指導案、実際にインターフェイスを意識してつくられた読み札の句をそのまま取り入れたカルタ、学校現時に生起する日系人児童をとりまく環境を物語る紙芝居などである。これを第3回の研修会で提示し、参加者からの意見や感想をふまえて最終的に加筆修正を加えて完成させた。

ワークショップに参加した際、その場では楽しく学ぶが、その場で生み出したものやアイデアはその後、実際に活用されることは少なく、参加者自らの経験の中に葬り去られてしまうことが多い。そこで、ワークショップを開催する時、参加者がその場で生み出すものが何かに継続的に生かされるようにと考え、2回のワークショップを通してカルタを製作することにした。第1回の研修会において、カルタの読み札の数句（「横浜の港に戻る海越えて」「春の日に日系祭り大泉」「資料館お話し聞きます三世に」「ブラジルの食卓彩るいならずし」など）をこちらから例示し、参加者によって他の読み札を作成してもらおう。第2回の研修会において、1回目の研修会で詠まれた句を加えて紹介し（「クラスにも日系人のお友達」など）、他の読み札を作成してもらおう。最初の例示の句、その後2回の研修会で詠まれた句を整理し、絵札の絵や写真を選定し、「カルタ」として試作品化する。そして、3回目の研修会でこれまでのワークショップの成果として紹介する。ワークショップでの作業が成果として「形」に残ることで、参加者のモチベーションも高くなる。製品化されたカルタには様々な立場の人の想いが反映されたものになる。「移民」をテーマにして製作したカルタであると同時に、先に示した移民学習の三つの意義を意識した「移民」の教材化をめぐるワークショップの成果が反映された以下のようなカルタが出来上がった。

- 「あ」 阿波おどり ブラジル風は サンバかな
- 「く」 苦しみを こえて手にした 市民権
- 「そ」 祖父母から 聞いている日本は どんな国
- 「と」 隣の子 ブラジルからの 転校生
- 「み」 ミックスプレート お皿の上で 異文化理解

4回目のワークショップでは、完成したカルタを実際にどのように学級で使用するか、その可能性を検討した。

ワークショップでは、カルタづくりの他に、学習指導案も作成した。短時間の活動により、粗い骨組みのようなものだが、インターフェイスが意識された略案も提案された。例えば以下の提案である。

めあて 日系のルーツを学習しながら、異文化について考え、理解する。

### 資料館見学前のなげかけ

(1) 1958年、メキシコ日本語学校の週番日誌の一部を読みあげる。

悪いこと		直したいこと
a : ゴムで遊んでいる人がたくさんいます。	→	ゴムで遊ばないこと
b : チューインガムを噛んでいた。	→	ガムをかまないこと
c : スペイン語を使う人が多い。	→	スペイン語を使わないこと

自分達にとってもa.b.は悪いことか考えさせる。(考え方の違い)

身の回りの道具、材料で遊ぶのは好ましくないよね。

学習する場でのガムはよくない。食べ歩きはよくない。(日本のマナー観)

外国のスポーツ選手はかんでいるよ。集中力がつく。(外国のマナー観)

cについてはどうだろう。(資料館で調べるきっかけ)

何でスペイン語を使うの? 何で日本語を使うの?

何で外国で日本語を勉強するの?

日本でも外国語を勉強する外国の子どもがいる? (川崎市/小学校教師)

ここで提案された活動は資料館見学にむけての子どもたちへのなげかけの場面である。展示場にあるメキシコの日本語学校の週番日誌を教材にして、子どもたちの生活感覚にそった問いかけから導入し、外国で母国語を学習することの意味を考えさせていることがわかる。

## 2) 研修会参加者による移民学習の意義と資料館での学びに対する評価

ここでは、研修参加者の終了時の感想の一部を紹介(下線部筆者)しながら、研修会参加者によって、(1) 移民学習の意義が認識されたか、(2) 国際理解教育における資料館活用が具体的にイメージされたか、について以下の評価視点から検討する。

### <評価視点1> 移民学習の意義について以下の視点で認識できたか。

- 1—① グローバル教育と多文化教育のインターフェイスとしての移民学習
- 1—② 多文化社会における人権教育・市民教育としての移民学習
- 1—③ 国際理解教育における本質主義的文化理解批判としての移民学習

### <評価視点2> 国際理解教育における博物館活用の意義と可能性について以下の視点で認識できたか。

- 2—① 教育メディアとしての博物館の可能性
- 2—② 海外移住資料館を活用した実践への可能性
- 2—③ 海外移住資料館が開発した教材の活用の可能性

### <事例1>

現在、所属している学校には日系人として日本に戻ってきた人々の子どもたちが多く在籍しています。特に、沖縄から外国に渡り、戻ってきた人が多いため、沖縄→外国への移住→日本という学習を総合的な学習でとりくんでいこうという体制は少しあります。しかし、「移民」について

の教師側の知識や理解の少ないのが現状で、保護者（二世、三世）の話を聞く活動が主です。自分と身近な人々の話を聞き、豊富な資料がある資料館の活用ができれば<2—①>、子どもたちにとってもより深い学びになる<2—②>ということを感じました。

日本人が外国で生活をするために頑張ってきたり、日本の文化や伝統を伝えていったことの学び<1—③>と同時に、今、日本に出稼ぎに来ている日系も含めた外国人にも目が向いてほしいと思います。外を見ることで内も見えていけるような活動につなげて<1—①>いきたいです。

（横浜市／小学校教諭）

海外移住資料館という具体的な場のガイダンスとワークショップの具体的な事例を提供した。そこで、参加者は勤務校の子どもの実態や授業の取組みをふまえて資料館活用の意義を見だし、また、「移民」をキーワードにして「外を見ることで内も見えていけるような活動」の授業を考えることの具現化が起きつつあることがわかる。

実際に学級に日系人生徒が在籍し、移住資料館での授業の可能性を考えている他の参加者もいた。

### <事例2>

家族と来日した日系ブラジル人生徒の担任をして2年経ちます。（中略）初めてここに彼女を連れてきたときには、涙しながら展示に見入っていました。2006年度にはブラジル人生徒は計6名になる予定です。彼らと他の生徒たちを巻き込み、ここで何ができるか楽しみ<2—②>です。（中略）「冒頭の『外とのグローバル化』『内なる国際化』が同時進行する事態」をしっかりふまえることが大切です。どうも、外国人労働者の増加とすれ違っているような国際理解教育に違和感を覚えます。まず、街にいる外国人の方々と対話が始まる必要があると思います。」<1—①>

（川崎市／高等学校教師）

学級に在籍する日系人の生徒を移住資料館に連れてくる意義を実感している教師が、研修会を経て、「ここで何ができるか楽しみ」と活用の可能性を自分で検討しはじめている事がわかる。なおかつ、グローバル化と地域の国際化を意識した自らの考えを語っている。つまり、研修によって新しい実践の可能性や、自らの国際理解教育観を整理している。

一方、ワークショップを通して、「私だったらこうする」「日系の子がいる自分の学校ではこうすることができる」といった新しい提案も出された。

### <事例3>

「私自身、ブラジル日系社会に3年もいたので、何か子どもたちに伝えたいな、学習活動に展開していきたいな、と考えてはいるところです。特に、日系社会にはよく言われていますが、戦前、戦後の一昔前の日本がいろいろ残っています。日系人の歴史・生活の様子を学ぶことによって「日本の文化」「習慣」などを学べたらいいな、と考えます。例えば、私はブラジルで初めてこんにゃくや豆腐を作りました。移住資料館の食べ物のコーナーから発展できないかな。<1—③、2—①>

「国際理解教育」「開発教育」「グローバル教育」「多文化教育」「地球市民教育」などいろいろな言葉があってわかりにくい。特に区別する必要はないような気がする。でも、「インターフェイス」の部分があるということは、何がちがうのか、どのように違うのか知りたい。<1—①>

（小学校臨時教師・日系社会青年ボランティア）

展示「移住者の家庭生活」の食卓のコーナーで表現されている「食の多文化化」から手がかりを得て、移民が持ち込む文化のハイブリディティについて食を通して考えさせようとする自分のアイデアを構想している。国際理解に関する領域について「〇〇教育」とカテゴライズされることへの不必要感を感じながらも、研修会を通して「インターフェイス」の話から、〇〇教育とカテゴライズされているものの相違を理解しようとしている。これは、目の前の子どもとの授業をつくる際にメタ思考をしながら授業を構想する土台となるものである。

また、高等学校の教諭は、実際に生徒を引率してくることを想定して参加している。

#### <事例4>

「今年、国際学科というところに在籍していますので、今年JICA訪問を夏に行なってみようと考えていました。今日は伺いたかったことが分かって大変勉強になりました。特に「人物」が大事だとお話がありましたので、人物の歴史を追体験できるようなアクティビティをしてみたい <2—②>と思いました。

例：ガイダンスホールで「事件」を起こす。

(時間を決めて戻らせ、次の「事件」の前に発表させる。ワークシートを作成し、「事件」は1枚ずつ集まったら渡すようにする。)

- ・ブラジルへ移民します。どんな旅行の準備をしますか。
- ・到着しました。一体どんな生活でしたか。
- ・戦争が起きました。あなたの家族はどうなったのですか。<1—②>
- ・今、あなたは家族と帰国しました。今の日本の人に伝えたいことは何ですか。<1—②>

(横浜市／高等学校教師)

この教諭は、移民史を共感的に理解するために人物に焦点をあてて展示を見学するようにさせたいという講話と、「移民」の学習は今の日本の社会を考えることにつながるという講話を受けて、上記のようなアイデアを構想した。外国へむかった「私」が、戦争というグローバルな問題に巻き込まれ、そして日本社会へもどって直面する問題を考えさせている。つまり、グローバル社会と多文化社会のインターフェイスを「私」という人物像を想定して、追体験させているのである。

別の高校教師は次のように授業を構想した。

#### <事例5>

高校の地理で授業を展開するのであれば、国策としての戦前の移住というものの実態をより明確にしておく必要がある。

例：コーヒー栽培としての移住から、都市等に脱出して自営農になる、その要因はなにか。移住という人の移動の要因（プル、プッシュ）を考える。特に経済的側面、社会的、政治的な側面等。高校生になると、展示を切り口に発展させるか、または、展示見学の事前学習にこれらの概説の必要がある。

グローバル教育の視点について

民俗国家という西欧近代思想から離れ民族、文化の重層性、について検討する必要がある。

例：EU、スペイン（アンダルシア、カタルーニャ）など文化が階層をなしている。日本やアジアの各国についても同様<1—②>なことがある。 (横浜市／高等学校教師)

### <事例6>

資料館を見学したのは今回で2回目でしたが、前はざっと見ただけだったので深い理解はできませんでした。今回はじっくり説明なども聞いて見学したので、いろいろな教材が豊富にあることが分かりました。総合の教材として面白い<2—①>と思いました。それは祭りのコーナーで、海外に移住した人々が故郷のことを懐かしみ、太鼓や踊りや民謡などを演じる場面で、一見そこは日本のどこかを思わせる映像なのですが、実は、パナマやポートランド、バンクーバーであったりするわけです。<1—②>実に数多くの移住者が日本から海外に出稼ぎや永住で出ている一方、海外からの日本への出稼ぎや永住はかなり制限を受けて、特に、難民受け入れ等は先進国の中でも最も少ない国の一つになっています。

生徒に上の映像を見せた後、これはどこの国かを質問し、次に群馬県大泉町のサンバの映像を見せ、人間は自分が生まれた故郷、国の伝統や文化を新たな地で生み出し、identificationを図るものだと言うことを示します。<1—②>でも、日本の海外からの受け入れ数は世界の中でも最下位に近いことを統計で示し、どうしてなのか考えさせます。国際化、グローバル化が広がる中、まだまだ日本の閉鎖的な現状を考えさせるきっかけにできればよい<1—②>と思います。  
(綾瀬市／高等学校教諭)

上記二つの提案は、いずれも移民の文化の多様性、「プッシュアップル」要因の双方に視点をあてながら、グローバル社会と多文化社会を考えさせている。「移民」をキーワードにして、グローバル教育と多文化教育のインターフェイスの部分を授業として構想させていることがわかる。<事例6>では、まずワークショップを通して教育メディアとしての博物館を認識し、移民文化のハイブリディティや、日本社会の閉鎖性に注目した授業を構想したことがわかる。

第4回目のワークショップでは、完成した紙芝居やカルタを手にとってもらい、活動を展開した。下記の三つの事例は資料館で開発した教材の活用の可能性について言及されたものである。

### <事例7>

現在、日本に多くの外国人が来ているが、日本にも同じような状況を経験した時代があったということを知ることで、外国（文化・人）について理解が深まると思いました。外国つなごりの子には、ルーツの確認になる。<1—①>敗戦後の日本に中南米の日系人からも援助があったこと、国際理解のテーマがまた増えました。カルタ、紙芝居などいろいろな使い方ができる<2—③>と思いました。  
(横浜市／小学校教師)

### <事例8>

資料館を活用することで、体験をふまえた学習は、その後の行動へ結びつくと考えます。<2—①、2—③>そうした意味において、社会科の目標、そして今日的課題である多文化共生での子どもたちの援助のあり方によりよく寄与していくと考えます。本日のセミナーで触れることができた「カルタ」や「紙芝居」は使用の仕方によって、今ある姿からさらに内容性が深まるものである<2—③>と感じました。しかし、内容が難しいということもあり、最初からうまく活用することが難しいと考えられるので、そうしたモデルを中に含めて現場に広めていくとよいのではないかと感じました。  
(横浜市／小学校教師)

### ＜事例 9＞

資料館を子どもが利用するというのであれば、ワークショップ的コーナーがあればいいのかなあと思いました。例えば「カルタをつくろう」など。＜2—③＞ (東京都／教育関係)

この三つの事例から、カルタや紙芝居を使ってみることを通して、教師に多文化教育教育とグローバル教育のインターフェイスが意識されていること、カルタや紙芝居などの教材をどう活用したらよいか、その可能性を思考していることがわかる。

ここでは研修会参加者の感想文から9事例を取りあげて分析したが、＜評価視点1＞移民学習の意義についての認識①～③、＜評価視点2＞国際理解教育における博物館活用の意義と可能性についての認識①～③のどの視点も見られた。教員研修ワークショップを通して、移民学習の意義、国際理解教育における資料館活用の意義が改めて確認できたと言えよう。

## 7. 結 語

以上、海外移住資料館において筆者らが行ってきた同館を活用した国際理解教育の教師研修の活動を通して、「移民学習」の意義を検討するとともに、国際理解教育における博物館活用の意義と可能性について考察してきた。

研修を重ねる中で、その成果を次の研修に生かすことやカルタや紙芝居などの作品にまとめるワークショップを取り入れるなどして、参加者の研修への参加意欲を高め、主体的な思考を促すことができた。特に、移民学習の意義や資料館活用の意義については、研修を評価するために、その分析の視点として、＜評価視点1＞移民学習の意義についての認識①～③、＜研修視点2＞国際理解教育における博物館活用の意義と可能性についての認識①～③を設定して、ワークショップ参加者の感想文を分析する作業を行った。その結果、海外移住資料館を活用した国際理解教育授業づくりの意義と可能性を確認することができた。

(1.2.3.4：森茂、4.5.6.7：中山)

## 註

- 1) 例えば、日系移民を扱った実践提案や報告に次のようなものがある。(中山 1995、金城 1995、石出 1998、田口 2003、田中 2003、山本 2003、本庄 2004、長屋 2004)。
- 2) 最近報告されたものとして、石田智洋「新しいグローバル教育の小学校社会科における展開—『どうする！—外国人とのご近所づきあい』を中心に—」(日本社会科教育学会第55回全国研究集会発表資料、2005年)がある。
- 3) グローバル教育と多文化教育のインターフェイスとしての「移民学習」の意義と可能性については、次の論文を参照のこと。(森茂 2004)
- 4) バンクス (James A. Banks) も、多文化カリキュラムを構成する六つのキー・コンセプトの一つとして「移民—移住」(Immigration-Migration)を設定し、その概念を学習するための活動例として日系アメリカ人の第二次世界大戦中における強制収容体験を挙げている。(Banks 2003: 59) 尚、この「移民—移住」概念とその教授ストラテジー例については、(森茂 1999: 22)において紹介した。また、アメリカにおいて開発された南北アメリカへの日系移民を扱ったカリキュラムに、(Mukai & Brunette 1999)がある。本カリキュラムについては、(森茂 2006)で紹介した。

- 5) バンクスを中心とするワシントン大学の多文化教育センターが、2003年に行った「多様性、市民性とグローバル教育コンセンサス・パネル」の最終報告書においても、グローバル時代の市民教育において学ばなければならない10の基本概念の一つに「移住」(Migration)があげられている。(バンクス 2006: 58—61)
- 6) 文化学習における「ディアスポラ」と「ハイブリディティ」という視点の重要性については、(森茂 2005: 9—10) 参照。
- 7) 「われら新世界に参加す」という表現は、1978年6月、サンパウロで開催されたブラジル移住70周年国際シンポジウムの折り、当時の国立民族学博物館長梅棹忠夫の基調講演につけられた演題である。
- 8) 『新編新しい社会 6下』東京書籍、2005年、46頁。他社の教科書でも日系移民についてとりあげられている。例えば、『小学社会 6下』教育出版、2005年、39頁参照。
- 9) 作成した紙芝居は次の4種類である。中山京子・森茂岳雄文、金子映夏絵「ハワイに渡った日系人」、紙芝居の作成に当たっては、中山京子・森茂岳雄文、金子映夏絵「弁当からミックスプレートへ」、中山京子文、JICA横浜海外移住資料館「海を渡った日本人」、落合佐江子文・西川洋平絵「カリナのブラジルとニッポン」(共に2005年作成)
- 10) 森茂岳雄・中山京子監修「移民カルタ」(JICA横浜海外移住資料館、2005年)。カルタの作成に当たっては、海外移住資料館の福山文子氏、飯野彩氏の協力を得た。
- 11) 学習活動作成にあたっては、岸野存宏氏(東京学芸大学附属世田谷小学校)、鈴木雄治氏(東京学芸大学附属世田谷中学校)、田尻信壹氏(筑波大学附属高等学校)の協力を得た。
- 12) 本図は、(森茂・中山 2002: 131)で示したものに、「移民」全般を対象にして加筆修正を加え、新たに作成した。
- 13) 本フォーラムについては、(グローバル教育・多文化共生教育インターフェイス研究会編 2004)を参照のこと。

## 引用文献

Banks, James A.

2003 *Teaching Strategies for Ethnic Studies, 7th, ed.*, Allyn and Bacon.

Banks, James A. et al.

2005 *Democracy and Diversity: Principles and Concepts for Educating Citizens in a Global Age*, Center for Multicultural Education, University of Washington.

(平沢安政訳『民主主義と多文化教育—グローバル化時代における市民性教育のための原則と概念—』明石書店、2006年)

Castles, Stephen & Miller, Mark J.

1996 *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*, Macmillan. (関根政美・関根薫訳『国際移民の時代』名古屋大学出版会、2002年)

藤原孝章

1994『外国人労働者問題をどう教えるか—グローバル時代の国際理解教育—』明石書店

グローバル教育・多文化共生教育インターフェイス研究会編

2004『グローバル時代の国際理解教育にむけて—グローバル教育と多文化共生教育のインターフェイス—』神奈川県国際交流協会

浜 邦彦

2005『カルチュラル・スタディーズとディアスポラ —「文化」を批判する文化的アイデンティティ—』武者小路公秀監修『ディアスポラを越えて—アジア太平洋の平和と人権—』国際書院

本庄 豊

2004 「近現代史学習の中の日本人移民・移住史—ブラジル移民・移住史を中心に—」『歴史地理教育』No.674、歴史教育者協議会

石出みどり

1995 「なぜ『ハワイ併合』をとりあげるか」『歴史地理教育』No.580、歴史教育者協議会

伊豫谷登志翁

2001 『グローバリゼーションと移民』有信堂高文社

海外移住資料館編

2004 『海外移住資料館展示案内—われら新世界に参加す—』独立行政法人国際協力機構横浜国際センター海外移住資料館

2005 『学習活動の手引き』国際協力機構横浜国際センター海外移住資料館

金城宗和

1995 「複合社会を志向する『国際理解』教育をめざして—文化的多元主義を尊重するアイデンティティ形成の試み—」帝塚山学院大学国際理解研究所編『国際理解』26号

国連人口基金

2006 『世界人口白書2006 希望への道：女性と国際人口移動』

森茂岳雄編

1999 『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』明石書店

森茂岳雄編

2005 『国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発』（国立民族学博物館研究調査報告56）

森茂岳雄

2002 「グローバル教育と多文化教育のインターフェイス—移民史学習の可能性—」中央大学教育学研究会『教育学論集』第44集

森茂岳雄

2004 「グローバル時代の国際理解教育カリキュラム開発の視点と課題」日本国際理解教育学会編『国際理解教育』Vol.10、創友社

森茂岳雄

2005 「多文化社会アメリカ理解教育の視点と方法—構築主義的授業づくりの試み—」多文化社会米国理解教育研究編『多文化社会アメリカを授業する—構築主義的授業づくりの試み—』

森茂岳雄

2006 「米国における日系移民学習のカリキュラム開発—SPICE『日系移民とアメリカス』の分析—」中央大学教育学研究会『教育学論集』第48集

森茂岳雄・中山京子

2002 「日米の博物館との連携を生かしたハワイ日系移民に関する単元開発と実践—グローバル教育と多文化教育の結合可能性—」中牧弘允編『日米主催の展示における学習プログラムと展示ボランティア活動』（国立民族学博物館研究調査報告26）

Mukai, Gary and Rachel Brunette

1999 *Japanese Migration and the Americas: An Introduction to the Study of Migration*, Stanford Program on International and Cross-Cultural Education.

長屋勝彦

2004 「ブラジル学習」『歴史地理教育』No.674、歴史教育者協議会

中山京子

1996 「アメリカたんけん『いろいろな人がくらしているんだね』—日系人の存在からアメリカ社会の特殊性にせまり、異文化共生の道をさぐる学習—」東京学芸大学日米相互理解教育プロジェクト『日米

相互理解教育のカリキュラム開発研究』(1995年度米日財団プリカレッジ・プログラム研究成果報告書) 第2集

中山京子

2004「学びの場を広げる博物館と学校の連携」『国づくりと研修』No.103(特集:博物館へ行こう)、全国建設研修センター

小笠原喜康

2001「“Hands On”考:知識はどこにあるのか—「反表象主義」の知識観と博物館展示—」チルドレンズ・ミュージアム研究会編『子ども博物館楽校』No.2

Sassen, Saskia

1996 *Losing Control?: Sovereignty an Age of Globalization*, Columbia University Press. (伊豫谷登志翁訳『グローバリゼーションの時代—国家主義のゆくえ—』平凡社、1999年)

田中 泉

2003「日系移民史の教材化—中学校社会科の場合—」『広島経済大学研究論集』第25巻第4号

田口祐二

2003「博物館と連携した総合学習—『大阪再発見!』フィールドワークのとりくみから—」解放教育研究所編『解放教育』No.427、明治図書

椿真知子編

2004『「グローバリゼーションと移民・移住」をテーマとした歴史・地理的分野の教材開発および教育実践』(2003~2004年度東京学芸大学学長裁量費教育実践研究機構プロジェクト報告書)

山本 淳

2003「移民史学習による多文化共生の可能性」愛知教育大学社会科教育学会編『探求』14号

吉田憲司

1999『文化の「発見」—驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで—』岩波書店

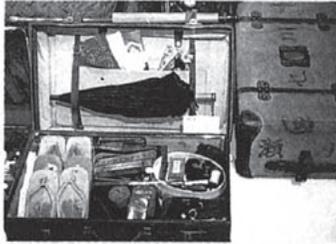
Weiner, Myron

1995 *The Global Migration Crisis: Challenge to States and to Human Rights*, HarperCollins College Publishers. (内藤嘉昭訳『移民と難民の国際政治学』明石書店、1999年)



● 調べたことを作品にまとめよう

**ブラジル新聞**  
ひとみさんは、ブラジルと日本の関係について調べ、新聞にまとめました。



一九〇八年から一九四一年までに、約十九万人もの日本人が移住し、戦後は約七万人が移住しました。現在ブラジルには約百三十万人の日系

**海外移住資料館をたずねて**  
サッカーが好きなわたしは、ブラジルに興味があります。ブラジルに移住した日本人がいることを知り、くわしく調べるために、神奈川県横浜市にある海外移住資料館に行きました。  
ここでは、日本からハワイや南北アメリカ大陸へ移住した人々の歴史や生活の様子が展示されています。わたしはブラジル移民について調べました。



● **資料館探検**  
資料館ではコンピュータを使って情報を得ることができ、調べたいことを検索することができ、また、デジタル画像が豊富にあるので、とてもわかりやすかったです。わたしは、実際に移住した人や二世・三世の人のメッセージを見たり聞いたりできたことがよかったです。

● **資料館で出会ったセレスティさん**  
二世のフジタ・セレスティ・ミエさんに出会いました。ブラジルでは日本語を教えていて、日本語の勉強をしに来ている



人がいます。大地を開こうし、おもにコーヒーや綿花のさいばいの仕事で生計を立てたそうです。ブラジルにわたるときに持っていたトランクが展示してありました。このトランクの持ち主はどんな気持ちで旅立ったのだろうと想像しました。



● **お祝いの日の食卓**  
日系人の食生活を展示しているコーナーがありました。お祝いの日の食卓には、ブラジルと日本の食事がならぶそうです。すしといっしょに、ブラジル風パーベキユーやフェイジョアードという豆料理がならんでいるのが印象的でした。

そうです。三重県で、日系ブラジル人の子どもが学校生活になじめるように助ける仕事をしていたこともあるそうです。わたしたちへのメッセージとして、「日本のいいところを知り、まわりの人とコミュニケーションをとって、強くやさしく、助け合える人になってほしい。」と話してくださいました。

<資料2> 日系移民をテーマにした学習指導案

1. 単元名 (活動名)		海を渡る日系移民			
2. 対 象：小学校6年～中学校 授業者：中山京子	カリキュラム開発の視点				
		1	2	3	4
	A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人格	環境	平和	開発
3. 教科領域との関連性： 小：社会科と総合学習を関連させて 中：社会科、選択、総合学習	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 実施時期：2001年～2003年		5. 総時数：下記事例9時間			
6. 単元 (活動) 目標： ・日本から海を越えて外国へ移民として出ていった人々の歴史的経験を理解し、その苦労や功績を考える。 ・日系外国人労働者として二世三世が来日し、日本の多文化社会を構成している様子を知り、彼等が感じている問題点について考え、これから自分達がどうしていったらよいかを考え、実践する姿勢をもつ。 ・なぜ日々とは海を越えて移動しようとするのか考える。 ・自分達が学んだことや考えたことを作品などに表現をして伝える。				7. キーワード (その他) ・日 系 人 ・移 民 ・多文化社会 ・態度形成 ・表 現	
8. 単元について (教材観・単元設定の理由・国際理解教育の視点など) 国際社会の進展やグローバル化の進展にともない、日本の多文化的状況が加速的に広まってきている。国際理解を推進する時に、外国に目を向けるだけでなく、地域の多文化社会に目を向けることも必要である。本単元では「移民」テーマにして、日本から海外に出ていった人々を通した国際理解、外国人労働者として来日している日系の人々を通した国内の多文化社会の理解をはかることを構想している。つまり「移民」を取りあげることによって、国際理解教育と多文化教育のインターフェイスを具現化していくのである。 本単元の提案は、対象学年の幅を持たせているため、目標は示すが、評価規準はその発達段階に合わせて各授業者が設定するようになる。展開も例として示すが、発達段階、教科領域、学習方法に合わせて授業者が展開を作り替える必要がある。例えば、小学校で実施する場合、6年生社会科の国際理解の単元で「日本と関わりが深い国」でブラジルをとりあげて、ブラジル移民を例に数時間扱いで授業を展開することも可能である他、総合学習として時数を多めにとり、地域在住の日系人の方との交流活動と一体化しながら展開することもできる。中学校では、歴史的分野において日本から移民を排出した時期やその背景、戦中戦後の日系人の様子を理解し、公民的分野においては、国際社会と多文化社会に関連させて日系人について触れるなど、集中的に特設単元を設定して学習を進めるのではなく、従来の社会科学習の中で分散させて触れていくことも可能である。ニューカマーが集住している地域においては勿論、少数でも日系人児童・生徒が在籍している学校において、日系移民の歴史的経験について理解し、共生社会を築いていこうとする姿勢を育てることは重要なことである。 本単元では、日系移民の歴史的経験を理解する手だてとしてJICA海外移住資料館（神奈川県横浜市）の活用を構想した。日本には移民に関する展示資料をもつ、日本ハワイ移民資料館（山口県大島町）、生活資料館・ハワイ移民資料館（広島市）、広島市（デジタル）移民博物館（広島市）、アメリカ村資料館（和歌山県美浜町）、外務省外交資料館（東京都）、旧神戸海外移住センター（神戸市）、博物館明治村ブラジル館					

(愛知県)等があり、また、全米日系人博物館 (Japanese American National Museum) ホームページが日本語に対応している。これらの資料館・博物館を効果的に学習に活用したい。日系の方と交流を持ち、話を直接聞く機会があればそれにこしたことはないが、地域から排出した移民についての体系的な資料から学んだり、学びの場を求めてネットワークを広げたりすることも、国際社会に生きる大切な資質である。

### 9. 連携（関係性）について：本実践において大切にしたい四つの関係性

- ・子どもと子ども：学習場面における子ども同士の相互啓発的な学びあい
- ・子どもと教師：学習場面における子どもと教師の対話を通じた授業づくり
- ・教師と外部機関：資料館や博物館との連携
- ・子どもと外部機関：子どもと資料館職員との関わり

## 10. 展 開

次／時	主な学習活動と子ども（学習者）の意識	○留意点
1 次 1時間	○地域社会にはどんな外国人が暮らしているだろうか。 ・在日外国人（コリアン、中国人など） ・留学生 ・ 海外駐在員 ・日系外国人（ブラジル、ペルーなどから） ・外国人労働者 ・ 移住してきた人々	○ニューカマーと呼ばれる人々の多くは日系が多いことから日系に焦点化をしていく。法務省入国管理局HPなどを利用して地域の外国人登録者数データを作成して資料を示す。
2 次 2時間	○海を渡った日系移民はどのような歴史的経験をしてきたのか。資料や海外移住資料館で調べてみよう。 ・いつごろ、なぜ移住をしたのか。 「農村の経済状態と希望のはざまで」 ・偏見や差別と戦った経験 ・第二次世界大戦の日系アメリカ人の経験 「強制収容と忠誠」「賠償補償獲得までの闘い」 ・南米への移住政策とそこでの暮らしの様子を知ろう 「棄民と呼ばれて」「ブラジルのハレの日の食卓」	○地域の移民に関する資料を持つ資料館やそのホームページなどを積極的に利用する。近くに利用できる資料館がない場合など、参考になる児童図を活用し、3次の活動に時間をとる。発達段階に合わせて無理のない程度の理解をはかるようにする。
3 次 2時間	○日本に来ている日系の人びとの生活や直面している問題点は何か。話を聞いてみよう。 ・ファミリーヒストリーを伺おう。 ・子どもの学校の問題はどうなっているのか。 ・地域社会での生活で悩んでいることは何か。	○話をさせていただく方とよく打ち合わせをし、子どもたちに投げかけたい話題を共通理解しておく。苦労話を聞くだけでなく、彼等の地域社会での活動の一端も見せたい。彼等の言葉から共感的に考えられるようにしたい。
4 次 2時間	○日系の人びとが困っていることについてどう考えたらよいか。 ・もっとコミュニケーションをたくさんとる。 ・相手が願っていることを聞いて、どうしたら実現できるか考える。 ・お互いのいいところや知らないことを知る努力、伝える努力をする。 ・解決にむけて行動を起こそう。 ○地域の多文化社会を表しているものを探してみよう。 ・多言語表示の看板、案内板 ・地域のコミュニティセンターでの活動	○これまで共感的に理解したことをもとに、自分の言動、地域社会で見られる姿についてふりかえり、これからどうしたらよいか、自分のこととして考えるようにする。 ○地域の多文化社会を象徴している物を探したり、行政上の支援の実態を理解したりする。 ○まとめの活動として作品化や活動を展開計画の最後に設定したが、

<p>5 次 2時間</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多文化マップづくりをしてみよう</li> <li>○伝えよう</li> <li>・作品化：かるた・紙芝居・絵本・物語</li> <li>・作動：学校や資料館でのプレゼンテーション、劇発表・多言語表示掲版作成の運動</li> <li>・ホームページなどを通してネット上への発信</li> </ul>	<p>学習の流れによっては、2.や3.の段階で部分的に作品化をしていくことも検討する。また、活動を起こして実行していく中で、それがまとめの活動そのものになることも予想される。</p>
--------------------	--	---

### 11. 評価計画：

- <体験目標> 評価方法：言動・行動観察・記述  
資料館を訪れたり、日系人の方からの話を聞いたりする活動に主体的に取り組んだか。
- <知識目標> 評価方法：言動・行動観察・記述  
日系移民の歴史的経験や現在の在日日系人の社会的状況を理解できたか。
- <技能目標> 評価方法：発言・記述・作品  
資料調査やインタビューを実施し、学んだことや考えたことを表現することができたか。
- <態度目標> 評価方法：言動・行動観察・記述  
多文化社会に生きる自分のあり方を考え、どうしていったらよいか考え実行しようとする。

### 12. 苦勞した点

本単元は、全米日系人博物館の巡回展示「弁当からミックスプレートへ—多文化社会ハワイの日系人—」を活用して、沖縄の小学生、大阪の小中学生、和歌山の中高生を対象にして、実践を行った。学校のカリキュラムに本学習活動をどのように位置づけるか、つまり、総合学習として実施するのか、教科学習の発展に位置づけるのか、または課外活動に位置づけるのかといったカリキュラム上の問題に加え、日系移民に関して授業者の知識的サポートをどのように行うか、博物館見学を実現するための諸経費や日程の問題、学びを支えるための博物館と学校との連携の問題など、課題がたくさんあった。一番の課題は、学習者の目の前にモノとして提示できないような「移民」という社会事象をどのように伝えていくかということであった。対象の発達段階によっては日系農民の作業服といった具体物の提示から始めたり、写真資料提示からはじめたり、または人口統計や年表といった資料提示から授業を始めるなど、発達段階に合わせて具体的に考えられるように授業を導入した。そして発達段階があがるにつれて、「移民」の問題を現在の日本の多文化社会の進展やグローバル化と関わらせて考えられるように構想したが、その例を実施した地域の地域的素材から関連づけられるような事例探しに苦勞をした。

### 13. 改善するとしたら

- 改善に向けて以下のことが考えられる。
- ・実施しやすいように、教科書や教科学習内容と関連性をもたせる。
  - ・地球の移民に関して話をしてくれる人材発掘や資料を日常的に探しておく。
  - ・地域の多文化化について学習者がじっくり考えられるような時間と情報を十分に準備したい。

### 14. 授業づくりのための参考資料

日系移民および日本の多文化的状況について教師が理解を深めた、子どもに提示するものとして主な著書の一部を以下に示した。授業の中で写真資料や新聞記事など活用できる物はこの他にもある。

(教材研究向き)

- ・藤原孝章『外国人労働者問題をどう教えるか—グローバル時代の国際理解教育—』明石書店、1994。
- ・モンセ・ワトキンス著、井戸光子訳『ひかげの日系人』彩流社、1994年。
- ・駒井洋編『日本のエスニック社会』明石書店、1996年。
- ・岡村太郎『多民族共生社会ニッポンとボランティア活動』明石書店、2000年。

- ・森茂岳雄「日系アメリカ人をめぐる歴史展示の多文化ポリティクス」国立歴史民俗博物館『歴博』No.103, 2000年, 6-10頁。
- ・原尻英樹『日本の中の世界一つくられるイメージと対話する個性―』新幹社, 2003年。  
(子どもにも読みやすい物)
- ・ケン・モチヅキ著, ゆりよう子訳『かこいをこえたホームラン』岩崎書店, 1993年。
- ・M.O.タンネル&G.W.チルコート著, 竹下千花子訳『トパーズの日記―日系アメリカ人強制収容所の子どもたち』金の星社, 1998年。
- ・坂井俊樹監修『国境をこえた人々の歴史』ポプラ社, 1999年参照。
- ・森茂岳雄, 中山京子, 川崎誠司『日系アメリカ人の歴史―アメリカに渡った日系移民の歩み―』全米日系人博物館, 2000年。

## 15. 学びの軌跡 (感想文、作品、ノートなど)

●移民の人のつくった歌のようなものを読んだ。すごく短い文だったが、ハワイに対する強いあこがれがあったこと、そして現実にはハワイに来てみての生活のつらさを感じられた。それでも弱音は吐かないぞと自分に言っているかのようなだった。アメリカ村があるのは知っていたが、こんなにも多くの人が移住していたとは。ハワイの方が日系アメリカ人に対し、待遇がよかったような感じがしたけど「真珠湾攻撃」により様々な苦勞をしたことを知った。田辺にもフィリピン人が多く見られるほど、外国人労働者が増えてきている。私たちが直面している一つの問題である。外国人労働者は安い賃金でやとるので、これからさらに就職難がひどくなるだろう。私は大学で経済学部に行って、経済史、さらにこれからのこういう問題をどう対処するかを学ぶつもりである。  
(和歌山県立高校3年女子)

●戦時中の差別問題は小学校から学習してきたが、日本人、日系人に関しての問題というのはほとんど聞かなかったから、実際のところを本当に身近な問題としてとらえたことはなかった。しかし今日、三尾村の話と「弁当からミックスプレートへ」の展示を見て、大きく印象に残ったことがある。

一つは和歌山県から外国への移民が非常に多いことだ。移民について考えたことはほとんどなかったわけだが、これには驚いた。

二つ目は太平洋戦争中の日系人への差別があったことだ。こんな身近に考えるべき問題があり、興味があった。確かに日系人の立場というのは戦争のように混乱している状況では、非常に弱いものとなっていただろう。『スマイルの戦争』の一部を読み、同じ日系人の間でさえも「自分はアメリカ人だ」「自分は日本人だ」と言って争いが起こっていたことに何ともいえない悲しい気持ちを感じた。

私が「日系人」という言葉を正確に知ったのは、実は今日が初めてである。ごくたまにテレビや新聞に取り上げているのをちらっと見たことはあるが、実際にどういうものかというのは知らなかった。今日あるハワイ、カナダの笑顔。あの笑顔の裏には、大変深い移民者たちの歴史があるということを知ることができ、非常に意義ある時間を過ごせたことを嬉しく思っている。最後に「弁当からミックスプレートへ」で感じたことだが、ああいうふうにも多文化の人々が「食」を通じて交流することができ、それが独自の文化として根づいているのがとても興味をひいた。それぞれの文化を尊重することも大事だが、それぞれの文化を合成してまた違った一つの文化を創るのもおもしろそうだと思う。

(和歌山県立高校3年 男子)

●ハワイ、日本の文化が混ざり、いろいろなものや言葉ができたことおどろきました。自分が移民をしたら、その国のマナーや言葉、食べ物などを教えてほしいし、沖縄に移民してきた人がいたら、ここの生活をくわしく教えてあげたい。始めは、移民した人たちは別に自分に関係ないし、なんで移民したかなんて知りたくもないと思っていたけれど、とつても苦勞して、つらい思いをして移民生活をして、しかも沖縄の人なんてとつても身近じゃないかと思ひ、同じ人間なんだから知らないといけないんじゃないか、と思うようになりました。  
(沖縄小6男子)

●移民の意味を聞いた時は、「どうして移民したんだろう。移民をしたら楽だったのかな。」と不思議な気持ちでした。でも、学習をして初めて「移民はとつても苦勞していた。」ということを知り、あらためて移民の大変さを知りました。特に、ハワイ移民が、とつてもきびしい労働をしながらも、賃金を母国に送ることを怠らなかつたことがすごいと思いました。私が移民をしたら差別をせずにつつに接してほしいし、

近くに移民してきた人がいたら、ふつうに接していきたいと思う。博物館でたくさん調べていくうちに、資料さがしが楽しいと思いました。

(沖縄小6年女子)



全米日系人博物館巡回展示にて紙芝居を読みあう高校生 (於国立民族学博物館)

## 16. 備考 (授業者による自由記述)

本単元開発の詳細は、森茂岳雄・中山京子「日米の博物館との連携を生かしたハワイ日系移民に関する単元開発と実践—グローバル教育と多文化教育の結合可能性—」中牧弘允編『日米共催の展示における学習プログラムと展示ボランティア活動』(国立民族学博物館研究調査報告26号)2002年を参照。



# 北米タイコの新時代

－ 第二世代の登場と新しいコミュニティの広がり －

小嶋 茂 JICA横浜海外移住資料館研究員

## 〈目次〉

### はじめに

1. 北米タイコとは
2. 北米タイコと和太鼓との違い
3. 北米タイコの新時代 タイコファミリー第二世代の登場
4. 2005年 Taiko Jam に見るタイコの将来
5. コミュニティメンバーの発言に見るタイコの変容
6. 私たちが学ぶこと

キーワード：タイコ、アイデンティティ、日系コミュニティ

## **The New Era of North American Taiko : Arrival of the second generation and spread of a new community**

Shigeru KOJIMA, Japanese Overseas Migration Museum

Abstract : North American Taiko was born and created in the Japanese American communities from the second half of 1960s to 1980s. North American Taiko, as they call it, is different from Wadaiko (Japanese taiko) not only because of the wine-barrel made taiko and its sound, but especially in its distinctive human relations. Many Japanese Americans find in Taiko a sense of community or belonging peculiar to Taiko communities and also the importance of sharing which are accepted also by non-Japanese Americans. Some of them still find a way of identifying themselves as a Japanese American. 2005 North American Taiko Conference was held in L.A. and there were 671 participants with 107 groups, 56 workshops and 9 discussions. This was the fifth conference and new tendencies were recognized such as the increase of young experienced Taiko players, the arrival of the second generation and the diversification of the Taiko groups. With the appearance of the new generation, the aspect of performance was more stressed and we can divide the groups into four types that were represented in Taiko Jam Concert.

Key Words : Taiko, identity, nikkei community

## はじめに

2005年7月ロサンゼルスにおいて第5回北米タイコ会議（North American Taiko Conference）が開催された。1997年の第1回会議から数えて8年目のこの会議には、総勢671名の参加者と107団体が集い、56のワークショップと9のディスカッションからなる多彩なセッションが催された。また、今年の会議には日本からも5団体が参加した。そして本会議を通じて実感されたことは、まさに北米タイコが新時代に入ったということであった。北米タイコの歴史やその意義に関しては雑誌『たいこるじい』（高他 1998：9-62、小野 2001：1-29）などに詳しく紹介されており、大塚千枝、寺田吉孝などの先行研究がある（寺田 2002：205-228、大塚 1998：45-52）。今その詳細は省くが、北米タイコの特徴を簡単に紹介すると以下のように整理できる。



「タイコ会議のワークショップ風景」

### 1. 北米タイコとは

日系アメリカ人によって始められた北米タイコは、和太鼓を基礎としながらも、自分たちの音楽環境や生活感覚を反映した演目や演奏スタイルを創ることに積極的に取り組んできた。その特徴は二つある。コミュニティ意識や帰属感、親和感（sense of community, belonging）を大切にしていること。そして分かち合い（share）である。これは、和を尊ぶと同時に、互いに差異を認め受け入れながらいっしょにやっていくという集団主義、個別性を認めた上での集団主義である。いわば日本の和の精神とアメリカ的なデモクラシーを絶妙に調和させたような、たいへん心地よい集団である。

### 2. 北米タイコと和太鼓との違い

この北米タイコと和太鼓の違いは、ワイン樽を再利用して作られたタイコというハードにも象徴されるが、タイコファミリーとも呼ぶに相応しい、タイコを巡るその集団における関係性、人間関係にある。それは洗心寺開教師マサオ・コダニが強調するように、「エゴを捨てて楽しむ（enjoy）」ことであり、語り太鼓のリンダ・ウエハラ・ホフマンやサンフランシスコ太鼓道場の田中誠一が指摘するように、北米タイコでは、みんなが「笑顔を見せ（smile）ながら互いに楽しんで叩いている」ことである。タイコはどんな文化背景の人々をも受け入れられると同時に、その集団は他を思い遣る気持ちや包容する力があり、年齢・性差に関係なく共有できる寛容な集団でもある。今日、北米には150を越えるタイコ・グループがあり、多様化してきているといわれるが、北米タイコの原点は、このコミュニティ意識と分かち合い、そしてエンジョイすることに集約できる。そして、現在においてもこの流れは主流を占めている。

### 3. 北米タイコの新時代 タイコファミリー第二世代の登場

北米タイコの新時代とは何を意味するか。端的に言えば、日系三世を中心としたアイデンティティ

の模索や意思表示、コミュニティ活動としてのタイコから、パフォーマンス・アートとしてのタイコへと新しい段階に入ってきたことである。言い換えれば、戦時中の日系人強制収容の歴史の遺産を背負い、マイノリティとしての生き方を模索し、自分たちの道を一步一步築いてきた世代から、その次の世代へと時代が移ったということである。

第一世代は、サンフランシスコに渡った田中誠一、および鬼太鼓座や鼓童といったグループの影響を受けて、1960年代後半以降80年代までに創設された初期タイコ・グループのリーダーたちである。これらのタイコ・グループは大きく分けて二つのタイプがあり、一つは日系三世の自己表現あるいはステレオタイプの打破を目的としたもの、もう一つは日系社会を活動の基盤として共同性・チームワークを重視したグループであった。(寺田 2002: 207-218)

そして、その世代から学んだ世代、あるいは子どもの世代が第二世代である。北米タイコのパイオニアグループであるサンフランシスコ太鼓道場、キンナラ太鼓、サンノゼ太鼓、サクラメント太鼓団といったグループの指導のもとに育った世代が、第二世代として、今その表舞台に登場してきたのである。

この第二世代は、第一世代が直面したような、社会におけるマイノリティとしての生き方や意識が真剣な問題として必ずしも迫られることのない世代、あるいはそうした社会状況に育った世代である。この第二世代に見られる活動の特徴は、パフォーマンス・アートとしてのタイコであり、大きな転換点に来ていると思われる。そして、このことは二つの側面から確認できる。

#### 4. 2005年Taiko Jamに見るタイコの将来

第5回北米タイコ会議のイベントとして行われたタイコ・ジャム・コンサートでは、Mu Daiko, Stanford Taiko, Zenshin Daiko, TAIKOPROJECTの4グループによる公演が行われた。そして、この4グループはタイコ・コミュニティの将来を暗示するような4典型を如実に表していた。すでに寺田は、1990年代以降のタイコ音楽の多様化の中で、子供だけのグループや大学生のグループ、日系社会につながりをもたないグループが出現してきたことなどを指摘しているが(寺田 2002: 219-223)、その多様化の方向性がより鮮明になったと思われる。

その4典型とは以下のようなものである。第一は日系コミュニティに基礎を置く、いわば伝統的なグループである。これはZenshin Daikoに見られるように、日系コミュニティ組織・仏教会などを中心にしており、メンバーは子どもが主体であったり、子どもから壮年までがいっしょに演奏するグループである。

第二はアートとしての探求を目指すグループである。個々の演奏者レベルの意識は別として、グループ全体としては日系アイデンティティとは関係がない。そして、文化としてのタイコ、純粹にアートとしてのタイコを目指すもので、プロとして活動するグループも見られ、非日系のメンバーも多い集団である。Mu Daikoの場合がこれにあたり、パフォーマー9名のうち日系は2名であった。

第三は大学生などの若者のグループであり、Stanford Taikoがこれに該当する。第一世代などから教えを受けて育った日系人が中心となることが多いが、そうしたメンバーに触発されて日本文化に関心を抱いた同世代の若者が加わった大学などのグループである。

そして第四のグループは、前衛的、試行的な手法を取り入れて、パフォーマンスとしてのタイコを追求するグループである。第一世代の子ども世代を中心としており、タイコ演奏者としての経験や関わりも豊富で、パフォーマンスを前面に押し出した演奏を行っている。TAIKOPROJECTはまさにこの第一世代の子供たちという申し子からなるグループで、独特な位置を占めているといえる。

こうした多様化の傾向は時代の変遷とともに今後も進み、第一世代の抱いていた意識とは離れた意識のもとにタイコと関わる世代も増えていくであろう。しかし全体にわたり共通した傾向は、舞台におけるパフォーマンスの重視である。その上で、そうした傾向のもとでも共通して引き継がれている基本線がある。それは、コミュニティ意識と分かち合い、ならびにみんなでエンジョイすることである。この集団における関係性は、大きな遺産としてタイコ・コミュニティで受け継がれ、着実にその広がりを見せている。非日系の人たちの間にもさらに広がっていくであろう。しかし、日系人にとっては、もちろんすべての日系人ではないとしても、確たる一部の日系人にとっては、ニッケイとしてのアイデンティティやコミュニティとの関わりでタイコ音楽が重要な場を提供し続けると予想される。それはタイコが遅れて到着した南米においても、同様な現象が起こりつつあることを考えると疑いの余地がない。

次にもう一つ別の側面から見てみよう。

## 5. コミュニティメンバーの発言に見るタイコの変容

タイコ会議期間中、コミュニティメンバーのリーダーたちの発言<sup>1)</sup>には、タイコ・コミュニティの変容に関する重要な側面が指摘された。今その中から3名の発言者の内容を整理して紹介する。

マサオ・コダニ師は、タイコ愛好人口の増加とアフロ・キューバ系リズムの傾向を指摘し、もっと各地域の特色が表現できたら好ましいと発言した。「タイコを演奏する人口が増加したが、これはタイコの音楽としての魅力に惹かれて加入してくる人たちが増えてきたことを示す。しかし、そのリズムの多くはアフロ・キューバ系リズムの流れを汲んでいるように思われる」と述べた上で、コダニ師は次のように続けた。「ステージでの演奏の様子を見ることなく舞台裏で演奏だけを聞いていると、同じような演奏で区別がつかず、どこのグループかよく分からない。その意味でハワイのグループだけは、ステージを見なくともハワイのタイコだと分かる自分たちの特色もっている。各々のタイコグループが自分たちの地域の特色を出せたらよいと思う」と。



「タイコ・ジャム・コンサート後に踊りを楽しむ参加者たち」

サンノゼ太鼓のP.J.ヒラバヤシも、若者の参加者増加やタイコ・踊りのもつ影響力、そして若き指導者の出現やタイコモデルの多様化など、重要な点に関し少なくとも4点について言及した。ヒラバヤシによれば、第一に「2003年の第4回大会から若者の参加が目立つようになった」こと。第二には、タイコ・ジャム・コンサート後に自然発生的な踊りの輪ができたことに関し、「炭坑節、東京音頭を楽しみながら踊るといようなことは自分たちの時代には考えられなかった」ことや、「『ええじゃないか(ヒラバヤシ自身による創作曲)』のハイパーテンポ(が披露されたこと)」には圧倒された」こと。さらには、「はにかむことなく自然発生的に踊りの輪ができたその場には、確としたコミュニティ感覚が存在し、そこには壁を乗り越え揺り動かす有機的な力があり、単なる楽しみではなく、他の人々やコミュニティにも影響を与えうる」と述べている。そして第三には、「若者がリーダーシップを取るようになり、その中から指導者(mentor)も現れた」と述べ、世代交代に差し掛かっていることも示唆している。第四としては、「タイコの演奏様式・グループ形態・楽器の種類などが多様化し、ネットワークも広がったことから、自分のスタイル・モデルを選べるようになった」こと、「第一世代は自分

たちのスタイルをまさにゼロから作り出していった」ことを述べた。さらには、「1997年には踊りはたくさんなかったが、とくに1999年の『はなゆみ』の紹介以降、歌や踊りがタイコ表現に大きく貢献した」こと。その上「そうしたコミュニティ意識の中で、コミュニティイベントであるお盆などの再評価にも貢献した」ことを述べている。そして、ヒラバヤシの閉会セッションにおける締めくくりの言葉は、その優しさに満ちた笑顔とともに印象的かつ感動的であった。「タイコ・コミュニティにおける多様性を自覚し、互いを受け入れ、分かち合っていくことは、より大きなコミュニティに関連して、いかに互いにコミュニケーションし、分かち合い、夢を膨らませていくかに大変たいへん重要な意味をもつ」と。

ニューヨークを基盤とする僧太鼓のアラン・オカダもつぎの2点を強調していた。若くかつ経験豊富なタイコプレイヤーの増加と、北米タイコの特徴としての「分かち合い共有すること」の重要性である。オカダは参加者に関する具体的なデータをあげて「第3回（2001年）、第4回（2003年）の参加者は半分以上が1年から2年のタイコ経験者だったが、第5回（2005年）の参加者は三分の二が3年以上の経験者だった」ことを指摘し、「最初は若者が減ったのかと心配したが、実は若くて経験豊富なプレイヤーが増えた」ことが分かったとユーモアを交えて報告した。そして、タイコ・ジャム・コンサート後のフェスティバル（踊りの輪）に言及して、「その場にいた日本の太鼓奏者林英哲が『どうして北米各地から集まった様々な人々が、あのように即興でいっしょに同じ踊りを踊れるのか』と驚いていた」のに対し、オカダは「北米タイコ・コミュニティでは、みんなが知識やテクニックを分かち合い、共有し、コミュニケーションするから」だと返答し、そこが日本の太鼓の状況とは異なる点だと理解したという。

## 6. 私たちが学ぶこと

北米タイコ・コミュニティのタイコや踊りに、新世界における新しいかたちのコミュニティの進展、広がりの可能性を感じ取る人々、そして魅了される人々が増えていることは間違いないであろう。とくに、その分かち合い共有していく姿勢は、北米タイコ・コミュニティの原点であるが、この運動が日系人の中から生まれ広がってきたものであることに注目したい。これはタイコ第一世代が自分たちの置かれた生活環境や日本文化の中から模索して築き上げてきたものであるが、それはまさに日本人初期移住者社会の姿、さらにはかつての日本社会におけるコミュニティの原型ではなかっただろうか。オカダは2年前のタイコ会議において筆者が行ったインタビューに対し次のように答えている。「太鼓はかつて、コミュニティにおける人々の表現だったと思います。日本の伝統的な太鼓では、そうした表現をイベントやフェスティバルで現わしているほか、エンターテイメントやパフォーマンス・アートとしても活用しています。私が望むのは、多くの人々にとって太鼓がコミュニティとしっかりと結びついたもので、その生活の一部となること。そして、人々が祝い、時を刻み、楽しく過ごすことに役立つ手段になってくれることです」。こうした伝統は日本でも生きているのだろうか。

日本における和太鼓の歴史については、西角井正大や茂木仁史の先行研究があり（西角井 1990、茂木 2003）、民俗行事や祭りの場における太鼓の役割および地域の伝統文化を守るものとしての機能が指摘されている。また、近年日本においてもパフォーマンスとしての和太鼓はその人気を盛り返し愛好人口が増えてきている。しかし、和太鼓を巡るその場が、北米におけるようなコミュニティ意識や分かち合いといった関係性を築いているかは不透明である。コミュニティ意識の崩壊が急速に進んでいる日本で、その防波堤としての役目をタイコに期待するのは短絡的であろうか。

冒頭で述べたように、北米生まれのこのタイコ・コミュニティの集団主義は、個々の違いや特性を

認めた上で、集団としての和や共有を尊ぶ帰属意識、集団意識であり、デモクラシーに依拠した集団主義だといえる。個人の自由を認めるとともに、他人を自分と同等のものとして扱う思想がそこに感じ取れる。そして、われわれ日本人にとっても、日本文化の伝統とは何かを問い直すとともに、自分たちが受け継ぐべきものは何かを再考する貴重な機会を提供してくれている。

## 註

- 1) タイコ会議中の開会・閉会総会における発言、及び個別の会話での発言（筆者による和訳）

## 引用文献

茂木仁史

2003『入門 日本の太鼓—民俗、伝統そしてニューウェーブ—』平凡社

西角井正大編

1990『民俗芸能 [二]』日本音楽叢書、音楽の友社

小野美枝子編

2001『たいころじい』第18巻「特集 二十一世紀、和太鼓はどこへ行くのか」浅野太鼓文化研究所  
大塚千枝

1998「北米における和太鼓の発展」『たいころじい』第16巻、十月社

高他毅編

1998『たいころじい』第16巻「特集 ジャズ・カントリーに轟く和太鼓」十月社

寺田吉孝

2002「タイコにみる伝統の創造 —日系アメリカ人の新しい音楽—」『日系アメリカ人の歩みと現在』  
ハルミ・ベフ編、人文書院

# 海外移住資料館の写真

－ 「六世が誕生したハワイのビッグ・ファミリー」 にみるマルチ・エスニック化する家族模様 －

**城田 愛** 大分県立芸術文化短期大学国際文化学科講師  
海外移住資料館元研究員

## 〈目次〉

1. ハワイにおける日系移民たち
2. 六世をさがして
3. 1枚の写真から織り成される家族模様

キーワード：ハワイ日系移民 官約移民 家族 六世 マルチ・エスニック化

## Hawai'i's Sixth Generation of Japanese Migrants and Multi-Ethnic Family on the Photo at Japanese Overseas Migration Museum

Chika SHIROTA, Oita Prefectural College of Arts and Culture

Abstract : This article focuses on the photo of the sixth generation of Japanese migrants to Hawai'i and their multi-ethnic family members, which is displayed at Japanese Overseas Migration Museum.

Key Words : Japanese migration to Hawai'i, Kanyakuimin, the sixth generation, multi-ethnic family

### 1. ハワイにおける日系移民たち

1885（明治18）年1月、横浜から944人<sup>1)</sup>がハワイに向けて出航した。この人びとは、日本政府とハワイ王朝とのあいだで結ばれた条約（官約）にもとづき、サトウキビ農園で3年間働くためにハワイへ渡った「ハワイ官約移民」である。この制度は1894年まで続き、10年間のあいだに約3万人がハワイ諸島へ向かった。官約移民の6割以上は、ハワイでの貯金をたずさえて故郷へ戻ったと推定されて

いるが、そのまま残ってハワイに永住することになった人や、のちに北米などへ移り住んだ人もいる。これらのハワイ官約移民たちが、日本からハワイへの、そして北米や南米などへの移民の先駆者である。

2000年度のハワイの統計結果によると、「エスニック別 (Ethnic Stock) 人口」の統計では、表1がしめすとおり、ハワイの全人口約115万人のうち、約18%の21万人ほどが「日系 (Japanese)」となっており、この表中のエスニック範疇における単独のエスニック背景をもつ集団としては、最も多くなっている (ただし、先住ハワイアン系を除く)<sup>2)</sup>。ハワイ以外のアメリカの他州においても、アメリカ以外の移住先国においても、日系の人びとが、州レベルの行政区においてハワイのように数の上でマジョリティを占めるところはない。

日本からハワイへ渡った一世を筆頭に、その子どもである二世、孫である三世、そして四世、五世と続き、今日では「日系六世」が誕生するようになっている。移民開始から120年がたつて、六世代目になり、日系以外の複数のエスニック背景をになう人びとも家族の構成員として増えている。しかしながら、日系家族の絆は今日もなお繋がっており、多文化社会の現代ハワイに広がっている。本稿では、1枚の家族の集合写真から、マルチ・エスニック化する日系の家族構成についてみていく。

## 2. 六世をさがして

わたしは、2001年4月から2003年の3月までのあいだ、海外移住資料館の연구원として資料館創設のプロジェクトにたずさわった。この2年間には、生涯忘れることはできない非常に貴重な経験をする機会に恵まれた。展示を創りあげていくなか、多くの人びとと資料にであうことができた。展示物の1点1点、写真の1枚1枚、証言映像の1シーン1シーンのどれをとっても、資料提供者も関係者のかたがた、そして展示する側のさまざまな思いが詰まっている。とりわけ、個人的にも格別の思い入れがあるのが、日系六世がうつつている家族の集合写真である。

展示でもちいる写真を選定しているとき、展示監修者である中牧弘允国立民族学博物館教授が、ハワイに日系六世が誕生しているという情報を入手され、六世の写真をさがしだすというオーダーがくだされた。2001年の10月、ハワイの日系新聞である『ハワイ報知』や『ハワイ・ヘラルド』、『ハワイ・パシフィック・プレス』などに問い合わせ、日系六世に関する情報を探しているという記事を紙面に載せてもらった。

しかし六世についての情報がいっさい得られないまま、2002年に突入し、その年の10月の開館に間に合わせるため、展示用の写真を入稿する締切り日が迫ってきていた。その頃のEメールをみると、2002年の2月7日、わたしから中牧教授へ送信したメールに「本日、たった今 [国際電話にて] はいりました情報によりますと、マウイ生まれの日系六世が、嬉しいことに、二人もいるとのことです」とある<sup>3)</sup>。

わたしは、急ぎよ、2002年2月13日から同月18日までマウイ島へ調査に行き、この六世の家族を取材した。そして、その子の家族のルーツをたどり、六世であることが確認できた。ぜひとも、この六世を含む家族の集合写真を展示に使うために新撮したい、と家族に集まってもらうように頼んだ。撮影は、地元の家族写真や高校の卒業写真などを長年、撮り続けているナガミネ写真館に、展示用に引きのばせるように4×5のポジ・フィルムで撮るよう依頼した。こうして、3月3日の日曜日、この記念すべき六世がうつつた家族写真が撮られ、国際エクспレスメールにとポジ・フィルムが横浜に送られ、なんとか無事に展示に間にあったのである (写真1)。

### 3. 1枚の写真から織り成される家族模様

海外移住資料館の常設展示のしめくり部分のひとつである「ニッケイ・ライフ・ヒストリー」では、「生まれる、育つ、成人として、老いる」というテーマごとに移住者たちの写真が飾られ、その終り部分の「家族のきずな」には、展示場で1番目か2番目に大きい写真（写真2）が飾られている。この展示をとりまとめる写真こそが、上述の六世がうつっている写真である。

この写真には、官約移民時代、日本からハワイへやって来た1組の夫婦の孫にあたる世代から、そのまた孫やひ孫の家族および姻族たちがうつっている。この一世夫婦は、山口県佐波郡富海村（現防府市）から、第19回官約移民として、三池丸で1891（明治24）年6月18日、ハワイに到着した。夫の加屋新吉氏は1854年生まれ、渡航時は36歳、妻のヒサ氏は1871年生まれ、渡航時19歳であった<sup>4)</sup>。妻は妊娠中であったため、ハワイに到着した年の11月13日、二世が生まれている。そして、その二世の長男にあたるのが、写真のなかでは最高齢の1910年生まれの三世の男性（椅子列の右端）である。この三世は、敬虔なキリスト教徒で、92歳になろうとしていた撮影時も毎週日曜日には教会へかよっていた。この三世の左隣の4人は四世であり、椅子列の右から5番目の女性の左にいるこの四世の娘は五世にあたる。

そして、その五世の膝の上に座っているかのじょの息子が六世である。男児の父親は左側に座っている。1998年12月生まれのこの六世の男児は、日本の他にも、中国、フィリピン、ドイツ、アイルランド、ポルトガル、タヒチ、サモアなどからの移民や先住ハワイアンにもルーツをもつ。

また、写真の椅子列の左から6番目、両親にはさまれて座っている女兒も六世であり、日本、ポルトガル、フィリピン、中国、ドイツ、先住ハワイアンにルーツをもっている。この女兒の家系は、マカデアアナツ・チョコレートを考案したといわれる「ハワイアン・ホースト」社の滝谷ファミリーにもつながりがある。

日系移民の関連書物や展示で使われてきた家族の集合写真の中心には、一世などの最年長者がくるが多かったが、この写真の中央には二人の六世が座っている。このように、六世たちを写真の中心にすることによって、一世から六世までの世代の繋がり、そして世代を重ねるごとにハワイの多文化社会をますます反映するようになってきた日系の家族構成の広がり象徴的に示している。

この写真の大家族のように、ハワイの日系のりびとは、日本につながるルーツの縦糸と、ハワイにひろがるローカルの緯糸を織り混ぜながら暮らし、家族を、社会を、そして文化を築きあげてきているのである。

#### 註

- 1) 初代のハワイ官約移民の人数には、諸説がある。
- 2) 参照したオリジナルの表の注によると、この表中でもちいられているエスニシティは、回答者の父親または母親、あるいは本人の自己申告によるものとされている。ただし、この表からは、統計結果しかわからず、この統計の質問内容および、回答はあらかじめ用意されていたエスニック範疇から選択する形式だったのか、自由に記述回答できるものだったのかはわからない。
- 3) 六世を探し出し、六世を含む家族の集合写真をとるためのコーディネーターをつとめてくれたのは、マウイ在住の沖繩系三世のAimee（旧姓Shirota）Yatsushiro氏である。集合写真中、最高齢の三世の男性は、

Yatsushiro氏の義父にあたる。Yatsushiro氏の母であるMasako Shirota氏（後ろから2列目、右から3番目のサングラスをしている女性）は、1915年にマウイで生まれ、1920年から1937年まで沖縄で過ごした沖縄系帰米二世である。Masakoの亡夫の祖父と、沖縄出身のわたしの祖父の祖父は兄弟であった。城田家は、沖縄から日本各地、ハワイ、北米、ブラジル、ペルーへ移住している。わたしは、これまで各地に点在する城田家の約530名分のデータを入手し、どのような家族構成をしているのか、また名前、墓、位牌などの継承はどのようになっているのかなどについて調査してきた。そして、「大阪生まれの沖縄系三世」という視点から、文化人類学的に移住を視ていく「ミグリチュード (migritude) 人類学」にとりくんできている (Shirota 2002、城田 2004a、城田 2004bなど)。

- 4) この一世夫婦に関しては、ハワイやアメリカ大陸部に居住する末裔のかたがたが調べたデータだけでは、漢字表記や渡航年月日などに関して不明な点が多かったため、山口県大島郡周防大島町に立地する日本ハワイ移民資料館の官約移民データベースに問い合わせしてみた (2003年10月15日、FAXにて)。その結果、この夫婦の氏名の漢字表記、渡航年月日、渡航船の名前、渡航時の年齢などに関する情報を得ることができた。ご協力いただいた日本ハワイ移民資料館にたいして、御礼もうしあげます。

## 引用文献

Schmitt, Robert C. (ed)

2002 *Hawai'i Data Book: A Statistical Reference to Hawai'i's Social, Economic and Political Trends*. Honolulu: Mutual Publishing.

Shirota, Chika

2002 Eisaa: Identities and Dances of Okinawan Diasporic Experiences. In Ronald Y. Nakasone (ed) *Okinawan Diaspora*, pp.120-129. Honolulu: University of Hawai'i Press.

城田 愛

2004a 「ハワイの日系・沖縄系移民社会の歩みと動き：博物館にみる生活文化の過去、現在、未来」後藤明、松原好次、塩谷享編『ハワイ研究への招待：フィールドワークから見える新しいハワイ像』pp.137-154、西宮：関西学院大学出版会。

2004b 「オキナワンの踊りと音楽にみるハワイ社会：エスニシティの交差する舞台から」後藤明、松原好次、塩谷享編『ハワイ研究への招待：フィールドワークから見える新しいハワイ像』pp.249-260、西宮：関西学院大学出版会。

表1 エスニック背景別にみたハワイの人口比 (2000年)

エスニック背景	(背景の詳細)	人 数 (単位：人)	人 口 比 (%)
複数のエスニック背景をもたない人びと (先住ハワイアンを除く)	欧米系 (Caucasian)	237,019	20.50
	日系 (Japanese)	211,364	18.28
	フィリピン系 (Filipino)	141,696	12.26
	中国系 (Chinese)	47,103	4.07
	コリアン系 (Korean)	11,510	1.00
	サモア系/トンガ系 (Samoan/Tongan)	11,173	0.97
	アフリカ系 (Black)	10,829	0.94
	複数のエスニック背景をもたない人びと (先住ハワイアンを除く) の合計	670,694	58.02
先住ハワイアン/複数のエスニック背景をもつ先住ハワイアン (Part Hawaiian)		254,910	22.05
複数のエスニック背景をもつ人びと (先住ハワイアンを除く)		230,410	19.93
合 計		1,156,014	100.00

注) “Table 1.32 Ethnic Stock by Counties: 2000.” Hawai’i Data Book : A Statistical Reference to Hawai’i’s Social, Economic and Political Trendsを参照し作成した。この表には、オリジナルの表に記されているとおり、米軍関係者や米軍関係者用宿舎の居住者、Niihau島およびKalawaoの住民は含まれていない。なお、参照した表では、「複数のエスニック背景をもたない人びと」は「Unmixed」、「複数のエスニック背景をもつ人びと」は「Mixed」となっている。また、「欧米系」などの原語は「背景の詳細」列の丸括弧内に示した。



【写真1】 六世が誕生したビッグ・ファミリー ハワイ州マウイ島 撮影：ナガミネ写真館（2002年3月）



【写真2】 海外移住資料館の「ニッケイ・ライフ・ヒストリー」の「家族のきずな」のコーナー

